

博士学位論文

日本語における名詞述語文の記述的研究

—運動を表す場合と形容詞の規定語をとる場合を中心に—

平成 31 年 3 月

孟 令禕

岡山大学大学院
社会文化科学研究科

目 次

第一章 序論

1. 本研究の目的	1
2. 研究史	1
2.1 「物がたり文」と「品さだめ文」	2
2.1.1 佐久間（1941）	2
2.1.2 三上（1953）	3
2.1.3 益岡（1987・2000）	4
2.2 文の対象的な内容のタイプ化	7
2.2.1 文の意味的なタイプをめぐって	7
2.2.1.1 文の意味的なタイプを一般化する作業とは何か—奥田（1988a）—	7
2.2.1.2 述語の意味的なタイプについて—奥田（1988b）—	8
2.2.1.3 文の対象的な内容の観点から—奥田（1996）—	11
2.2.2 時間的限定性の観点から見る述語の意味的なタイプ—工藤（2002a・2012）—	12
2.3 時間的限定性と叙述類型の対照	16
2.4 名詞述語文の意味的なタイプについて	17
2.4.1 名詞述語文における主語と述語の意味的な関係—高橋（1984）—	17
2.4.2 名詞述語文の意味的なタイプについて—佐藤（1997）—	21
3. 本研究の研究対象	28
4. 本研究の構成	30

第二章 運動を表す名詞述語文について

1. 本章の目的	31
2. 運動名詞述語文のモーダルな意味について	32
2.1 はじめに	32
2.2 本節の考察対象	32
2.3 認識的な文について	33
2.3.1 断定形と推量形の基本的な対立	
—事実確認かつ新情報の伝達と事実未確認の対立—	34
2.3.1.1 断定形—〈事実確認かつ新情報の伝達〉—	34
2.3.1.1.1 現在・過去の事象の直接確認	34

2.3.1.1.2 疑う余地のない事実の断定	35
2.3.1.2 推量形―〈事実未確認〉―	36
2.3.1.2.1 話し手の推量	37
2.3.1.2.2 推量した帰結の聞き手への念押しの確認	37
2.3.2 断定形と推量形の二次的な対立（用法）	37
2.3.2.1 〈事実未確認〉を表す断定形―〈推量・確信的断定〉―	38
2.3.2.1.1 未来の事象に対する推量・確信的断定	38
2.3.2.1.2 現在・過去の事象に対する推量・確信的断定	39
2.3.2.2 〈事実確認〉を表す推量形―〈共有情報〉の伝達―	39
2.4 意志表示的な文について	40
2.4.1 勧誘・命令文	40
2.4.1.1 勧誘文	40
2.4.1.1.1 うながし的な勧誘文	42
2.4.1.1.2 きっかけ的な勧誘文	43
2.4.1.2 命令文	45
2.4.2 決意文	47
2.5 おわりに	48
3. 運動名詞述語文のムード的・テンスの・アスペクト的な意味について	49
3.1 はじめに	49
3.2 先行研究	49
3.3 調査方法及び考察対象	51
3.4 テンスとムードについて	54
3.4.1 確認・記述（新情報の伝達）である場合	54
3.4.1.1 述語に焦点があたる場合―テンソ対立がある	54
3.4.1.2 述語に焦点があたっていない場合―テンソ対立が中和する	56
3.4.2 確認・記述（新情報の伝達）ではない場合	58
3.4.2.1 話し手の評価感情が前面化される場合	58
3.4.2.2 発見・想起（再確認）が前面化される場合	58
3.5 アスペクト的な意味について―継続性と完成性	59
3.5.1 継続性について	59
3.5.1.1 非過去形―〈現在＝継続性〉	59
3.5.1.2 過去形―〈過去＝継続性〉	60
3.5.2 完成性について	61
3.5.2.1 非過去形―〈未来＝完成性〉	61
3.5.2.2 過去形―〈過去＝完成性〉	61

3.5.2.2.1 述語に焦点が当たっていない場合	62
3.5.2.2.2 ムードが変容している場合	62
3.6 パーフェクト性について	63
3.6.1 非過去形—〈現在＝パーフェクト性〉	63
3.6.2 過去形—〈過去＝パーフェクト性〉	64
3.7 反復性について	64
3.7.1 非過去形—〈現在＝反復性〉	65
3.7.2 非過去形—〈未来＝反復性〉	65
3.7.3 過去形—〈過去＝反復性〉	65
3.8 おわりに	65
4. 本章の結論	67

第三章 形容詞の規定語をとる名詞述語文について

1. 本章の目的	68
2. 形容詞の規定語をとる名詞述語文の使用実態について—主語が人である場合—	68
2.1 はじめに	68
2.2 調査の方法	69
2.3 調査結果の概要	70
2.4 個別語彙の考察	74
2.4.1 「人」「人間」—【主体／人間／人間】	74
2.4.2 「男」「女」「男性」「女性」—【主体／人間／男女】	77
2.4.3 「母親」「父親」—【主体／家族／親・先祖】	83
2.4.4 「画家」「タレント」「職人」「弁護士」「刑事」「教師」—【主体／成員】	83
2.5 おわりに	84
3. 形容詞の規定語をとる名詞述語文のテクスト的機能について—「形容詞＋人だ」の場合—	86
3.1 はじめに	86
3.2 先行研究	87
3.2.1 《説明》としてはたらく述語に「のだ」をともなう文の記述—奥田（1990）—	87
3.2.2 《説明》としてはたらく名詞述語文の記述—佐藤（2001a）—	88
3.3 「形容詞＋人だ」による《説明的なむすびつき》のタイプ	92
3.3.1 〈本質的な特徴づけ〉と〈一般化の判断〉	93
3.3.2 〈一般化の判断〉と〈評価的な判断〉	95
3.3.3 〈発見的な判断〉	98

3.3.4 〈必然の判断〉	100
3.3.5 〈理由〉	100
3.3.6 〈判断の根拠〉	102
3.3.7 〈感情の源泉〉	103
3.2.8 〈具体化・精密化・いいかえ〉	104
3.3.9 〈思考の内容〉	105
3.4 おわりに	106
4. 本章の結論.....	107

第四章 結論

1. 本研究が明らかにしたこと	109
2. 今後の課題.....	111
資料一覧.....	113
参考文献.....	115

第一章 序論

1. 本研究の目的

名詞は、人や物といった実体をさししめし、格のカテゴリーを備え、文のなかで主語や補語になるのが基本的であるが、述語になることもできる。そして、名詞が述語になる場合、実体の意味を失いつつ、主語にさしだされる人や物の属性（《質》《特性》《状態》《運動》といった広義的な意味の属性）を表すようになる¹。「太郎は学生だ」のような、主語にさししめられる人（物）の《質》を表すものが典型的な名詞述語文であるが、そのほか、「太郎は優等生だ」「太郎が今空腹だ」「太郎は明日三時に出発だ」のような、《特性》《状態》《運動》を表すものがある。そして、名詞述語文には、主語と述語の二単語からなるもののほかに、さらに形容詞の規定語をもつ、「彼はやさしい人だ」のような三単語からなるものがある。

動詞述語文に比べれば少ないとはいえ、典型的な名詞述語文についての研究はかなり進んでいる。そこで本研究では、非典型的であり研究の少ない、「お客様が到着だ」のような《運動》を表す名詞述語文や「彼はやさしい人だ」のような形容詞の規定語をもつ名詞述語文を対象とする。《運動》を表すのは、基本的に動詞述語文であるが、名詞述語文もまた《運動》を表すとすれば、それは一般的な動詞述語文とどのような違いがあるのかということが課題となる。また、人や物を《質》の観点から特徴づけるのが名詞述語文であり、《特性》の観点から特徴づけるのが形容詞述語文であるとすれば、形容詞と名詞のくみあわせによって人や物を特徴づける文は、一般的な名詞述語文と比べて、その意味と機能においてどのような特徴をもつのかということが課題となる。本研究は、非典型的な名詞述語文の記述的研究であるが、その前提には、文の意味的なタイプの体系という考え方がある。

以下では、日本語における名詞述語文の研究史を振り返り、それとの関係で、本研究の位置づけを示す。

2. 研究史

文の意味的なタイプという観点からの日本語の名詞述語文の研究は、佐久間鼎の研究から始まる。これは、研究史上、非常に重要である。演述文（平叙文）を「物がたり文」と「品さだめ文」に分類する佐久間の議論は、三上章や益岡隆志によって、動詞述語文と名詞述語文を大きく対立させ、後者における題述関係を重視する方向に展開した。その後、益岡隆志

¹ 奥田（1967）、鈴木（1972）を参照。このような意味の属性は、特徴と呼ばれることもある。

は、この議論を叙述類型論として発展させた。一方、奥田靖雄の述語の意味的なタイプの議論を出発点とし、それを踏まえて、高橋太郎、佐藤里美らが名詞述語文を記述した。そこで重視されるのは、主述関係である。奥田の述語の意味的なタイプに関する議論は、工藤真由美の時間的限定性の議論に受け継がれ、発展した。

2.1 「物がたり文」と「品さだめ文」

本節では、まず、佐久間鼎が提起した文の類型に関する議論の中での名詞述語文の位置づけを確認し、それを三上章や益岡隆志がどのように受け継ぎ、発展させたかを見ていく。

2.1.1 佐久間 (1941)

佐久間 (1941) は、カール・ビューラーの言語機能論を参考にして、日本語の文を「表出」「うったへ」「演述」の三種類に分けた。「演述」機能を担うものを「いいたての文」と称し、いいたての文は、主語と述語によって組み立てられると指摘している（下線は筆者による）。主語と述語は平叙文を構成する一次的な要素であると主張しているのであろう。

演述における文の組立は、のちに立入つて述べるやうに、多くの場合に主語の存立を必至とするものです。少なくとも主語と述語とが文を組立てる成分として缺くことの出来ないものになつて來ます。(中略) 文を組み立てる骨組となる成分として、主語と述語とをあげるといふことになり、それを一般的なテーゼとしましたから、そのうちのいずれか一つを缺いてゐるやうなものは、一つの文と見做すにしても、それはその成分が省略されたものだとして取扱ふといふことになつたわけです。

(佐久間 1941: 149-150)

このような考え方から出発し、佐久間は「いいたて文」を図1のように分類した。まず、「いいたて文」を、時所的限定が必要である「物がたり文」と「品さだめ文」に二分類する。また、意味の違いによって、「品さだめ文」を「性状規定」と「判断の表現」に分ける。

「物がたり文」は、「事件の成行を述べる」文で、時所的限定が必要である。「(何々) が (どうか) **する** [した]」という構造をとる。(何々)にあたるものは主語で、「が」で示され、「(どうか) する」は述語である。この場合、動詞が述語に求められる。

「性状規定」は「物事の性質や状態をいひあらはす」文である。「(何々) **は** (どんなか) **だ**」という構造をとる。主語は、(何々)にあたるもので、「どんな性質か状態を示す物または事」であり、「は」で提示される。また、その述語となるのは、「**どんなか**」にあたる部分で、形容詞と形容動詞によって表される。

「判断の表現」は「判断をあらはす」文で、「(何々) **は** (何か) **だ**」という構造をとる。主語は主に「は」で示されるが、必ずそうであるというわけではない。述語には体言が使われ、「だ」(佐久間はコプラと名づける)でしめくくるのが、「判断の表現」の特徴であると

指摘されている。

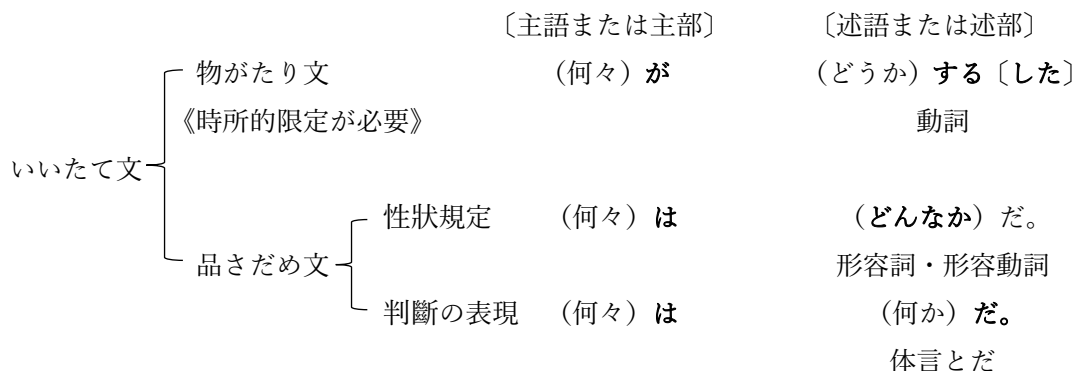


図1 佐久間（1941）におけるいいたて文の類型（佐久間（1941）の記述にもとづく）

以上のように、佐久間は、主語と述語がいいたて文の基本的な構造をなすと認めつつ、時所的限定、主語の形態、述語の意味・品詞によって三つのタイプを立てた。述語が形容詞・形容動詞・名詞であるものの中にも時所的限定のあるものがあるという点については不十分とはいえ、時所的限定に注目した点、品さだめ文を性狀規定と判断の表現に下位分類している点などは、日本語研究史上、きわめて重要な意味をもつ。

2.1.2 三上（1953）

三上（1953）は、佐久間（1941）のいいたて文の分類を受け継ぎ、平叙文を「動詞文」と「名詞文」に分類したうえで、さらに「名詞文」を「形容詞文」（形容詞述語文）と「準詞文」（名詞述語文）に分けた²。「動詞文」は「事象の経過（process）」を表し、「名詞文」は「事物の性質(quality)」を表すものとする（三上 1953: 41）。また、形式面に関して、名詞文は「ハ」で表されるのが原則であるが、動詞文は係助詞「ハ」がなくてもよいと述べている（三上 1953: 42）。さらに、「時、所、物の三大範チュウのうち、名詞文には物の範チュウがあらわれ、動詞文は時の範チュウの下に立つ。動詞文は次いで所の範チュウをも必要とする」と指摘している（三上 1953: 142）。このように、三上は、平叙文を「動詞文」と「名詞文」に分類する際、佐久間の意味・形式・時所的限定の観点からの分類法をそのまま継承している。

² 述語に使われる単語の語幹に接尾辞「サ」がつけられる文を「形容詞文」とし（「高サ」「静カサ」）、つけられない文は「準詞文」とする（三上 1953: 42）。

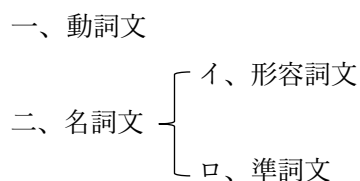


図2 三上における平叙文の分類（三上 1953: 41）

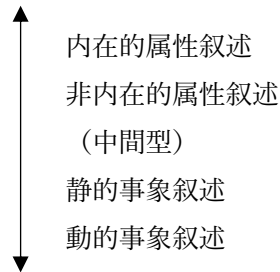
ただし、よく知られているように、三上は日本語における主語の存在を認めず、日本語の構文の説明として、いわゆる西洋文法の主述関係を否定し、代わりに「主題－解説」の題述関係を主張している。主題を提示するのが「ハ」である。そして、「何々ハ」は文末の述語と呼応するのに対して、「何々ガ」がかかるのは動詞の語幹であるとした。言い換えれば、「何々ハ」という部分は述語と対等的であり、題述関係をなしているのに対し、「何々ガ」という部分は、「コト」（dictimu、命題）の一部となる（三上 1975: 198）。例えば、「太郎ガ 次郎ヲ なぐった」において、「太郎ガ」と「次郎ヲ」はともに動詞の語幹にかかるという点では、特に違いがないので、「～ガ」は主語ではなく、補語と見ることになる。三上によって、名詞述語文は、意味だけでなく、構造の点で、動詞述語文（無題文）と大きく異なる文として位置づけられることになった。この点は、次に見る益岡隆志の研究に受け継がれることになる。

2.1.3 益岡（1987・2000）

益岡（1987）は、命題の構造の解明から出発し、「叙述類型」という概念を提唱した。「現実世界を対象として表現者がおこなう概念化」を「叙述」と呼び、さらにそれを「属性叙述」と「事象叙述」の二種類に分けた。「属性叙述」は「現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べる、というもの」であるのに対し、「事象叙述」は「現実世界の或る時空間に実現・存在する事象（出来事や静的事態）を叙述するもの」であると定義している（益岡 1987: 21）。この二分類は、佐久間の「品さだめ文」と「物がたり文」にほぼ対応しているだろう。

また、益岡（1987）は、時空間的限定の有無に注目して、「属性叙述」を「内在的属性叙述」と「非内在的属性叙述」に分け、「事象叙述」を「静的事象叙述」と「動的事象叙述」に分けて、次のような連続性を認めている。

〈典型的属性叙述〉



〈典型的事象叙述〉

図3 属性叙述類型 (益岡 1987: 35)

時空間的限定という考えは、佐久間の時所的限定を受け継いでいるようであるが、佐久間が物がたり文と品さだめ文の区別において時所的限定の有無に注目しているのに対して、益岡は、「属性叙述」の下位分類のために時空間的限定の有無に注目している。

また、益岡（1987・2000）は、三上における有題文と無題文の構造の区別を継承し、叙述の類型と命題の構造との関係について次のようにとらえている。すなわち、「属性叙述命題」は「主語・述語句構造」となり、「主語と述語句の対等な結合により構成される」のに対し、「事象叙述命題」は「述語・補足語構造」となり、「述語中心の構造」とであるとされている（益岡 1987: 24-25）。

さらに、両者の命題の構造の違いは、主語の有無にかかわるとしている。基本的に、「属性叙述」では、「～は」の部分が述語と「対立的な関係」にあり、主語があると認められるが、「事象叙述」では、主語があるか否かは、有題になるか無題になるかによって決まるとする（益岡 2000: 80-81）。以下は、益岡（2000）からの引用である（下線と傍点は筆者による）。

属性叙述は、属性の持ち主を表す部分とその属性を表す部分という二つの部分からなる。

「太郎は数字に強い。」という表現においては、「太郎は」が属性の持ち主を表し、「数字に強い」がその属性を表す。（中略）「太郎は」は述語とは相互依存の関係にあり、属性の一部を構成するものではない。（中略）属性叙述における属性の持ち主を表す「～は」または「～には」の部分を「主語」と認定したいと思う。その理由は、先に述べたように、属性の持ち主を表す部分が述語句の外に位置し、述語と相互依存の関係、すなわち対立的な関係にあるからである。

（中略）

事象叙述の場合であるが、事象叙述の表現に主語が認められるかどうかは、基本的には、有題になるか無題になるかに依る。すなわち、「父は私にお祝いをくれた。」のような有題の

場合は、「父は」の部分「私にお祝いをくれた」という部分から分離され、述語と対立的な関係を結ぶことになるので、主語と認定される。(中略)

一方、「父が私にお祝いをくれた。」のような無題の場合は、「父が」は「私に」、「お祝いを」と同様に述語「くれた」に依存・従属する成分であり、「くれた」という事象の一部を構成する要素(述語句内の要素)となるので、主語の資格は持たないものとする。

(益岡 2000: 80-81)

主語を認めるか否かという点では、三上と異なるが、三上の主題を主語に置き換えれば、三上の考え方はそのまま益岡に受け継がれているといえよう。

そのほか、益岡(1987・2000)は、叙述類型と述語の類型との関係についても言及している。基本的に、〈典型的属性叙述〉は名詞述語文によって表され、一方、〈典型的事象叙述〉は動詞述語文に表されるところ。ただし、名詞述語文でも事象叙述を表すものがある一方、動詞述語文でも属性叙述を表すものがあるとしている。益岡の類型化では、名詞述語文の叙述類型には次の四つがあるとされている。

例文	叙述類型	命題の構造
①「彼は作家だ」	内在的属性叙述	「主語・述語句構造」
②「花子は病気だ」	非内在的属性叙述	「主語・述語句構造」
③「花子が病気だ」	静的事象叙述	「述語・補足語構造」
④「田中さんが到着だ」	動的事象叙述	「述語・補足語構造」

(益岡(2000: 46-47)にもとづく)

以上述べてきたように、佐久間は、主語と述語の存在をいいたて文(平叙文)の構造上の特徴とし、時所的限定の観点から、それを「物がたり文」と「品さだめ文」に二分類している。これは、日本語の構文論史上において、先駆的な研究であるといっても過言ではない。こうした佐久間の考え方は、三上によってかなり忠実に継承されたが、同時に、構文論的な側面については、主述関係の否定、題述関係の重視という方向に展開し、無題の動詞文と有題の名詞文の構造の違いが強調されることになった。なお、佐久間の、品さだめ文における、性状規定と判断の表現の区別の重要性は、三上には理解されず、名詞文における形容詞文と準詞文の違いは述語の品詞の違いにすぎない。益岡は、佐久間・三上の両者を忠実に継承し、発展させている。三上が否定した主語の概念が復活しているが、無題の動詞文と有題の名詞文の構造の相違に関する三上の主張は、実質的にほぼそのまま継承されている。この考え方は、佐久間と同じく、名詞述語文に限らず、述語文のすべてについて、主語と述語を文の中核的な成分と認め、文の対象的な内容は主語と述語によって組み立てられるとする、後述する立場と対立する。

本研究にとって、益岡の研究で重要なのは、叙述文を単純に事象叙述と属性叙述に分ける

のではなく、事象叙述を動的・静的に分け、属性叙述を内在的・非内在的に分けることによって、両者を連続するものととらえている点である。これは、後述する、時間的限定性の観点からの述語のタイプ化の考え方に通じるところがあり、名詞述語文を記述するための基礎となる考え方であるといえる。

2.2 文の対象的な内容のタイプ化

佐久間からの直接の影響はないと思われるが、主語と述語を平叙文の中核的な成分と認めている点、「時間の局所限定」の観点をもつ点、実質的に「性状規定」(《特性》)と「判断の表現」(《質》)を区別している点において、佐久間と同じ考え方をしている立場がある。ここでは、この立場の研究として、奥田靖雄、工藤真由美、高橋太郎、佐藤里美の研究を取り上げる。

2.2.1 文の意味的なタイプをめぐって

2.2.1.1 文の意味的なタイプを一般化する作業とは何か―奥田(1988a)―

言語活動の基本的な単位である文には、対象的な内容の側面とモーダルな意味の側面があり、この二つの側面は相互作用している³。このことについて、「してもいい」という述語形式をもつ文を例として説明したのが奥田(1988a)である。奥田は、文の対象的な内容のタイプを一般化する作業について、次のような指摘を行っている(番号と下線は筆者による)。

- 1) 文の対象的な内容をタイプに一般化するにあたって、まずはじめに必要なてつづきは、たぶん、述語の位置にあらわれてくる単語、単語のくみあわせ、慣用句の語彙的な意味をタイプに一般化することであるだろう。他方では、主語の位置にあらわれてくる単語、あるいは単語のくみあわせの語彙的な意味をタイプに一般化することが必要である。
- 2) この一般化の作業は、述語は主語との関係のなかで、主語は述語との関係のなかでおこなわれなければならない。(中略)つまり、この作業は文の文法・意味的な構造のなかでおこなわれることが必要なのであって、そうでなければ、単語の語彙的な意味の一般化におわってしまう。構文論的なカテゴリーとしての述語の意味的なタイプ、主語の意味的なタイプは、単語の語彙的な意味を、文の文法・意味的な構造からはなれて、一般化することからは手に入れることはできないだろう。
- 3) この一般化の作業は、モーダルな意味やテンポラルな意味のような、重要な、文の文法的な意味とのかかわりのなかですすめなければ、その一般化の方向と程度とが見えなくなる。たとえば、主語にさしだされるものが《人》であるか、《物》であるかということ、

³ 文の対象的な内容とモーダルな意味とは、内容とその存在形式の関係にある、文の意味的な内容における二つの側面であり、両者を形式的に切り離すことはできない。この点で、従来の命題とモダリティーの議論とは根本的に異なることに注意しなければならない。

述語にさしだされるものが《動作》であるか、《状態》であるかということは、文の文法的な意味の実現にとって重大な意味をもってくる。主語にさしだされる人あるいは物が
いちいちの個体であるか、それともクラスであるかということ、述語にさしだされる動
作あるいは状態がいちいちの具体であるか、反復的なものであるか、習慣的なものであ
るか、それとも潜在的な特性であるかということ、このようなことが対象的な内容の一
般化の過程のなかで問題になるのは、文の文法的な意味の実現がまさにそのことにかか
わってくるからである。

(奥田 1988a: 26-28)

このような考え方を踏まえて、奥田は文の意味的なタイプを一般化する手順としては、ま
ず、文の陳述の中核となる述語の意味的なタイプを、文のテンポラリティーとの関係におい
て、「時間の局所限定」という観点から、一般化する作業を奥田 (1988b) で行った。続い
て、奥田 (1996) では、文を分類する観点の一つとして、文の対象的な内容のタイプに注目
した。さらに、平叙文を対象に、「時間的ありか限定」⁴の観点から、具体的な出来事、反復
的な出来事、習慣的な出来事、一般化された出来事に分類した。以下、この二つの研究を中
心に取り上げる。

2.2.1.2 述語の意味的なタイプについて—奥田 (1988b) —

奥田 (1988b) は、「時間の局所限定」の観点からロシア語における述語の意味的なタイプ
の分類を行ったブルイギナの記述をもとに、日本語における述語の意味的なタイプを一般
化する作業に取り組んで、その意味的なカテゴリーをとりだすことを試みた。ブルイギナは
述語の意味的なタイプを、《質》と《現象》に大きく分けて、次のように述べている⁵。奥田
は、「この記述は述語の意味的なタイプの分類の土台」であると見ている。

質は時間から相対的に独立している、対象の特徴づけをさしだして、世界そのものを
特徴づけている。その世界にとって、あたえられた陳述は真実なのである。はんたいに、現
象は客体の存在のあるモメント、あるいは断片を記述して、むしろうつりかわっていく、特
定の《世界の状態》のみを特徴づけている。 (奥田靖雄著作集刊行委員会編 2015: 111)

ブルイギナのこの記述にもとづき、奥田は、述語の意味的なタイプを、《時間の局所限定》
を受けないものと《時間の局所限定》を受けるものに二分類した。この二つは、前述した佐

⁴ この論文においては、「時間の局所限定」と「時間的なありか限定」とは明確に区別されているが、両者
をまとめて「時間的なありか限定 (時間的限定性)」と呼ぶこともあり、注意が必要である。両者にはつな
がりがあるが、現時点では区別する必要があると思われる。なお、一般アスペクト論で使用される「時間
的限界性」(telicity) は、これらとはまったく別の概念である。

⁵ 奥田 (1988b) は、集中講義の資料であり、入手困難なので、『奥田靖雄著作集 02 言語学編 (1)』(2015)
に収録されたバージョンを引用する。

久間（1941）における、時所的限定を受けない「品さだめ文」と時所的限定を受ける「物がたり文」と対応しているを見ていいだろう。

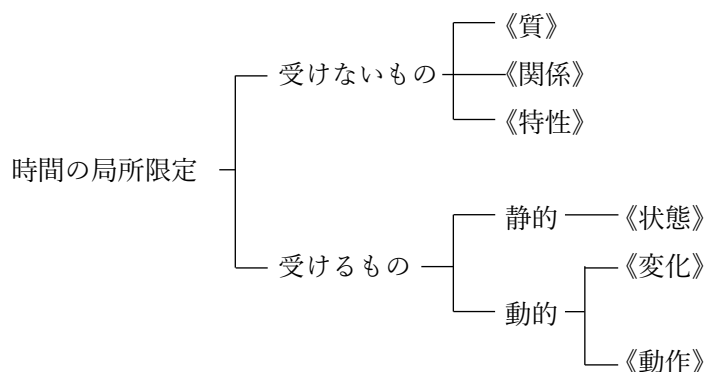


図4 奥田（1988b）における述語の意味的なタイプ（奥田（1988b）の記述にもとづく）

また、「時間の局所限定」を受けないものについて、ブルイギナは《質》という用語にまとめているが、奥田は、さらに《質》と《特性》に分ける必要があると主張している。《質》は本質的な《特性》のセットであり、アクチュアルなものへ移行しないのに対し、《特性》は物の一つ、あるいはいくつかの側面であり、他との関係のなかでは、アクチュアルなものへ移行するという違いがある。前者は主に名詞述語文で表されるが、後者は主に形容詞述語文で表される。例えば、「くじらは動物だ」のような《質》を表す名詞述語文は、「今日はくじらは動物だ」とはいえないが、「北海道は寒い」のような《特性》を表す形容詞述語文は、「今日は北海道は寒い」のように、「時間の局所限定」を受けて、《状態》へ移行することができる⁶。以上のことを奥田は次のように述べている（下線は筆者による）。

この《質》と《特性》とのちがいは、名詞述語と形容詞述語との、典型的な例をあげることでかなりはっきりするだろう。

質というのは、客体の存在からきりはなすことのできない、本質的な規定性を表現するカテゴリーであって、ある客体をべつの客体からくべつする可能性をあたえる。このような客体の質は、その客体の《特性》の総体のなかにあきらかにされるだろう。かんたんにいえば、質はひとつの物からほかの物をくべつする、本質的な特性のセットである。ところが、《特性》は物のもっている、ひとつの側面、あるいはいくつかの側面を表現するにすぎないカテゴリーであって、まだ物の質的な特徴づけをあたえるまでにはいたっていない。（中略）

特性はコンスタントに存在する、物の側面であって、他との関係のなかにはいるとき、アクチュアルなものへと移行する。他との関係のそとではみずからをさらけださないという

⁶ 《特性》と《状態》の間の移行は、形容詞が述語になるときに起こると奥田は述べているが、同じ現象は、名詞述語文にも動詞述語文にも起こりうる。名詞述語文における《特性》と《状態》の相互移行については、佐藤（1997）に指摘がある（後述）。

意味では、ポテンシャルな物の特徴である。

この《特性》と《質》をくべつする必要は、典型的なばあいにおいて、形容詞述語と名詞述語との意味的なちがいが、基本的にはここにあるようであるからである。「くじらは動物である」というとき、くじらの本質的な、さまざまな特性の複合がさしだされているだろう。それに、名詞述語はたんに物の質をさしだしているばかりではなく、その実体をも表現している。述語のなかにさしだされる質が、その物の実体性（諸要素の構造的なむすびつきとしての物）に規定されているとすれば、質の表現がその物の実体性をほのめかしているのかもしれない。たとえば、くじらには乳房があるということ。それにしても、時間の局所限定において、《質》と《特性》とはちがってくるだろうか？《質》はアクチュアルなものへ移行しないが、《特性》は移行する。もし質が特性のたばであるなら、ひとつの相互作用のなかでそれをさらけ出すことは、まったく不可能である。《特性》のほうは、はたらきかけ手との関係のなかで、あたかも現象のごとくふるまうことができる。

（奥田靖雄著作集刊行委員会編 2015: 111-112）

このように、奥田が「時間の局所限定」を受けないものを《質》と《特性》に分ける点については、佐久間（1941）が「品さだめ文」を「判断の表現」と「性状規定」に分けていることと共通していると思われる。この点でも、佐久間（1941）は先駆的である。

一方、「時間の局所限定」を受けるものについては、佐久間は「物がたり文」の下位分類を行っていないが、奥田はブルイギナの見解を受けながら、「動的な現象」と区別し、「静的な現象」を表す《状態》を述語の意味的なタイプの一つのカテゴリーとして位置づけている。そして、《特性》と《状態》の違い、《状態》の主体について、次のように述べている。

《特性》は、特定の時間にしばられることのない、物にコンスタントにそなわっている、特徴である。それにたいして、《状態》は、特定の時間のなかにあらわれてくる、アクシデンタルな、つかのまの現象である。

（中略）

《状態》は、いろいろの物の、具体的な時間にしばられて、あらわれてくる、偶発的な現象である。このこととかかわって、《状態》の主体（もち主）が類的であることはできないという事実がある。つまり、クラスに一般化された主体は、状態のもち主としてはあらわれてくることがないのである。かぎられた時間のなかに発生し、消滅していく現象であるため、状態とそのもち主とのむすびつきが時間的であり、偶発的であり、非本質的であるために、状態をさしだす述語は、物のクラスを表現する主語とくみあわさることがない。主語の位置にあらわれてくるのは、固有名詞、代名詞、連体的な規定をとともなう名詞である。

（奥田靖雄著作集刊行委員会編 2015: 114-115）

以上のように、奥田（1988b）は、述語の意味的なタイプを一般化する作業を行った。ま

ず、「時間の局所限定」の観点から二分類したうえで、さらに《状態》へ移行するかどうかによって、《質》と《特性》を区別し、《状態》を《動作》や《変化》から区別した。奥田がここで行ったのは述語の意味的なタイプの一般化であるが、主語との関係が重要であると考えられていることは、上の《状態》の主体に関する記述からも明らかである。

2.2.1.3 文の対象的な内容の観点から―奥田（1996）―

奥田（1996）では、文の対象的な内容の観点から、文を、出来事をえがきだしているもの（動作、変化、状態）と特徴を表現しているもの（質、特性、関係）に分けて、以下のような枠組みを提示している（例文は奥田（1996）による）。この分類は、前節で見た、奥田（1988b）の述語の意味的なタイプの分類とはほぼ一致しているだろう。ただし、奥田（1996）では、「存在を表している文」が新たに加わっており、それは、出来事をえがきだしている文に含まれる「一時的な滞在・配置をえがきだしている文」と特徴を表現している文に含まれる「存在文」に分かれる。

1. 出来事をえがきだしている文

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1) 動作をえがいている文 | きこりは 山で 木を きっている。 |
| 2) 変化をえがいている文 | きこりも 木も びっしょり 雨に めれた。 |
| 3) 状態をえがいている文 | きこりは さむさに ふるえている。 |

存在を表している文

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1) 一時的な滞在・配置を
えがきだしている文 | そのとき 彼女は 山の 山頂に たっていた。 |
| 2) 存在文 | 東京の 上野には 大きな 公園が ある。 |

2. 特徴を表現している文

- | | |
|---------------|------------------|
| 1) 特性を表現している文 | 彼女は 背が たかい。 |
| 2) 関係を表現している文 | 花子は 母親に よく にている。 |
| 3) 質を表現している文 | 日本は 島国だ。 |

（奥田（1996: 3-4）にもとづく）

また、以上の分類と品詞との対応関係については、「動詞述語文とか形容詞述語文とか名詞述語文とかいう、述語の品詞別による形式的な分類にほぼ照応しているわけだが、かならずしも一致しない」と指摘している（奥田 1996: 4）。述語の意味的なタイプと品詞との対応関係は、工藤（2002a・2004・2012）によって整理された（後述）。

以上、述語および文の意味的なタイプを一般化する作業を行う奥田氏の一連の研究を見

てきた。奥田の時間の局所限定の考え方は、時間的限定性のカテゴリーとして工藤（1995・2002a・2012・2014）によって受け継がれ、さらにそれをムード・テンス・アスペクト論の基礎にすえ、類型論的な研究に発展させられた。また、奥田の研究の方法論や枠組みは、荒（1989）、樋口（1996）、八亀（2008）などの形容詞研究や、佐藤（1997）の名詞述語文の研究に継承されている。以下では、それらの研究を取り上げ、奥田の研究がどのように受け継がれ、発展させられたかを見ていく。

2.2.2 時間的限定性の観点から見る述語の意味的なタイプ—工藤（2002a・2012）—

奥田（1988b・1996）による述語の意味や文の対象的な内容のタイプ化は、工藤（2002a・2012）によって、「時間的限定性」の研究として展開された。工藤は、奥田（1988b）が提起した「時間の局所限定」を「時間的限定性」と呼び、「時間的限定性」を「すべての述語を捉えている意味・機能的カテゴリーで、偶発的（accidental）な一時的〈現象〉か、ポテンシャルな恒常的（permanent）な〈本質〉かのスケールの違いである」（工藤 2012: 157）と定義し、《運動》から《質》までを、図 5 のようにスケール上に相対的に位置づけている⁷。

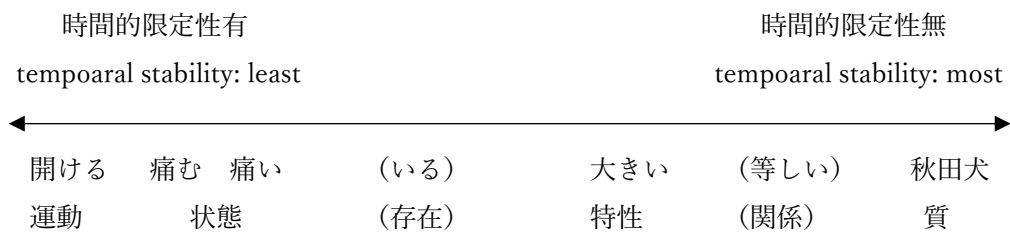


図 5 時間的限定性による述語の意味的なタイプ（工藤 2012: 158）

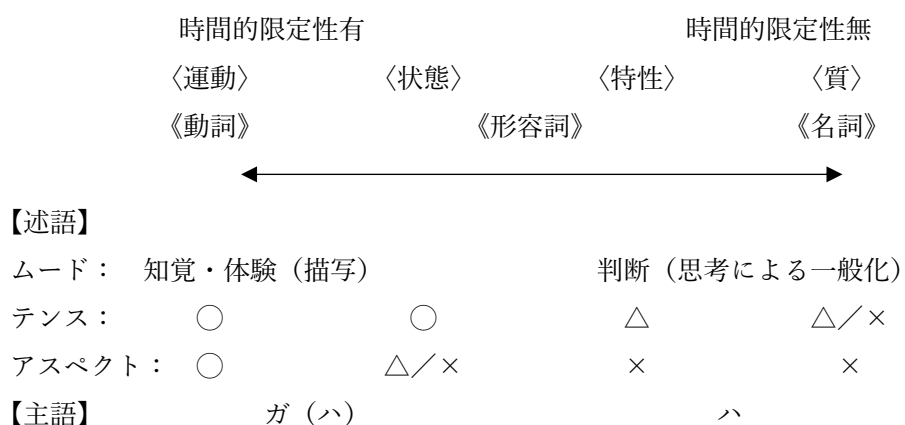
まず、《運動》と《状態》は、時間的限定性がある偶発的な〈現象〉である点においては、共通しつつ、動的展開があるかどうかで異なる。そして、奥田がとりだした《動作》と《変

⁷ この見解は、Givon（2001）の the scale of temporal stability（時間的安定性のスケール）という考え方に共通する。Givon（2001）では、主要な品詞である名詞、形容詞、動詞が述語になるとき、“temporal stability”という観点から、次の図式のように連続的なものとしてとらえている。つまり、名詞は時間的安定性が最も高いものであるのに対して、動詞は時間的安定性が最も低いものであるとして、スケールの両極に位置づけられている。形容詞に関しては、名詞よりのものと動詞よりのものに分けられ、スケールの中間に位置づけられている。

The scale of temporal stability									
most stable					least stable				
tree,	green		sad,	know		work		shoot	
noun	adj		adj	verb		verb		verb	

(Givon2001: 54)

化》は、工藤は《運動》の下位類としている。それに対して、《特性》と《質》は、時間的限定性がない、恒常的な本質的な特徴である点においては共通しているが、「1 つの特徴を捉えている」か、「諸特徴の束」であるかで、また、アクチュアルな〈現象〉(《状態》)へ移行するか否かで異なるとしている。また、《存在》は、一時的な現象の場合も恒常的な場合もあるため、スケールの中間に位置づけられている。これらの点は、奥田(1988b)を忠実に受け継いでいる。一方、《関係》については、《特性間の関係》でもあり《質間の関係》でもありうるとし、スケールへの位置づけを保留している。



このように、時間的限定性は、述語のムード・テンス・アスペクトが分化する土台としても重要であり、連続体をなしていることがわかる。一時的な現象と恒常的な特性との間にははっきりした境界線がなく、連続的であることは、相互移行の現象にも現れる。工藤は以下のような移行現象を指摘している。

まず、〈動的現象〉は、思考による一般化によって、《特性》へ移行する¹⁰。「今晚父が酒を飲む。→最近、父は毎晩酒を飲む。→父は酒を飲む。＝酒飲みだ。」のように、〈個別具体的な運動〉から〈反復習慣的運動〉へ、さらに《特性》へ移行し、テンス・アスペクトの対立が次第になくなって、主語は「ハ」で表されるようになる。

また、「ネクタイが曲がっている」は、〈一時的な状態〉であるが、「この道は曲がっている」になると、〈恒常的な特性〉を表し、主語は、「ハ」で表される。

それから、《特性》を表すものが〈知覚・体験性（眼前描写性）〉というムードが前面化すると、〈一時的な現象〉へ移行する。たとえば、「下を覗くと美しい谷が届かないほど深かった」のようなものである。また、「花子はおとなしい→花子が妙におとなしい」は、《特性》から《状態》への移行であるが、「花子はおとなしい女性だ」のような名詞述語文ではこの移行は起こらない（「*花子が妙におとなしい女性だ」）ということも指摘されている。これは、「おとなしい女性だ」のような名詞述語文が《質》を表すからであり、《状態》へ移行するか否かによっても、《特性》と《質》は区別される。「おとなしい女性だ」のようなタイプの名詞述語文については、さらに検討すべきことが残されており、これを本論文の主要な課題の一つとしたい（第3章）。

さらに、工藤は、時間的限定性と品詞との関係を表1のようにまとめている。《運動》は主に動詞述語によって表されるのに対して、《質》はもっぱら名詞述語に限定されるが、《状態》《存在》《特性》《関係》は、動詞でも、形容詞でも、名詞でも表されうると指摘されている。そして、《運動》を表す動詞述語は、継続相が表す意味によって、さらに〈動作〉と〈変化〉に分けられている。

¹⁰ ただし、この移行は、奥田（1996）の言う「時間的なありか限定」に関するものであり、時間的限定性から区別すべきかもしれない。

表 1 時間的限定性と品詞（工藤 2012: 159）

品詞 時間的限定性		動詞述語	形容詞述語	名詞述語
有	運動	〈動作〉作る、殺す、切る、閉める、焼く、入れる、運ぶ、飲む、読む、たたく、走る 〈変化〉行く、帰る、座る、卒業する、落ちる、曲がる、濡れる、晴れる、出発する		
	状態	悲しむ、安心する、感激する、寒がる、寂しがる、いらいらする、うんざりする、痛む、見える、聞こえる、匂う、疲れる、しらける、吹雪く、流行する、こみあう、滞在する	悲しい、安心だ、痛い、臭い、ねむい、だるい、心外だ、うんざりだ、ショックだ、妙だ、空腹だ、不機嫌だ、真剣だ、冷やかだ、忙しい、好調だ、熱っぽい、真っ暗だ	病気だ、風邪だ、筋肉痛だ、重体だ、大流行だ、パニックだ、評判だ、本気だ、感激だ、大喜びだ、無言だ、快晴だ、吹雪だ、ずぶ濡れだ、水浸しだ、渋滞だ、お疲れだ
	(存在)	ある、いる、存在する、点在する	ない、多い、少ない、乏しい、豊富だ	留守だ、不在だ、欠席だ、いっぱいだ
無	特性	優れている、ありふれている、しっかりしている、精通している、しゃれている、こみいつている、きりたっている、尖っている、いりくんでいる、やせている	優秀だ、平凡だ、堅実だ、詳しい、博学だ、おしゃれだ、複雑だ、好きだ、赤い、広い、高い、大きい、固い、重い、深い、病弱だ、無口だ、苦手だ、器用だ、腕白だ、有害だ	緑色だ、優等生だ、心配性だ、好物だ、しっかり者だ、やせっぽちだ、甘党だ、寂しがり屋だ、汗かきだ、皮肉屋だ、大酒飲みだ、高所恐怖症だ、泣き虫だ、美人だ、紳士だ
	(関係)	一致する、違う、反する、属する、共通する、関係する、兼ねる、似ている	等しい、同じだ、ぴったりだ、そっくりだ、対照的だ、親しい、懇意だ	大違いだ、共通だ、正反対だ、逆だ、先輩だ、同僚だ、実母だ、いとこだ
	質			哺乳動物だ、人間だ、女だ、害虫だ、犬だ、ペットだ、高山植物だ、雑草だ、盆栽だ、ソメイヨシノだ、家具だ、宝石だ、日本人だ、作家だ、刑事だ、教師だ、幽霊だ、祭日だ

この表からもわかるように、名詞述語は、《運動》《状態》《(存在)》《特性》《(関係)》《質》のすべてのタイプを表すことができるのである¹¹。工藤は、名詞述語「到着だ」と動詞述語「到着する」は、テンス的に同じではないと指摘している。動詞述語の非過去形は、「明日到着する」のように、未来しか表せないが、「明日到着だ」「既に到着だ」「昨日到着だ」のように、名詞述語の非過去形は、未来・現在・過去の出来事を表せる。また、名詞述語には形態論的アスペクトが欠けており、《運動》を表す名詞述語文のテンス・アスペクト的な意味の実現条件を検討することが本論文の中心的な課題の一つとなる（第2章3節）。

¹¹ ただし、工藤が作成した別の表では、名詞述語の《運動》の部分が空欄になっているものもある。これについては検討を要すると考えられているようである。ただし、後述するように、名詞述語には《運動》を表すものもあるということが高橋（1984）や佐藤（1997）によって指摘されている。

2.3 時間的限定性と叙述類型の対照

すでに見たように、佐久間の時所的限定の有無という観点は、三上に受け継がれ、さらに、益岡の叙述類型論にも影響を及ぼしている。益岡(1987)は、佐久間の「物がたり文」と「品さだめ文」や三上の「動詞文」と「名詞文」にならって、叙述類型を「事象叙述」と「属性叙述」に分けたうえで、さらに前者を「動的事象叙述」(或る時空間で実現する出来事)と「静的事象叙述」(ある時空間に存在する静的事態)に、後者を「内在的属性叙述」(時空間的限定を受けない)と「非内在的属性叙述」(時間的限定を受ける)に分け、両者の間には、「中間型」が存在すると出張している(図3を参照)。また、益岡は、「内在的属性叙述」から「静的事象叙述」への移行の例として、「梅原氏の絵は、文句なくごく普通な意味でも美しい」(内在的属性叙述)と「車窓に迫った山の新緑の色が美しい」(静的事象叙述)を挙げている。

このように、①時間的限定の有無を重視する点、②下位分類において動的と静的を区別する点、③時間的限定のないタイプから時間的限定のあるものへの移行を指摘している点において、益岡と工藤の見解は一致している。

一方、両者の最も大きな相違点は、工藤の《状態》にあたるものが、益岡では、「非内在的属性叙述」(「あの人はどういうわけか、最近冷淡だ」)、「中間型」(「付近は家屋が密集し、一時は大混雑でした」)、「静的事象叙述」(「追い掛けてくる猛犬が身の毛のよだつ程おそろしかった」)の三つの類型に分かれている点であり、逆に、益岡の「内在的属性叙述」にあたるものを、工藤は、《質》(「彼は日本流に言えば、高校二年生である」)と《特性》(「三番目のおばあさんは中肉中背で、…」)に分けている点である。つまり、益岡は、工藤の《状態》をさらに分け、工藤は、益岡の「内在的属性叙述」をさらに分けているのである。簡単にいえば、益岡は、属性か事象かを重視し、工藤は、時間的限定性を重視しているといえよう。

なお、益岡(2008)では、「属性叙述」の下位分類について次の図7のように見直しが行われている。そこでは、「カテゴリー属性」(典型が名詞述語文)と「単純所有属性」(典型が形容詞述語文)が区別されていて、これは《質》と《特性》の区別に対応する。つまり、工藤の考え方に少し近づいている。ただし、非内在的属性が残り、履歴属性が新たに加わるなど、工藤との違いはまだ大きい。

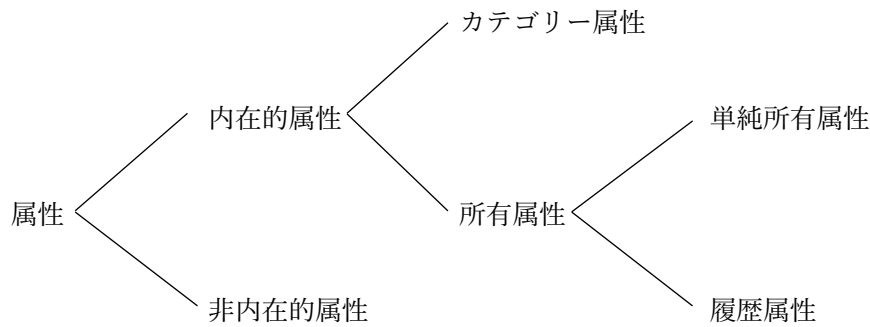


図7 属性叙述のタイプ (益岡 2008: 7)

文の内容面からの一般的な分類として、いずれがより適切かは、日本語以外の言語も見ながら、判断しなければならないと思われるが、今の筆者にはその余裕がない。ロシア言語学で議論が進み、また Givon の一般言語学的な視点をもつ研究にも通じるところがあり、また、後述する名詞述語文に関する佐藤の実証的な研究もこれにもとづいて行われていることから、本研究では、時間的限定性の観点による連続的なスケールにもとづくタイプ化を採用したいと思う。

2.4 名詞述語文の意味的なタイプについて

ここでは、名詞述語文における主語と述語の意味的な関係のタイプを記述している高橋 (1984)、奥田 (1988b・1996) にもとづき、名詞述語文のさまざまな意味的なタイプを体系的に記述している佐藤 (1997) を取り上げる。

2.4.1 名詞述語文における主語と述語の意味的な関係—高橋 (1984) —

高橋 (1984) では、まず、主語と述語の意味的な関係を重視する理由について、次の3点を挙げている。

- ①主語と述語の意味的な関係は、文のもつ現実反映の側面に属するものであって、文の内容の構造のほねぐみをなしている。
- ②主語と述語は、このほかに、テーマとレーマ、既知と未知のような、通達の側面における関係をもっているが、意味的な関係がそれをささえているという点で、基本的であろうとおもわれる。
- ③主語と述語の意味的な関係は、また、文の内容的側面をうけもつことによって、文の形式的側面である陳述性とかかわってくる。

(高橋 (1984: 21-22) にもとづく)

つまり、文には内容の面（対象的な内容）と形式の面（陳述性）と情報の面があって、主語と述語のむすびつきによって、この三つの面が同時につくりだされるのである¹²。

以上のことを踏まえて、高橋は、すべての文における主語と述語の意味的な関係を次の四種類に分けている。

- | | |
|----------|---|
| A 「動作づけ」 | 述語が主語のさししめすものごとの運動をさししめしているもの
典型は動詞述語文 「 <u>父</u> が <u>かえってきた</u> 。」 |
| B 「状態づけ」 | （おなじく）状態をさししめしているもの
動詞・形容詞・名詞述語文 「 <u>きょう</u> は <u>波</u> が <u>たかかった</u> 。」 |
| C 「性格づけ」 | （おなじく）質的な属性をさししめしているもの |
| | 「性質づけ」（内包）
典型は形容詞述語文 「 <u>一郎</u> は <u>のっぽだ</u> 。」 |
| | 「種類づけ」（外延）
典型は名詞述語文 「 <u>クジラ</u> は <u>ほ乳動物である</u> 。」 |
| D 「同一づけ」 | 主語と述語が同一のものごとをさししめしているもの
典型は名詞述語文 「 <u>あれ</u> は、 <u>花子さん</u> です。」 |

図 5 主語と述語の意味的な関係（高橋（1984: 20-21）にもとづく）

これらの四つのタイプの相互関係については、「事象の内部構造の分析かいなかの点では、A～C と D とがわかれ、時間的な過程であるかいなかの点では、AB と CD とがわかれ、動物的か静的かでは、A と B～D とがわかれる」（高橋 1984: 21）と説明されている。このうちの D は、事象の内部構造の分析ではないという点で明らかに異質であり、奥田（1988b・1996）でも取り上げられていないが、それ以外については、奥田（1988b）が述語の意味的なタイプを「時間の局所限定」と動的・静的の観点から四つに分類しているのと、基本的には同じである。すなわち、A は《動作》と《変化》に、B は《状態》、C の「性質づけ」は《特性》、「種類づけ」は《質》に対応している。

なお、高橋（1984）における《状態づけ》は、「あるモノゴトが、一定の時間（時点または持続瞬間）において、どんなありさまにあるかをさししめす関係である。このなかには、一定時間における動作のようす、性格のありさま、変化過程のなかの位置などがふくまれる」（高橋 1984: 27）と定義されており、「そのとき彼はめしをくっていた」のような動作継続を表すものまでが《状態づけ》に入れられているのは、当時まだアスペクトの研究が発展

¹² 高橋（1984）の注 4 では、「文の内容的側面と形式的側面の関係については、布村政雄 1984「文のこと」（『宮城教育大学国語国文 13-14』）に、つっこんだ考察がある。この関係のとらえかたについての筆者のかんがえかたは、同氏（ペンネームは奥田靖雄）の、以前からのおしえによるところが大きい」と述べている。

途上であったということなのだろう。

以上のようなことを前提として、高橋は、名詞述語文¹³における主語と述語の意味的な関係を、Ⅰ種類づけ（類づけ、種づけ、別種類づけ）、Ⅱ性質づけ（性質づけ、量・ていどづけ、存在づけ、関係づけ）、Ⅲ状態づけ、Ⅳ動作づけ、Ⅴ同一づけの五つに分類している。¹⁴また、それぞれの類について、述語が一単語からなるものなのか、かざりをつけて作られるものなのかという点にも注目している。以下、高橋の分類を整理して示す。

Ⅰ 種類づけ

1) 類づけ 上位概念で性格づけるもの

「ええ、さそりは虫よ。」

2) 種づけ 内包で制限された上位概念で性格づけるもの

①一つの名詞が述語になるもの

「大宮はいったいに運動家だった。」

②内包と上位概念を別の単語であらわすもの

「尾道はいいところだよ。」

3) 別種類づけ そのモノゴトの属する本来のカテゴリーとは別の系列のところに位置づけて、性格をしめすもの

「私は畜生だった。」

Ⅱ 性質づけ

1) 性質づけ

①一つの名詞が述語になるもの

「もし友人らの墮落が陽性なら、私の墮落は陰性だった。」

②性質の概念をあらわす名詞を一定の内包でかざるもの

「伸子はそういう不自然さに、ながくたえられない性質なのであった。」

2) 量・ていどづけ

¹³ 高橋の定義する名詞述語文とは、「主語と述語の対立のなかで、述語が名詞でつくられる文」であり、「火事だ!」のような主語と述語の対立のない文は名詞述語文ではない。なお、「あれ、だれ?」「おとうとです。」のような、主語が省略されている名詞述語文については、扱われていない。

¹⁴ 「同一づけ」は、「事象の内部構造の分析ではない」点においては、Ⅰ～Ⅳから区別されることがすでに指摘されている。そのほか、名詞述語文には、「僕はウナギだ」のように、主語と述語の意味的な関係は、コンテキストに依存するものがある。この種のいわゆる「ウナギ文」を語用論の観点から取り上げる研究として、西山（2003）が挙げられる。また、西山（2003）では、「AはBだ」と「BがAだ」をコピュラ文の基本形、倒置形とし、意味構造の観点から、「A、Bに登場する表現のもつ意味特性、とりわけ名詞句の指示性・非指示性」によって、次の6分類にしている。1.指定文（あいつは馬鹿だ）、2.倒置指定文（幹事は田中だ）／指定文（田中が幹事だ）、3.倒置同定文（こいつは山田村長の次男だ）／同定文（田中村長の次男がこいつだ）、4.倒置同一性文（ジキル博士はハイド氏だ）／同一性文（ハイド氏がジキル博士だ）、5.定義文（眼科医（と）は目のお医者さんのことだ）、6.提示文（特におすすめなのがこのワインです）。このうち、2、4、5のタイプは、それぞれ高橋が取り上げている「Ⅴ 同一づけ」における「ひっくりかえし文」「同一物のむすびづけ」「意味するものと意味されるもの」と対応しているであろう。

- ①一つの名詞が述語になるもの

「座敷は二階と同じく六畳ばかり。」

- ②その概念にカザリをつけてつくるもの

「彼の家はやっとうにこまらない程度だった。」

- 3) 存在づけ モノの固定的な存在場所や存在数などをあらわすもの

「わたしの家はすぐその横町だわ。」

- 4) 関係づけ 他との関係で性格づけるもの

- ①一つの名詞が述語になるもの

「雪江さんはお芳ちゃんと正反対だ。」

- ②カザリをうけた類概念語でつくれるもの

「彼は村岡さんとはある会であったことがあるが、目礼をしたりしなかったりするあいだがらだった。」

相互関係にある複数のものが主語になる場合

「ほんとうにあなたがたはいいお友だちね。」

III 状態づけ

- ①一つの名詞が述語になるもの

「震災の時、彼女は一年生だった。」

- ②主語のさしめすものの上位概念でない類概念をあらわす名詞にカザリをつけたもの

「彼はそれにおさえられ、身動きもならず、ただじっとしているよりしかたない気もちだった。」

IV 動作づけ

- ①サ変動詞の「スル」のかわりにコピュラをつけたようなもの

「われわれもいよいよあす出発だ。」

- ②動詞の尊敬語形か名詞かわからないもの

「先生も、そろそろおいででしょう。」

V 同一づけ

- 1) 同一物のむすびつけ

- ①主語と述語の現象形態がちがうもの

「これはきのうのきっぷです。」

- ②主語と述語がひとつの現象形態にあるもの

「これはライラックだったね？」

- 2) ひっくりかえし文

「電話にでたのはおつただった。」

- 3) 内容とわくぐみ

「(略) これが、気丈な祖母の、最後のことばだった。」

4) できごとや動作とその概念化

「ランプ掃除は下女の役だが、夕方これに火をつけて座敷へくばるのは私の役だ。」

5) 意味するものと意味されるもの

「シメキとは、かれら仲間の隠語で情婦という意味だった。」

「性格づけ」と「状態づけ」の関係については、奥田（1988b）と同様、「性格づけは、たいてい（状況語または文脈によって）時間軸上への位置づけをうけると、状態づけの関係を手にいれるとってよいだろう」（高橋 1984: 28）と指摘している。例えば、「男滝のほうはうらはらで、石をくだき地をつらぬくいきおい、堂々たるありさまじゃ。」は「性格づけ」を表すが、「彼の書だなも今はあわれなさまであった。」になると、「状態づけ」を表現するようになるとしている。ただし、《存在》《関係》は《特性》から区別されずに、「存在づけ」「関係づけ」として、「性質づけ」の中に含まれている点は、奥田（1996）とは異なる。本研究との関連で注目しておきたいのは、名詞述語文の中に「動作づけ」を表すものを明確に位置づけていることである。本論文の第2章では、それらを対象として記述を行う。

2.4.2 名詞述語文の意味的なタイプについて—佐藤（1997）—

佐藤（1997）は、奥田（1988a・1988b・1996）に示された構文論研究の方法論を継承しつつ、主語を人名詞に限定したうえで、名詞述語文の意味的なタイプを次の枠組みで体系的に記述している。まず、時間的限定の有無によって、「特徴を表現する文」と「出来事を表現する文」に分け、それぞれの下位類として、《質》《特性》《関係》、《状態》《滞在》《動作》をとりだした。それらは、典型的なものから非典型的なものへと並べられている。

I 特徴を表現する文

- 1 質
- 2 特性
- 3 関係

II 出来事を表現する文

- 1 状態
- 2 滞在
- 3 動作

（佐藤 1997: 151）

佐藤は、それぞれのタイプの記述にあたって、どんな観点から人の《特徴づけ》が行われるか、それはどのような表現手段で表されるかが注目されている。表現手段とは、例えば、その《特徴づけ》は、述語にすえる一単語で表されるか、それともかざり成分を受ける名詞述語で表されるかといったことである。また、かざり成分を受ける場合、述語にすえる名詞

は、人の側面や部分を表す名詞（「顔」「性格」など）であるか、一般人名詞（「人、男、女、青年」など）であるか、それとも自立的な名詞であるかや、かざり成分は《の格》の名詞なのか形容詞なのか、あるいは動詞（述語）なのかなどが考慮されている。そのほか、これらの名詞述語文はなぜ必要であるか、コンテクストにおいてどんな機能をはたしているか、テンスとの関係はどうなるか、意味的なタイプの間領域や相互の移行関係はどうであるかなどの観点も考察に取り入れられている。

以下、少し長くなるが、本研究にとって最も重要な先行研究であるので、佐藤（1997）の記述をやや詳しく見ていきたい。

I 特徴を表現する文

1) 《質》について

佐藤は、人の《質》を、その存在期間によって、《可変的な質》（職業や、地位、身分、役わりなど）、《生来の質》（国籍、人種、出生地、性別など）、《古い質から新しい質に変化し、それ以後その質は不変的である場合》（「俺は殺人犯だ」）の三つに分けている。そして、《生来の質》は、過去テンスをとることができないが、「～とき、……だった」「もう……だ」のような形で（「お前はもう俺たちの仲間、中国人だ」）、《可変的な質》へ移行しているため、《質》の変化を表すテンス対立もありうると述べている。

また、事実の内容を確認して再現的につたえるほかに、評価的な判断が前面に現れる場合がある。なぜかという点、「人物の本質をとりだすという行為は、その人物の日常の具体的なふるまいにわけいって、そこにひそむ傾向性を一般化することである。そこには、話し手の評価がつきまとう」からである（佐藤 1997: 159）。そのうち、「性格の観点からする人の特徴づけ」は「話し手の主観的な態度・評価」が前面にさしだされる場合がある。そのようなものには、「与二郎は交際家だ」「亭主は大酒飲みじゃった」のように、述語名詞は「～家」「～者」のような接辞や動詞のなかどめによって作られたものが多く、対象人物の側面における《特性》を表すようになっている。とはいえ、その《特性》は「その人物の《本質的な特性》でもあって、《特性》が《質》を構成している」と述べられている。このことは、後述する、「彼はやさしい人だ」のような、一般的な人名詞が形容詞でかざられる文についてもいえる。

続いて、《の格》の名詞が述語名詞をかざるものを、かざりのない場合と同じく、事実の再現としての《質》をさしだす文と評価的な判断としての《質》をさしだす文に分けてと取り上げている。例えば、述語に一般的な人名詞をすえておいて、その所属先を表す《の格》の名詞をかざる例として、「丹青も、高炉交渉団のメンバーであつた」のようなものを挙げている。これらの述語名詞の語彙的な意味には、「他の人間や組織との《関係》」の意味も含まれているので、《関係》からの特徴づけでもあると指摘している。

2) 《特性》について

佐藤は、奥田(1988b)が提起した、「本質規定にまでたちいない、物の側面におけるポテンシャルな特徴」という《特性》の規定にしたがい、「どのような側面」から、どういう手段で人を特徴づけるか、という観点から《特性》の記述を行った。

まず、数詞が述語に使われ、一単語で《年齢》(「妹はまだ五つ」)や《量の側面》(「東洋製鉄側は十名だった」)からの特徴づけがある。《年齢》については、変化していくものであるため、テンス対立があると指摘されている。

また、「かお、からだ、図体／うまれ、出身／ひとがら」のような、人の部分や側面を表す名詞が述語にすえられ、かざり成分を義務的に要求し、あわせ述語全体で《特性》を表すものとして、〈出身〉〈みなり〉〈体・部分・表情〉〈性格〉などの観点から特徴づけるものが挙げられている。そして、具体的に《特性》を表すか、《状態》を表すかは、文脈が恒常的ととれるか一時的ととれるかによると指摘している。

そのほか、形容詞から派生した名詞が述語におかれて、かざり成分とひとくみになって人を特徴づけるものがある(「筑摩県の当局者は洋算一点ばりの鼻息の荒さだ」「あのたちは、おおかた二十歳をちょっと越えたぐらいの若さだったであろう」など)。ただし、状態形容詞から派生した名詞が述語に用いられる文(「その時になっても、山村氏の家中衆だけは、(中略)頑として昔を忘れないほどの高慢さである」など)が《状態》を表すかどうかについては保留している。

3) 《特性》と《質》

《特性》は、以上のような「数詞や部分・側面名詞、形容詞からの派生名詞によって表現されるばかりではなく」、「典型的な《質》表現の文のなかにくみこまれたかたちでも表現されている。むしろ主流は後者である」と述べられ、そして、「おおくの名詞述語文は、まず述語で人や物の本質規定をしておいて、述語にかかる連体修飾語でその物の《特性》をひきだす、というし方で、《質》と《特性》をひとつの文のなかに共存させている」という重要な指摘がなされた(佐藤(1997: 173)、下線は筆者による)。このようなものについて、佐藤は、述語が形容詞にかざられる名詞述語文から考察している。

まず、述語に自立的な名詞が現れる場合について、名詞自体が話し手の評価的判断の意味合いを帯びているかいないかによって二つに分ける。名詞が評価の意味合いを帯びている場合、「話し手は、主語にさしだされる人物の具体的な動作・状態に共通なある傾向を一般化し、その人物を特徴づけるのにもっともふさわしい人名詞をえらんで、述語にすえる。そうしたうえで、その《特性》をひきだしたり、それに程度をあたえたりするのである。(佐藤(1997: 173)、下線は筆者による)。以下に用例を引用する。

倫は(中略) もっとも便利なもっとも忠実な支配人なのだ。(女坂)

「この子、柄が大きいからと貰うて来たけど、相当なうすのろじゃよ。」(大地・一)

もう一つのバリエーションとしては《たとえ》が挙げられている。

「(略) 子供は国家の大切な苗です。」(大地・一)

それに対して、名詞には話し手側からの評価の意味合いはなく、単なる《客観的な質》をさしだし、評価の意味を形容詞の選択のしかたに預かる場合がある。

三人目の質問者は、有名な京劇俳優であった。(大地・三)

また、「形容詞でかざられる述語名詞のなかで最も多いのは、「人、男、女、方、やつ、子、孫、息子、娘、妻、青年」のような、一般的な人名詞である」と佐藤は指摘している。そして、その理由について、次のように述べている。

人間の《質》を一単語で表現する名詞の語彙量にはかぎりがある。現実の世界の人間の《質》ははるかに多様であって、その多様性を表現するために、形容詞と人名詞とのくみあわせは欠かせない手段なのである。
(佐藤 1997: 175)

こうしたタイプの名詞述語文では、《質》と《特性》を一つの文に共存させている以上、形容詞によってひきだされる《特性》と名詞にさしだされる《質》はどのような関係にあるのかということについて明らかにする必要がある。これについては、次の佐藤の指摘が示唆的である。

述語に「人、男」のような一般的な人名詞をすえておいて、《特性》をあらわす形容詞で述語名詞をかざるばあい、その特性は主語の位置にある人物にとっては、《本質的な特性》であって、《現象的な特性》ではない。とすれば、その特性はすでに《質》である。あるいは、《質規定のなかにはいりこんだ特性》である。
(佐藤 1997: 176)

このようなタイプの名詞述語文は、従来あまり注目されていないが、佐藤によって、このタイプの文が人の特徴づけとして重要な役割を果たしていることが指摘されたことの意味は非常に大きい。特にこのタイプの名詞述語文に焦点をあて、その意味的・機能的な特徴を記述することは、本論文の目的の一つでもある(第3章)。

そのほか、述語名詞で《質》をさしだし、かざり成分で《特性》をさしだす文には、かざり成分が動詞の連体形、動詞を述語とする連体的なつきそい文である場合もある。佐藤は、かざりの機能を「かざりつけ」と「きめつけ」に分けたうえで、「かざりつけ」としてはたらくかざりを、その人物の本質をしめすエピソード、履歴としてさしだされるひとつの個

別・具体的な出来事であるか、反復的な動作・習慣的な動作であるか、ポテンシャルな能力であるかに分けている。

4) 《関係》について

次に、主語にすえられた人物と他の人物やものとの《関係》を表す文を取り上げる。他の人物との関係については、「社会的諸関係からきりはなされた人間は存在しない。人間はそもそも社会的存在なのであって、人間的意識は、社会的な関係のあり方に規定される。その人間が、他の人間といかなる関係を取りむすんでいるか、ということのなかに、その人間の本質があらわれる」（佐藤 1997: 183）と述べられている。

人間が他の人間ととりむすぶ関係には、「先天的、不変的」な関係としては《親族関係》がある。それから、「友だち、なかま、知りあい、恩師、弟子、同級生、上役」のような狭い意味での《社会的関係》がある。前者はテンスの対立をもたず、過去形は確認時が前面化される。また、具体的な《関係》を表すものには、《年齢の関係》（「同じ齢だ、年上だ」）、《地位関係》（「上だ、下だ」）がある。これらの文では、複数の主体を主語にするか、または一方を主語にすえ、もう一方は「の格」や「と格」の名詞で示されるかのかたちで表現される。《関係》の一般的な表現として、「知りあい、顔みしり、なじみ、常連」のような／知己である／という意味のもの、かざり成分で関係の内容を限定したり、具体化したりする「なかまだ」のような／同類である／という意味のもの、「相手」のようなあわせ単語（「相談相手」など）を作ることによって具体性を獲得するもの、「仲だ、あいだがらだ」のようなかざり成分を義務的に要求するものもある。そして、「仲だ、あいだがらだ」は、時間の状況語を伴いながら、《状態》へ移行することが指摘されている。

さらに、「敵だ、味方だ」のような態度の《関係》、「無関係だ」や「なかよしだ」のような形容詞化が進んでいるもの、「別人だ、同人だ」のようなものも《関係》におさめている。

一方、《関係》と《特性》《状態》との移行関係について、かざり成分が《特性》や《状態》を表していて、しかも情報の焦点となっているときは、文全体も《特性》や《状態》の表現に移行することがあると述べている。

それでも敏腕で男ぶりのよい白川は倫には十分魅力ある良人であった。（女坂）

また、《関係》と《質》をめぐって、「（～の）主人だ」「所有者だ」「メンバーだ」「一員だ」のような名詞述語をどのように位置づければよいかについても触れている。このようなものは、「それらの物、組織、制度、不動産などとの《関係》を前提にしたうえで、主語にあらわれる人物の特徴づけをおこなっている」ものだとすれば、《関係》と認めるべきか、《質》と認めるべきかという問題を提示している。佐藤では、これらの名詞述語文を「一括して《質》のカテゴリーにおさめておく」（佐藤 1997: 193）と述べている。

以上、特徴を表現する文について、《質》、《特性》、《特性》と《質》、《関係》に分けて、

それぞれの下位分類と表現手段やテンスとの関係、タイプ間の移行関係を中心に、佐藤がどのようにとらえているかをまとめて見た。そのうち、テンスの有無については、それぞれの対象的な内容の下位分類とかかわることを注意されたい。

II 出来事を表現する文

1) 状態

佐藤は、奥田（1993c）の《ただの状態》の規定にしたがい、名詞述語文における《状態》を表現手段によって、述語の一単語で《状態》をさしだすものと、かざり成分と名詞があわせ述語となって《状態》を表すものに分けて記述した。そして、むしろ後者の方が優勢であると指摘している。

言語的な意味としての《ただの状態》は、多少とも時間の長さをもっている、一次的な現象をとらえているが、その現象は変化の結果として生じてくるものではない。とりまく環境のはたらきかけのもとで、べつにかわったこともない、正常な生理・心理に、その自己運動として、とめようもなくおこってくる、アブノーマルな現象である。人間の正常な、ふつうの生理・心理の構造が、なんらかの原因で一時的にバランスをくずすことによって生じてくる現象である。（奥田 1993c: 38）

まず、述語が一単語からなる名詞述語文で《状態》を表すものについては、《生理的な状態》（「病気だ、肺炎だ」）、《心理的な状態》（「安心だ、心配だ、気がかりだ」）、《身なり》（「人民服だ」）や《ふるまい》《表情の観点》から表すもの、《年齢》を表す数詞を述語にもつものなどが挙げられている。しかし、「先生は幸い近眼である」になると、《生理的な状態》は《特性》に近づく。また、「もう、まだ」のような時間副詞をともなつて、「おとな、こども、おばあさん、学生」などの人名詞が述語に使われるとき、《特性》とも《状態》ともとらえられるようになると指摘している。例えば、「（まだ）子供だった」は、いちいちの子供らしいおこないを一般化しているとすれば、《特性》をとらえているが、《時間とともに変化する人間の成長の一段階》とすれば、《状態》をとらえていることになる。

また、「おもい、きもち、ここち、こころもち、気分、はら、覚悟、意見」のような名詞は、かざり成分を義務的に要求し、あわせ述語で《心理的な状態》を表現する。そのほか、〈表情・態度〉（「顔付だ、顔色だ」）、〈服装・身なり〉（「服装だった、姿だった」）、〈たちば・境遇〉（「身だ、身分だ、毎日だ」）といった観点から《状態》を特徴づけるものが挙げられている。そして、〈服装・身なり〉〈たちば・境遇〉を表す文は、一時的な文脈か恒常的な文脈かで《状態》になったり、《特性》になったりするということが再び指摘されている。

2) 滞在

佐藤は、「述語に空間名詞を配置して、人がその空間に／滞在する／ことを表現する文」

を《滞在》を表す文としてとらえている。これは、奥田（1996）が存在表現を「存在」と「一時的な滞在・空間配置」に分けているうちの後者にあたる。そして、《滞在》を三つのタイプに分けている。一つは、一時的な《滞在》（「袁官長なら、後方のジープだ！」）であり、もう一つは、《不在》（「岩本は注文を受けに出て、留守だった。」）である。それから、「《空間的な位置関係》をあらわす名詞が述語に使われて、時間的なありか限定を獲得し、《滞在・配置》ないし《状態》を表現する」ようになるものがある。例えば、「その他はことごと偶然の向かい合わせ、隣同志であった。」のようなものである。

3) 動作

佐藤は、《動作》を、個別・具体的な出来事とくりかえされる動作に分類している。そして、個別・具体的な出来事については、現在テンスと未来テンスに分けている。

「きょうは俺もみんなの仲間入りだぞ。」（夜・三）〈個別・具体的な出来事、現在テンス〉
今夜もあの人は徹夜でしょう。（夜・三） 〈個別・具体的な出来事、未来テンス〉
お隅さん、あなたの前ですが、国からの便りという、いつでも娘が代筆です。（夜・四）
〈くりかえされる動作〉

また、動作の客体を主語にすえ、動作性名詞を述語におく構造として、次のような例が挙げられている。

「会所もいよいよ解散です。年寄役というものも御廃止です。」（夜・三）
「今日は少し装置が狂ったので、晩の実験はやめた。」（三四郎）
「ところで、兄さん、ちょうどあのお父さんが亡くなって一年目に、うちでも母屋だけ残して、新屋の方は取払いでしょう。（中略）」（夜・三）

そして、尊敬語形式「お／ご～だ」も用いられると指摘している。すでに見たように、これについては、高橋（1984）も「動作づけ」の一種類として位置づけていた。

「青山さんは福島へはよく御出張でしょう。」（夜・一）

そのほか、「賛成、反対」のように、意志的な態度をとらえている名詞も《動作》におさめているが、《状態》と見てもよいとも述べている。

以上は、佐藤（1997）による、人を主語にする名詞述語文の意味的なタイプの記述の全体像である。佐藤は、述語が一単語からなる名詞述語文だけでなく、かざりを受ける名詞述語文も重視すると同時に、典型的な名詞の場合だけでなく、形容詞や動詞から派生した名詞の場合を含めて、述語名詞の語彙的な意味を詳しく観察しながら、名詞述語文を網羅的にとら

えている。そして、名詞述語文の意味的なタイプの下位分類を行うとき、文の陳述性（主に、テンポラリティー）との関係を意識している。このように、文の文法的な意味との関係のなかで、文の対象的な内容の一般化する作業を行わなければならないという奥田の指摘は、佐藤の名詞述語文の研究によって実践された。

3. 本研究の研究対象

文の対象的な内容のタイプ化によって、文の意味的なタイプにおける日本語の名詞述語文の位置づけが明確になってくるとともに、名詞述語文の研究は、動詞述語文の研究や形容詞述語文の研究と同じ土俵で展開されるようになる。佐藤（1997）による、文の対象的な内容の観点からの名詞述語文の研究は、人を特徴づける文としての名詞述語文の意味的なタイプの全体像を提示しており、今後の名詞述語文の研究のための基礎を構築している。

本研究は、直接的には佐藤の研究を受け継ぎ、それを発展させようとするものであるが、佐藤の研究が網羅的な記述であるのに対し、本研究は、従来あまり注目されていない部分に焦点をあて、詳述することをめざす。そのことを説明するために、まず、工藤（2002a・2004・2012）の枠組みを参考にして筆者が作成した語彙リスト¹⁵を手がかりに、名詞述語文の意味的なタイプ）の全体像を見渡しておきたい。

名詞述語文は、基本的には恒常的な《質》を表すが、表2が示しているように、時間的限定性の有無の観点から、《運動》《状態》《存在》《特性》《関係》《質》のすべてを表すことができる。

¹⁵ 表2は、佐藤（1997）、工藤（2002a・2004・2012）などの先行研究の語彙リストや記述を参考にしながら、小説から目視で収集した語彙と、『分類語彙表 増補改訂版』から集めた語彙を用いてコーパスにおける実例調査の結果にもとづいて作成したものである。そして、実際の使用においては、規定語をとるものやあわせ述語をつくるものも多数存在しているが、表2ではそれらを扱っておらず、できるだけ単語からなる名詞述語に限定している。こうしたのは、規定語などの修飾成分をとまうのであれば、それが表す意味が修飾成分の性格によって変わる可能性があり、単純に位置づけることができないからである。ただし、《関係》を表すもののなかで、《の格》の規定語がしばしば必要になることが避けられないことに注意されたい。また、実際の使用においては、《特性》と《状態》の間、《関係》と《特性》や《質》の間には移行する現象が起こるので、表2はあくまでその基本的な用法にもとづいて、暫定的に分類しただけである。そして、紙幅の都合上、表2に挙げる語彙の選択には、全体像を考慮したうえで、代表的なものしか挙げていない。

表 2 名詞述語の意味的なタイプ

時間的 限定性		名詞述語
有	運動	〈動作〉お使いだ、お飲みだ、お遊びだ、お買いだ、おやりだ、お書きだ、お読みだ、お歩きだ、お泊まりだ、散歩だ、勉強だ、研究だ、旅行だ、宿泊だ、出勤だ、出社だ、入浴だ、ご覧だ、お待ちだ、お呼びだ、お探／捜しだ、お調べだ、お尋ねだ、お働きだ、お勤めだ、お住みだ、お暮らした、お過ごしだ 〈変化〉お見えだ、お越した、おいでだ、お着きだ、到着だ、お帰りだ、お戻りだ、帰宅だ、帰国だ、帰京だ、帰館だ、お出かけだ、出張だ、外出だ、お集まりだ、お乗りだ、出立だ、お発／立ちだ、お眠／睡りだ、お休みだ（寝る）、お目覚めだ、お起きだ、お履きだ、退官だ、結婚だ、転職だ、栄転だ、入院だ、離婚だ、卒業だ、定年だ、完成だ、開始だ、終了だ、中止だ、解散だ
	状態	快晴だ、吹雪だ、曇りだ、大雨だ、満開だ、早咲きだ、遅咲きだ、三分咲きだ、晴れた、夕焼けだ、干ばつだ、大荒れだ、水浸しだ、生煮えだ、満ち潮だ、ずぶ濡れだ、泥だらけだ、埃まみれだ、血まみれだ、血みどろだ、汗みどろだ、背広姿だ、正装だ、満腹だ、空腹だ、腹ペコだ、病気だ、風邪だ、筋肉痛だ、貧血だ、肥満だ、疲労だ、お疲れだ、不眠だ、知らん振りだ、にこにこ顔だ、半泣きだ、泣き顔だ、号泣だ、したり顔だ、素知らぬ顔だ、笑顔だ、不満顔だ、興奮気味だ、感激だ、驚きだ、大喜びだ、退屈だ、憂鬱だ、パニックだ、大弱りだ、無言だ、本気だ、ご存知だ、無職だ、休暇中だ、大騒ぎだ、大流行だ、ブームだ、評判だ、好評だ、渋滞だ、満員だ、満席だ、満室だ、開けっ放しだ、全開だ、安定だ、異常だ、不況だ、景気だ、飢饉だ、品切れだ
	存在	（ものが）お立ちだ、空だ、いっぱいだ、がらんだ、ちょっぴりだ、無人だ、留守だ、不在だ、在宅だ、在室だ、欠席だ、退席だ、滞在だ、滞留だ、在外だ、在日だ、参加だ、不参加だ
	特性	緑色だ、長方形だ、昔風だ、古風だ、痩身だ、色白だ、大柄だ、背高だ、面長だ、小作りだ、男前だ、美人だ、やせっぽちだ、冷え性だ、多血質だ、偏食だ、大食いだ、食いしん坊だ、甘党だ、高所恐怖症だ、寒がりだ、汗かきだ、あがり症だ、不眠症だ、病弱だ、多病だ、羸弱だ、近視だ、近眼だ、多弁だ、早口だ、無口だ、寡言だ、毒舌だ、利口者だ、心配性だ、飽き性だ、紳士だ、名人だ、優等生だ、しっかり者だ、正直者だ、嘘つきだ、不品行だ、皮肉屋だ、寂しがり屋だ、大酒飲みだ、泣き虫だ、読書家だ、社交家だ、実務家だ、空想家だ、素人だ、プロだ、熟練者だ、初心者だ、苦労人だ、怠け者だ、勤勉家だ、陰謀家だ、裏切り者だ、悪党だ、楽天家だ、悲観主義者だ、有識だ、無学だ、無能だ、物知らずだ、世間知らずだ、腕利きだ、不器用だ、愚痴のろまだ、屈指だ、傑出だ、普通だ、人並みだ
無	関係	大違いだ、共通だ、正反対だ、逆だ、反対だ、矛盾だ、平行だ、対等だ、同格だ、合致だ、該当だ、色違いだ、親類だ、実母だ、いとかだ、夫婦だ、養子だ、友人だ、旧友だ、顔見知りだ、恋人だ、先輩だ、同僚だ、同期だ、同級生だ、担当者だ、師匠だ、門下生だ、弟子だ、生徒だ、後継者だ、長官だ、雇い主だ、最年長だ、敵だ、恩人だ、同室だ、別室だ、ルームメートだ
	質	哺乳動物だ、両生類だ、害虫だ、秋田犬だ、高山植物だ、雑草だ、盆栽だ、桜だ、自転車だ、宝石だ、家具だ、幽霊だ、祭日だ、都市だ、国民だ、日本人だ、外国人だ、白人だ、混血児だ、貴婦人だ、少年だ、少女だ、青年だ、若者だ、若衆だ、老女だ、年寄りだ、学生だ、教師だ、先生だ、研究者だ、教育者だ、技師だ、弁護士だ、会計士だ、医者だ、担当医だ、文学者だ、作家だ、評論家だ、記者だ、ジャーナリストだ、芸術家だ、音楽家だ、ピアニストだ、画家だ、男優だ、探偵だ、宣教師だ、経営者だ、商人だ、ビジネスマンだ、小売り屋だ、農家だ、狩人だ、羊飼いだ、飛行士だ、車夫だ、職人だ、大工だ、漁師だ、警察官だ、美容師だ、ホテルウーマンだ、軍人だ、社長だ、助手だ、局長だ、車掌だ、女官だ、支配人だ、管理人だ、召使いだ、お手伝いだ、家来だ、女中だ、侍臣だ

従来の名詞述語文の研究では、「太郎は学生だ」のような、恒常的な《質》を表す典型的な名詞述語文を中心に進められ、一時的な《運動》や《状態》を表す名詞述語文についてはほとんど言及されていない。表 2 からわかるように、これらは決して例外的な存在ではなく、一時的な現象を表す名詞述語文は、語彙の体系の中に確実に存在しており、言語活動において一定の役割を果たしていると考えられる。それらは《運動》を表す動詞述語文、《状態》を表す形容詞述語文とは、語彙的にも文法的にも異なった特徴をもっている。それがどのようなものであるかを明らかにする必要がある。そこで、本研究は、その出発点として、《運動》を表す名詞述語文を一つの研究対象として取り上げることとする。

また、佐藤の記述からも明らかなように、典型的な名詞述語文においても、「彼は学生だ」のような述語が単独の名詞からなる名詞述語文だけでなく、「彼はやさしい人だ」のような、規定語をもつ名詞述語文が頻繁に使用されており、これらは研究対象として重要である。しかし、「彼はやさしい性格だ」のような、形容詞と名詞があわせ述語となっているものや文法化（助動詞化）したものについては新屋（1989）、丹羽（2018）などに注目されているが、そのいずれでもない、「彼はやさしい人だ」のような名詞述語文の重要性を指摘している研究は、佐藤の研究を除いてほとんどない。このようなことを踏まえて、本研究は、「彼はやさしい人だ」や「彼はやさしい先生だ」のような形容詞の規定語をとる名詞述語文をもう一つの研究対象として取り上げることとする。

このように、本研究は、従来の名詞述語文の研究ではほとんど注目されていない、上記のような非典型的な名詞述語文に注目し、《運動》を表す名詞述語文（「お客様が到着だ」など）と形容詞の規定語をとる名詞述語文（「彼はやさしい人だ」など）を主な記述対象とする。

4. 本研究の構成

本研究は四つの章から構成される。

第一章では、本研究に関する研究史を概観したうえで、残された課題を提示し、本研究の位置づけを明らかにする。

第二章では、《運動》を表す名詞述語文を取り上げる。2 節では、運動名詞述語文のモーダルな意味について、認識的な文（叙述文）と意志表示的な文（希求文や勧誘文・命令文）に分けて検討する。3 節では、認識的な文に使われる運動名詞述語文のムード的・テンスの・アスペクト的な意味体系について考察する。

第三章では、形容詞の規定語をとる名詞述語文（「彼はやさしい人だ」など）を取り上げる。2 節では、このタイプの文の使用実態について、大規模な用例調査を通して解明する。3 節では、このタイプの文のテキスト的機能について考察する。

第四章では、本研究が明らかにしたこと及び今後の課題を提示する。

第二章

運動を表す名詞述語文について

1. 本章の目的

《運動》を表す単語は、基本的に動詞であるが、実は「出発」「到着」のように、一部の名詞にも《運動》を表すものがある。本章は、このような《運動》を表す名詞述語文¹を取り上げ、その文法的な意味について考察し、一般的な動詞述語文とどのような違いがあるのかを明らかにすることを目的とする。

その際、まず、2 節では、運動名詞述語文のモーダルな意味について、認識的な文（叙述文）と意志表示的な文（希求文や勧誘文・命令文）に分けて考察する。前者に関しては、ものがたり文（平叙文）の認識的モードについて、断定形（「～だ」）と推量形（「～ダロウ」）の対立を、確認の仕方と情報構造（聞き手にとって、新情報か共有情報か）の観点から追求する。後者に関しては、命令法や勧誘法を持たない名詞述語文は、どのような範囲の意志表示的な文を表すことができるか、またどのように表されるかについて検討する。それから、3 節では、認識的な文におけるムード的・テンス的・アスペクト的な意味体系について、情報構造（述語に焦点があたっているか否か）との相関性を視野に入れながら考察する。特に、形態論的な手段が欠けている運動名詞述語文のアスペクト的な意味は、どのように実現されるのかについて検討する。

そして、本章が取り上げている《運動》とは、動的展開のある現象を表すものであり、つまり、「時間のなかに成立（開始）・展開・消滅（終了）し、場合によっては、結果を残す」という「動態的な運動をとらえている」（工藤 1995: 70）ものである。なお、《状態》（「立腹だ」）、《存在》（「欠席だ」）、《特性》（「近眼だ」）、《関係》（「お似合いだ」）を表すものや、空間配置を表すもの（「観音さまがお立ちです」）などは、本章の対象外とする。

以下では、2 節において、「運動名詞述語文のモーダルな意味について」、3 節において、「運動名詞述語文におけるムード的・テンス的・アスペクト的な意味について」記述する。

¹ 本研究では、「運動名詞述語文」と呼ぶ。

2. 運動名詞述語文のモーダルな意味について

2.1 はじめに

奥田（1985b）によると、言語活動の基本的な単位である文には、対象的な内容とモーダルな意味という二つの側面がある。また、文は、モーダルな意味の観点から、認識的な文と意志表示的な文に分けられる。さらに、認識的な文は、ものがたり文（平叙文）とたずねる文（疑問文）に、意志表示的な文は、まちのぞみ文（希求文）とさそいかけ文（命令・勧誘文）に分けられる。

動詞述語では、ムード（叙述法、命令法、勧誘法）を中心に、モーダルな意味の表現手段・表現内容が発達しているため、盛んに研究が行われてきたが²、名詞述語には、叙述法しかなく、モーダルな意味は単調である。だが、《運動》を表す一部の名詞述語文は、「君、すぐ本部へ連絡だ！」「さあ、出発だ！」のように、命令や勧誘を表す意志表示的な文になりうるのである。こうした名詞述語文のモーダルな意味については、まだあまり注目されていないようである。

一方、断定形と推量形の対立からなる認識的ムード（叙述法）については、動詞述語、形容詞述語、名詞述語のすべてに成り立つ（工藤 2014）。ただし、実際に断定形と推量形がどのように対立しているかについて、述語のタイプの違いを考慮した詳細な分析はまだ十分に行われていないと思われる。

本節では、運動名詞述語文を対象として、それが表すモーダルな意味について考察することを目的とする。まず、認識的な文に関しては、ものがたり文における認識的ムードについて、確認の仕方と情報構造の観点から、断定形と推量形はどのように対立しているかを考察する。次に、意志表示的な文に関しては、形態論的なムードが欠けている運動名詞述語文がどのような方法でどのような意志表示的な意味を表すかについて、動詞述語文との違いを踏まえて、詳細に検討する。

2.2 本節の考察対象

本節では、まず『分類語彙表 増補改訂版』から《運動》を表す漢語名詞を網羅的に抽出し、それらが述語として使用されている会話文の例を、『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）、伴一彦のホームページで公開されているシナリオ、青空文庫、小説類から収集して、考察に使用した。

なお、用例の収集にあたっては、表 1 のようなコピュラ形式のパラダイムのなかにある形式のほか、コピュラなしで終助辞「よ」「な」「ね」「ぞ」「ぜ」などを伴うものや、コピュラも終助辞も伴わない「さあ、出発！」のようなものも対象とした。ただし、「～のだ」「～のだろう」などのような説明の形式や「ではない」「じゃない」などの否定形式は考察対象から除外する。

² 例えば、奥田（1986）、佐藤（1992）、樋口（1992）、村上（1993）など。

表 1 名詞述語文のコピュラ形式

テンズ ムード 丁寧さ	断定		推量	
	普通体	丁寧体	普通体	丁寧体
非過去	だ	です	だろう	でしょう
	である	であります	であろう	でありましょう
過去	だった	でした	だっただろう、 だったろう	だったでしょう
	であった	でありました	であっただろう、 であったろう	であったでしょう

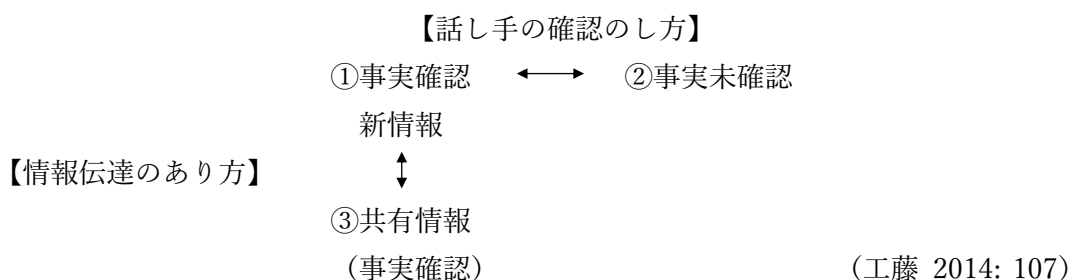
認識的な文には、基本的に表 1 のすべての形態が現れうる。ただし、会話文には、「～である」の系列は現れにくい。それに対して、意志表示の運動名詞述語文では、丁寧体の「～です」は少なく、普通体の「～だ」が圧倒的に多い。そして、認識的な文の場合よりも、コピュラを伴わない例が多い。また、「～である」の系列は現れない。当然、推量の系列は現れない。否定形式が禁止を表すというようなこともない。

以下、2.3 では認識的な文を、2.4 では意志表示的な文を取り上げる。なお、認識的な文については、ものがたり文のみを取り上げることにする。

2.3 認識的な文について

認識的な文におけるものがたり文は、話し手が確認（直接確認・間接確認）した出来事を、聞き手に伝える文である。ものがたり文の運動名詞述語文にも、断定形と推量形という認識的ムードの形式が分化している。

工藤（2014: 107-108）では、「断定形と推量形の対立のあり様は、〈確認のし方〉という認識的（epistemic）な側面（現実との関係）と、〈情報構造〉という伝達的（communicative）な側面（聞き手との関係）の 2 つの側面から、統合的に考えていかななくてはならない」と指摘し、「①と②は、〈事実確認（直接確認）—事実未確認（間接確認）〉という対立である。①と③は〈話し手の確認済みの事実〉である点では共通しつつ、聞き手にとってそれが〈新情報（未知情報）〉か〈旧情報（既知情報）〉かで対立している」と説明している。



「駅前に喫茶店がある。そこで待っていてくれ」のような例が①だとすれば、②は「(たぶん) 駅前に喫茶店があるだろう。そこで待っていてくれ」、③は「(君も知っているように) 駅前に喫茶店があるだろう。あそこで待っていてくれ」のような例である。このように、断定形と推量形の対立を考えるとときには、話し手の確認の仕方だけではなく、情報伝達のあり方を見ることが不可欠である。この工藤の指摘を踏まえて、本節では、ものがたり文の運動名詞述語文における断定形と推量形の対立を〈確認の仕方〉という認識的な側面と〈情報構造〉という伝達的な側面の2つの側面から検討していく。

以下、まず、2.3.1で断定形と推量形の基本的な対立について述べ、続いて、2.3.2で断定形と推量形の二次的な対立(用法)について述べることにする。

2.3.1 断定形と推量形の基本的な対立—事実確認かつ新情報の伝達と事実未確認の対立—

運動名詞述語文は、文の対象的な内容が時間的限定性のある出来事であるため、その出来事は直接確認できる。すなわち、断定形のモーダルな意味は事実確認(直接確認)になりうるのである。したがって、断定形と推量形は、事実確認かつ新情報の伝達と事実未確認という基本的な対立をなしている。そして、事実確認かつ新情報の伝達というモーダルな意味のもとで、非過去形と過去形には、非過去(現在・未来)と過去といったテンス対立が成り立っている。以下では、テンスとの関係を視野に入れながら、2.3.1.1で断定形について、2.3.1.2で推量形について述べることにする。

2.3.1.1 断定形—〈事実確認かつ新情報の伝達〉—

〈事実確認かつ新情報の伝達〉を表す断定形は、推量形に言い換えられず、「絶対に」「きっと」「間違いなく」のような副詞とも共起できない。以下では、話し手の知覚体験による確認であるかどうかによって、2.3.1.1.1の〈現在・過去の事象の(知覚体験による)直接確認〉と2.3.1.1.2の〈疑う余地のない事実の断定〉に分けて述べる。

2.3.1.1.1 現在・過去の事象の直接確認

話し手が知覚体験によって直接確認した、現在・過去の具体的な出来事を、聞き手が知らない事実(聞き手にとっての新情報)として伝える場合である。

まず、話し手が発話現場における具体的な出来事を確認する場合を取り上げる(例1)。工藤(2014)は、これを「リアリティー(現実性)の最高段階である」と指摘している。また、発話現場のことではないが、話し手が直接確認した事実である場合がある。例2では、話し手である支配人は、昨夜ナイトマネジャーと交代したとき、自ら直接確認したことを刑事に伝えている。記憶から引き出す場合もある(例3)。いずれも、直接確認であるため、推量形に言い換えることができない。

- 1) 午後一時になるところだった。「もう首相もつくころね」と、久仁子は腕時計を見て言った。
「変ってるね、君も」剣持が微笑んだ。「どうして?」「休暇をもらったというのに、わざわざ空港までやって来て」「いけない?」久仁子は、空港のロビーを見下ろす階段の上に立っていた。(中略)「閣僚が到着だ」と、剣持が言った。「さあ、下へ行こうか」(プロメテウスの乙女)
- 2) 「早速ですが、支配人さんはホテル全室共通の合い鍵をお持ちですね」(中略)「昼間は私が、夜間はナイトマネジャーが保管しています」「その正確な時間分けはどのようになっていますか?」「(中略) 夜間は私が退社する時に渡し送っております」「昨夜は何時頃渡されましたか?」「昨夜は比較的早く退社しました、そうですね、六時半頃だったと思います」(中略)「そのナイトマネジャーの名前は?」「二人おまして、昨夜は大倉という者が勤務でした」(高層の死角)
- 3) 「お義父さんって、いつも週末しか帰って来ないの?」ネクタイを解く夫の手が止まった。こちらに背中を向けているので表情は分からない。「いつもってことはないよ。きっと出張なんだろう。最近は偉くなって減ったみたいだけど、僕が子供の時は月の半分以上は出張だったから」笑いながら彼は言った。(紙婚式)

ところが、例 4、5 では、非過去形が使われているが、実際は過去の出来事であるので、「おとといはここで徹夜でした」、「ゆうべ徹夜でした」と言い換えることができる。だが、非過去形を用いることによって、〈事象に対する確認〉というモーダルな意味が前面化されるようになり、テンスは「事象時」ではなく、「確認時」「判断時」³が前面化されるようになる。このような現象は、動詞述語文ではありえず、名詞述語文の特徴であるといえる。

- 4) 工場長「池田、お前、おとといの晩の十二時頃どこにいた?」
池 田「おとといの晩?おとといはここで徹夜ですよ。どうしてそんな」
工場長「そうだな。(中略) さっき警察から来てな、何だかおとといの晩、裏通りで交通事故があったとかで、目撃者をさがしてるんだそうだけど」(ダイヤル 110 番分け前)
- 5) 次の朝の新幹線で、耕平は東京を発った。同行の金子は、「出張となると、片づけとかにやいかん仕事が色々あって、ゆうべ徹夜ですよ」と、京都を過ぎるまでほとんど寝ていたが、昔にくらべると便利になったものだ。(末の末っ子)

2.3.1.1.2 疑う余地のない事実の断定

2.3.1.1.1 では〈知覚体験による直接確認した事実〉について述べてきたが、ここで取り上げるのは、話し手自身の知覚体験ではないが、話し手が確認済みの〈疑う余地のない事実〉を〈新情報〉として聞き手に伝える場合である。以下では、〈現在・過去の個別具体的な事

³ 工藤 (1998)、工藤 (2012)、佐藤 (2009) を参照。

実〉と〈未来における確定された予定〉に分けて述べる。

まず、話し手が様々な方法で確認した事象を、聞き手が知らない事実として伝えている場合がある。例6では、話し手が何らかの方法（ニュースやネット）で仕入れた情報、現在の「全便欠航している」という事実を聞き手に伝えている。また、例7では、話し手が確かな情報源（団員たちの話）によって確認した過去の個別具体的な事実を聞き手に伝えている。

- 6) 「警部、ご存じですか。いま台風がきてるんですよ。ニュースでは昼過ぎに八丈島を直撃の見込みと……」「そんなことは当然知ってる」財津は冷たかった。「だからおまえに行かせるんだ。おれは揺れる飛行機が大嫌いだからな」（中略）「でも、警部」こんどはひろみが口を出した。「八丈島行きの飛行機は全便欠航ですよ」「そんなこともわかつとる。屋上のヘリポートにジェットヘリを呼ぶことにした」（南太平洋殺人事件）
- 7) 「わたくしは団員のみんなに訊いたんです。あの晩、釣り道具を借りて釣りをした人は一人も居ないし、そういう人を見た者もないんです。ほとんどが散歩でした。あのレブン湖を『湖上の麗人』のカトリン湖になぞらえて、ロマンチックな詩情に浸っていたといひます」
- 「……………」（黒の回廊）

次は、〈未来における確定された予定〉の場合である。例8のような近い未来の予定であれ、例9のような遠い未来の予定、決まった事実であれ、いずれも〈疑う余地のない事実〉であるので、推量形に言い換えられない。そして、運動名詞述語文が未来を表す場合は、未来であることを時間副詞か前後の文脈で示すのが普通である。

- 8) 「ご苦労さまです。北野さん、コーヒーでもさし入れましょうか」
- 「気を遣わんでくれ。こっちはあと二時間で交代だ。それに対象さんが警戒してるわけでもなし、こんな尾行は楽なもんさ」（枯葉色グッドバイ）
- 9) 「お前の恋人にだ。——どうだ？」さやかはポカンとして石塚を眺めていたが、そのうち、声を上げて大笑いしてしまった。「傷つくなあ、その笑い声は」と、石塚が苦笑いして、「俺は本気だぞ」「——部長。だって、私、まだ中学生ですよ！」「しかし、俺は来年もう卒業だ。今から声かけとかないと、それきりじゃないか」（フルコース夫人の冒険）

2.3.1.2 推量形—〈事実未確認〉—

2.3.1.1 で取り上げた、〈事実確認〉を表す断定形に対して、2.3.1.2 では、〈事実未確認〉の事象に対する〈話し手の推量〉を表す推量形を取り上げる。また、聞き手が事実を知っているかどうかによって、2.3.1.2.1 の〈話し手の推量〉と 2.3.1.2.2 の〈推量した帰結の聞き手への念押しの確認〉に分けて述べる。

2.3.1.2.1 話し手の推量

事実未確認（間接確認）は、過去のこと、現在のこと、未来のこと（例 10～12）のいずれの場合もある。そして、話し手の確信度の違いは、「たぶん」「きっと」「間違いなく」などの副詞によって表される。推量の根拠となる事実（波線部分）が前後の文脈に示されていることが多い。

- 10) 「社長から連絡は？」机の上で祈るように両手を組んだ優子は「いいえ、何もあります」と即座に答えた。「おかしいな。突発的に用事ができたんだとしても、十二時になっても電話の一本もないというのは変だ」平素の堂条秀一ならそんなことはない。「しかしまあ、社長さんだからね。昼から出勤だろう」（ダリの繭）
- 11) 「では、大久保会長は？」（中略）「げんに入院中だし、大久保時代は終わったと見ていい。それに原沢頭取は七十歳、杉本頭取は六十九歳、一つしか違わないが、うちのトップの方が若々しくて元気で覇気がある。となると、原沢さんはあと五、六年で引退だろう。そのあと杉本時代が長く続く筈だよ」（銀行男たちのサバイバル）
- 12) 「怒らないでやってください。たぶんあの人も、そろそろ異動でしょう。そしたら杉村さんが編集長になるんだ。それまでの辛抱です」（名もなき毒）

2.3.1.2.2 推量した帰結の聞き手への念押しの確認

〈話し手が推量した帰結〉が事実であるかどうかを、それを知っている聞き手に対して〈念押しの確認〉する場合がある（例 13）。聞き手の予定を〈念押しの確認〉する場合も、ここに含まれる（例 14）。

- 13) 「盲腸なんて、一週間ぐらいで退院でしょう？」「そうだと思います。でも、あれは、明日にでも——」「もちろん、予定通りにやります。心配しないで任せて下さい」津村は、浦田京子から預かった財布を、内ポケットに入れた。（泥棒物語）
- 14) 翌八日の朝早く、その早瀬から、電話がかかった。「吉井から聞いたよ。おれに行かせてくれ」と、早瀬はいう。（中略）「トカレフのことは聞いたか？」「ああ、聞いたよ。おれはアフガンに行ったとき、ゲリラからロシア製のトカレフを借りて射ったことがあるんだ。あの銃声は覚えてるよ。君は、これから出勤だろう？」「ああ、そうだ」「それなら警視庁の前で会おう。その時、航空券を渡してくれ」と、早瀬はいった。彼はその言葉通り、警視庁の前で待っていた。（十津川警部「友への挽歌」）

2.3.2 断定形と推量形の二次的な対立（用法）

以上に見たのは、断定形と推量形の上に〈事実確認〉と〈事実未確認〉といった〈確認の仕方〉という認識的な側面における対立が成り立っている場合である。これに対して、断定形が〈事実未確認〉を表す場合や推量形が〈事実確認〉を表す場合もある。以下では、その

ケースを取り上げる。

〈事実未確認〉を表す断定形は、確認の仕方においては、推量形と共通であるが、〈話し手の推量・確信的断定〉を明示する。また、〈事実確認〉を表す推量形は、確認の仕方において、断定形と共通であるが、〈共有情報〉という〈伝達的な側面〉において、〈新情報〉の伝達である断定形と対立している。このような現象は、すでに工藤（2014）で指摘されているが、ここでは特に運動名詞述語文ではどうかを見る。

以下、2.3.2.1 で〈事実未確認〉を表す断定形について述べ、2.3.2.2 で〈事実確認〉を表す推量形について述べることにする。

2.3.2.1 〈事実未確認〉を表す断定形—〈推量・確信的断定〉—

断定形は、〈事実未確認〉を表す場合、確認の仕方においては推量形との違いがなくなるため、推量形に言い換えることができる。ただ、断定形を使うことによって、話し手の推量が確信的であることを明示するようになる。

2.3.2.1.1 未来の事象に対する推量・確信的断定

まず、未来の事象の場合を見る。そもそも未来の事象は事実確認できないので、断定形と推量形の対立はぼけやすい。仮定条件（二重線部分）や「きっと」「間違いなく」などの副詞を伴っていたり、前後に推量の根拠となる事実（波線部分）が示されていれば、断定形であっても文のレベルでは推量を表している。したがって、断定形を推量形に言い換えることもできるが、断定形を使用することによって、話し手の確信的断定といった意味が明示される。

この用法では、プラグマティックな面が前面化されることもあり、その場合には、推量形に言い換えにくくなる。例 18 は、刑事が容疑を否認している聞き手への「脅し」であるが、推量形に言い換えれば、単なる見通しになってしまい、「脅し」のニュアンスはなくなる。

- 15) 「台風がきてるんだよ。下手すりゃ明日の飛行機は欠航だぞ」男の声は少し酔っていた。
「じゃあ、パーティのお客さんたちは全員足止めね」（南太平洋殺人事件）
- 16) 「……風呂の中で考えたんだけど、こんどこそ間違いないぜ」風呂からあがって階段部屋に戻って来た俊介が、稔たちにいきなりこう言った。戸棚寝台や机の上や階段に腰をおろして、ぼんやり考えごとをしていた稔たちは、いかにも確信のありそうなその語調に愕いたような眼を俊介に向けた。「退学だよ」俊介は寝台のユッへの隣りに腰をおろした。「この名門高校表札泥事件の責任はきっと取らせられるぜ」「多分、そういうことになるっべね」ジャナリが首振人形のように何度も頷いた。（青葉繁れる）
- 17) 「それがスターの虚像ってやつだな。もっとも僕がシナリオにあの場面を入れなければ、こんな事件は起きなかった……。そう思うと気が重いね」「それはあなたのせいじゃないわ」「そう言ってくれると嬉しいよ」私は微笑んだ。「でも、あれ、きっと放映中止ね」「そ

うなるだろうね」(一日だけの殺し屋)

- 18) 「じゃあ、もう一回聞くぞ。三月十六日未明、刑事にゴロまく前に、仲間二人と会社員を殴りつけて金品を奪ってるな」「……知りません」目は合わせなかった。「じゃあしょうがねえ。任意同行して被害者と面通した。そこでおまえが犯人となったら情け容赦なく逮捕するからな」胸が圧迫された。額に汗も滲みでる。「そうになったらおまえはまちがいなく退学だ。聞いてんだぞ、進学することに決めてんだってな」口の中が一気に乾く。(邪魔)

2.3.2.1.2 現在・過去の事象に対する推量・確信的断定

〈未来〉に比べれば少ないが、〈現在・過去〉の場合でも、断定形が推量を表す場合がある。例 19 は現在の出来事であり、推量形に言い換えることができる。過去の事象についても、ありうると思われるが、用例は見当たらなかった。

- 19) 「待ってください。尚子さんが部屋にいないんですか。朝風呂に入りについてるんじゃないませんか」(中略)「珠江さんに行ってもらった。大浴場にはいなかった」(中略)「食堂には?」「そっちは、ぼくがみてきた」「いなかったんですか」「いなかった」「それじゃ、きっと散歩ですよ。何時ごろから、いないんですか」(光源氏殺人事件)

2.3.2.2 〈事実確認〉を表す推量形—〈共有情報〉の伝達—

確認済みの出来事に対しても、推量形が使われうる。それは、話し手と聞き手の共有情報を伝える場合である。この場合は、情報構造という伝達の面において、聞き手にとっての新情報を伝える断定形と対立しているといえる。そして、談話構造上、話し手の主張の〈前提〉や〈根拠〉として機能する。

こうした事実は、工藤(2014: 127-134)でも指摘されているが、以下に見るように、運動名詞述語文においても、同じような談話構造上の特徴が見られる。例えば、例 20、21 では、推量形が〈共有情報としての事実〉を前提・根拠として提示し、後文脈に話し手の意見や主張や命令が現れている。例 22 では、質問する理由として、後文脈に〈共有情報としての事実〉が提示されている。

- 20) 途方にくれてつい、「どうしよう」とナムに言ってしまう。「明日出発でしょう。予定どおりやるより仕方ありませんね」冷淡すぎる顔で、そっぽを向いたまま答えが返って来る。
(およね平吉時穴道行)
- 21) 「馬鹿は、お兄ちゃんよ。ドラマの見すぎ」「ところがどっこい、ドラマみたいなことが実際に起こるんだよ、うちぐらいの金持ちになると——まあいい、それより美幸、おまえ明日試験だろ。二階にいて勉強でもしてろ。ほら、邪魔だ、あっちいけ、シッシツ」(謎解きはディナーのあとで)
- 22) 腕時計をのぞいて、別に染子へ言った。「そろそろ検番へ行かなくていいの、お稽古でしょ

う」「いいのよ。今日はどうせ久子さんの代稽古だから少々遅れたって苦にならないのさ」
(黒い扇)

なお、次のように、話し手も聞き手も確認済みの共有情報であるのに、断定形を使う場合がある。コンテキストから見れば、共有情報としての事実は、例 23 では〈根拠〉として、例 24 では〈理由づけ〉として機能している。こうした用法は、「ぞ」「ぜ」といった終助辞を伴うことが多く、相手の自覚が十分でないことを非難するニュアンスがあるようである。

- 23) 無駄な練習が三日続いたところで、病院行きを勧められた。「医者に相談するのもひとつの手だと思う。おまえの場合、きっと精神的な問題だ。野球とは無関係の人と会って、胸の中にあるものを吐き出してこいよ」「べつに悩みなんてねえよ」ややむっとした。夜だってちゃんと眠れる。「そう言うな。何か策が見つかるかもしれないだろう。あと三週間で開幕だぞ。このままじゃオープン戦にも出られないぞ」言われて肩を落とした。(空中ブランコ)
- 24) 「今どこにいるんだ？」と小野寺は片耳を指でふさいで大声でいった。「今……真鶴道路を出はずれたところで……車がつかえて……」「真鶴道路？」小野寺の声は思わず上ずった。「なんだってそんな所にいるんだ？——三時半に成田出発だぜ」「昨日……のために……伊豆へ……」雑音と背後のどなり声のために、玲子の声はとぎれとぎれになった。(日本沈没)

2.4 意志表示的な文について

次に、運動名詞述語文が意志表示的な文になる場合を見る。最初に注目すべきなのは、運動名詞述語文は、〈まちのぞみ文〉(希求文)になることはなく、〈さそいかけ文〉(決意文・勧誘文・命令文)にしかならないということである⁴。また、〈さそいかけ文〉でも、依頼文にはならない。

以下、2.4.1 で〈勧誘・命令文〉について、2.4.2 で〈決意文〉について述べることにする。

2.4.1 勧誘・命令文

勧誘・命令文となる運動名詞述語文は、権威や権限を持つ話し手が必要で必要な行動を判断し、その実行を指示するものである。われわれの行動なのか、聞き手の行動なのかによって、つまり行動の主体が一・二人称であるか、二人称であるかによって、2.4.1.1 の勧誘文と 2.4.1.2 の命令文に分かれる。

2.4.1.1 勧誘文

勧誘文としての運動名詞述語文のモーダルな意味を記述するにあたっては、樋口(1992)

⁴ ここでは、決意を表す文を〈さそいかけ文〉に含めている。自分に対するさそいかけである。

の「しよう」の勧誘文の記述が大変参考になる。樋口は、聞き手へのはたらきかけのちがいによって、勧誘文を、次の 3 つのタイプに分けている（多少簡略化して引用、用例は樋口（1992）による）。

I 話し手が自分の行動のなかに聞き手をひきいれようとするもの：

話し手は聞き手にむかって、いっしょに行動することをはたらきかけて、自分が中心となっておこなわれる動作のなかに聞き手をひきいれようとする。（中略）その動作が聞き手にとってのぞましいものであるかどうか、ということには無関心である。

・「私もうたいたいわ」

「どうぞ。ぜひおねがいしたいところです」

万里子は退場しようとする忠一と光枝をつかまえて、

「いっしょにうたいましょう。南国土佐はどう？」

「知っちゃいます」

「じゃ、一、二、三」（私は忘れない）

II ただ動作の遂行をうながしているにすぎないもの：

動作の主導権が話し手にあって、（中略）話し手は自分の行動のなかに聞き手をひきいれようとしなくても、あい手にむかって動作の遂行をうながすだけでいいのである。

・直江はすこしかんがえるように眼を宙にむけたが、すぐ、

「熱はないんだな」

「ありません」

「今日は一応、オパイルンを六錠やっておいてくれ、それから、腰のレントゲンをとっておいて、診察はそれがそろったところで明日にしよう」（無影燈）

これからの動作の方向が、話し手と聞き手にとってのぞましいものとしてさしだされるばあいがある。（中略）そしてとりまく状況から判断して、その場面で自分たちがおこなった方がいいとおもわれる動作を聞き手にさしだしている。

・「これは万里子さんに気の毒なことをしてしまった。台風です。米をもらったら、いそいでひきかえしましょう」（私は忘れない）

III 動作をはじめるときかけのなもの：

ある目的にむかって行動中の人にとって、（中略）話し手が決心のなかにさしだす動作の方向が、そこにいる人たちがむかっている方向とおなじであれば、それはあい手を動作へとむかわせる、うながしの、きかけのはたらきをはたすことになる。

・開襟シャツにショートパンツの信一は、ずいぶん心細さをあじわっていたようである。そこで幾子とおちあう約束であった。

「よっぽどまった？」

「ううん」と、少年は構内をふりかえった。「十七分半まった」

「ごめんなさい。さあ、買物にいきましょう」

幾子は、三丁目にむけてあるきはじめた。(日日の背信)

(樋口 1992: 178-183)

運動名詞述語文の表す勧誘文には、このうちの「うながしのなもの」や「きっかけ的なもの」が中心となり、「聞き手をひきいれようとするもの」がないというのが最も顕著な特徴である。

2.4.1.1.1 うながしの勧誘文

〈うながしの勧誘〉とは、集団で行動するときに、話し手がある場の状況に応じて、これからのわれわれの行動を決定し、行動をうながすものである。直後の実行をうながす場合もあれば、将来の実行を決定して伝える場合もある。ふつう、主語は現れない。そして、語彙にも特徴があり、「集合だ、合流だ、出発だ」といった、人（集団）の移動を表すものに集中する傾向が見られた。

- 25) 「やはりまだだ。どうする？案内しようか」「日本美術のコーナーは何度も見ているんでしょう？一人で見て来ます」「ならこのレストランで合流だ。俺はヨーロッパ絵画でも見てこよう。広すぎて見ていない場所がいくらもある。迷ったら館の人間に道を聞いた方が早い。(中略)」（春信殺人事件）
- 26) 「三田村さん、すぐに警察がくる。あんたも逃げろ。この事態をサツに説明したら、あんたの嫌がらせも話さなきゃならなくなる。やつらにつかまるなよ」(中略)「きみたち、待ちなさい」遠くから警察官の声が二重奏になって響いてきた。おれはタモツにうなずいた。「おれたちも消えよう。別々に逃げて、十分後に七生に集合だ」それでおれたちはいり組んだ地下通路を三方向に散った。(電子の星 池袋ウエストゲートパーク)
- 27) 「用心の上にも用心だ。——マスコミに注目されればされるほど、その手のことがばらされて、大スキャンダルになる可能性も大きい。君には、万一の時の影武者役を頼みたい。——いいね」(中略)「もちろん、おっしゃる通りにします」と、マリは言った。「私の仕事ですから」「じゃ、明日、朝食がすんだら出発だ。水科君が行って、仕度を手伝うことになっているから……」「分りました」(天使は神にあらず)
- 28) 「いやなんでもない。どうやら風はおさまったようだ」加藤は二階の窓の方を見上げた。雪にまみれた宮村が、窓から入って来るのが見えた。宮村は雪を払いながら、「天気はよくなるぞ、早いところ出発だ」その声の方に加藤は眼を向けたまま動かなかった。(孤高の人)

戦闘などの活動において、指揮する立場にある人物がその集団のとるべき行動を判断して指令を出す際に、この種の例が多く見られる。そして、語彙にも特徴があり、「撤退だ、後退だ、退却だ、退去だ、脱出だ、逃走だ、退散だ、出陣だ」などのように、主に戦闘活動における行動の展開や進退に関するもの、特に撤退に関するものに集中する傾向が見られ

た。

- 29) 「焼けてる。俺にはきこえる。パリパリ、パリパリ……。」どちらかの耳が狂っていた。ようやく早瀬は、よろめきながら立ち上った。そして、怒鳴った。「脱出だ。」ふいに、ひどい地響きがして建物がはげしくゆれた。(忍ぶ川)
- 30) 族連合軍は艦列を乱した。統一された指揮系統は、その以前に失われている。ミッターマイヤーの巧妙をきわめる戦術に対し、彼らは各艦ごとの各個撃破に命運を託するしかなかった。むろん、そんなことで対抗できるはずはない。一艦、また一艦と、血祭りにあげられてゆく。「後退しろ、後退だ。味方にかまっている暇はない、逃げろ」戦況不利と見たフアーレンハイトが、自ら急速後退しつつ指示し、貴族たちもそれにしたがった。(銀河英雄伝説)
- 31) 魏軍の士気はいやがうえにも高まる。士気の高揚している軍隊は、実力の倍もの力を発揮することができる。からくりを看破された軍隊は、士気が低下して、実力を出し切ることさえできない。両者のあいだに大きな差が生じた。「退却だ。部隊をまとめよ！」孫権は命令をくださった。彼は気まぐれではあるが、決断は速い。(秘本三国志 六)
- 32) モリソン号はとりあえず白旗をかけた。何のために攻撃されなければならないのか。船長インガソルも、キングも、ギュツラフも理解に苦しんだ。が、白旗の意味を知ってか知らずか、砲撃は止まない。「何ということだ！」船長は直ちに錨を上げることを命じた。砲弾はますます激しくモリソン号に集中する。「退却だ！やむを得ない！」キングが船長に言った。(中略) 急いで後斜桁帆が上げられた。退却の意思表示である。(海嶺 下)
- 33) たいていのことは、家臣の言いなりになる劉璋だが、この非常時には、自分の意見も主張しなければならぬと、よけいな決意をしたようである。(中略)「敵を防ぐのだ。あくまでも防ぐ。……二代にわたって蜀の人民を治め、慈悲を垂れたのは、このようなときに備えてではないか。出陣だ。堂々と戦え」劉璋は麾下の部将に動員を命じた。(秘本三国志 五)

2.4.1.1.2 きっかけ的な勧誘文

話し手がその場で判断したわれわれの行動をうながすのが〈うながし的な勧誘文〉だとすれば、あらかじめ決まっていたわれわれの行動のプランに従って、その実行のきっかけを与えるのがここで見える〈きっかけ的な勧誘文〉である。

人間関係の観点からいえば、話し手と聞き手が同じ集団のメンバーである点や話し手が基本的にリーダー的な人物である点では、前の場合と同じである。そして、主語がない点でも前と同じだが、「さあ」「じゃあ」「いざ」「よし」などの掛け声の独立語を伴う場合が非常に多いという点に特徴がある。

語彙にも特徴があり、「前進だ、進発だ、出動だ、出陣だ、開戦だ、行進だ、出港だ、出航だ、出帆だ」などのように、主に戦闘活動における行動の展開や進行に関するものや、「開始だ、終了だ、休憩だ、交替だ(交代だ)」といった計画にそった行動を表すものに集中す

る傾向が見られた。

- 34) ひろみ 「(門から中を覗き込み) 来た！」加代子たち、見ると——真田先生がやってくる。
真田先生、校門を出てゆく。物陰に隠れて見送る加代子たち。
ちあき 「(ワクワク) さ、尾行開始だ」と、行こうとした時——「真田先生！」吉本先生が真田先生を追いかけて校門を飛び出してくる。加代子たち、またま物陰に隠れる。(な・ま・い・き盛り)
- 35) 「部長、とうとう百円の大台を割りましたよ。この分だと今日中に安値顔合わせしますよ」場の気配を取っていた寺田が言った。「よし、買え！」山路は長い間ためていた息を吐き出すように言った。「えっ？」寺田が信じられないような顔をした。「買え、買えと言ったんだ」「しかし、まだまだ下りますよ」「いや、もうこれ以上待てない、売り物は全部さらえ、いよいよ出動だ」(大都会)
- 36) 「署長さん、佐清のやつ、まさか自殺するんじゃない……」「そのおそれは十分あります。だから一刻も早く取りおさねばならんのだが、あんた、その姿じゃ無理だな」金田一耕助はニヤリと笑った。(中略) そこへお巡りさんがひとり、あわただしく入ってきて、なにやら署長に耳うちした。署長は強くうなずくと、「よし、それじゃ出発だ」(中略) 自動車はすぐ雪解けの道のぬかるみをけて走り出した。(犬神家の一族)
- 37) ——手柄を立てて、家郷へ凱旋しようぞ！歌う者の頬が濡れはじめる。曹操はそれをじっとみつめる。歌声が最高潮に達したとき、曹操は櫓のうえで両手をあげて叫んだ。「いざ、進発ぞ！流れに乗って、東呉の碧眼児を葬り去らん！」歌声はたちまち雄叫びと変わり、雄叫びがくり返され、いつのまにかまた歌声と変わった。こうして両軍とも、興奮の極に達した将兵を兵船に寄せ、雌雄を決すべく戦場へむかった。(秘本三国志 五)
- 38) 午前三時が、当直の交代の時間である。交代員の鈴木は、十分ばかり寝すごしてから、ゴソゴソと起きあがり、生あくびをしながら甲板に上って行った「おい。交代だ」と、相手の肩を叩いた。そのとたんに、古沼の太った身体が、グラリと揺れ、そのまま、声もなく、ゆっくり、甲板に横倒しになってしまったのである。(失踪計画)
- 39) 「——カット！」監督の早坂の声が飛んだ。「録音は？」「OK です」と、録音技師が手を挙げる。「OK！良かったよ、今の。——じゃ、休憩だ」と、早坂はニッコリ笑って、さやかに背いて見せた。(フルコース夫人の冒険)
- 40) 夜明けの空気は冴えて、胸に痛いほど冷たかった。ビル街のうえの東の空は、透明なスクリーンになり、朝焼けを広げている。あくたがわ翼が制作の亜希子にいった。「今日も稽古だよな。集合時間、何時だったっけ」「お昼の十二時です」翼は新しいスイス製の腕時計を見た。「じゃあ、ここで解散だ。みんな、ちゃんと部屋にもどって眠るんだぞ。睡眠不足はのどによくないからな。昼からは、ばりばりしごくから、そこんどこよろしく」伊達千恵美が腕組みをしていった。(下北サンデーズ)

2.4.1.2 命令文

上で見たように、勧誘を表す運動名詞述語文は、相手が断る権利を有する〈ひきいれ的な勧誘文〉にならず、リーダー的な話し手による指令という特徴があることから、強制力の点で、命令文に近い性質をもつといえそうである。行動の主体がわれわれか聞き手かという違いはあるが、それ以外の点は、命令を表す運動名詞述語文と勧誘を表す運動名詞述語文とは類似する点が多い。

命令を表す運動名詞述語文は、その場を取り仕切る話し手がその場の状況に応じて聞き手がとるべき行動を判断して、その実行を指令する。したがって、話し手は、聞き手が所属する組織・集団の監督や上司、管理者などである。聞き手が主語として現れることもあり、呼びかけ語になる場合もある。

- 41) 沖には大小何十隻の軍用船が煙をはいており、川岸の碇泊場本部には船員たちがしきりに出入りして命令をうけていた。係りの将校は兵站の要求にしたがって船の運航を司令する。
「第三〇〇丸は安慶へ行ってもらおう。今日の午後四時出帆だ。少しいそがしいね。積荷は衛生材料とガソリンだ。(中略)」それから積荷がはじまる。(武漢作戦)
- 42) 中原さんのいうように、今度の事件を必ず脚本にするだろう。そんなことになったら、今よりもっと客を取られてしまう。「やりましょう」と私はいった。「よし。高田君も今日は徹夜だ。何とかして朝までに脚本を作りあげる。それからみんなは、明日の朝七時に集合だ。それまでに脚本は作っておく。七時から稽古をする。殺される踊り子の役をやる娘も出るが、それは覚悟しておいて欲しい」(浅草偏奇館の殺人)
- 43) 「財津警部、一課長がお呼びです」(中略) 財津警部が難しい顔をして席に戻ってきた。「フレッド、ひろみ、ちょっとこい」(中略)「喜べ、事件だ」「えー、昨日やっとデカイヤマが片付いたばかりなのに」レッドは文句を言った。「ぶうぶう言うな。ひろみと一緒に出張だ。これでも文句あるか」「え、ほんとうですか」思わずフレッドは耳を疑った。(中略)「で、いつ?」「すぐにだ」(南太平洋殺人事件)
- 44) 「あいつらデモをかけているんだ。刑事さん、山田範子が危ない!」「さあ何のことかね?」刑事は、シャラッとした表情で、そっぽを向いた。「おれはヘルメットへ行く」(中略)「我々は同行拒否と認めるぞ」「わからずやめ! なんとでも勝手に解釈しろ」味沢は、刑事を押しつけて歩きだした。刑事はあえて阻止しようとしなかった。味沢がかなたへ歩み去ってから、年輩刑事はニヤリと笑って若い相棒に向かい、「きみ、すぐ本署へ連絡だ。味沢岳史は逃亡した。直ちに逮捕状の発付を請求するようにと。おれはヘルメットへ行く。きみもあとから来てくれ」「承知しました」(野性の証明)
- 45) 「命がけの仕事だが、まあ、しっかりやってもらいたい」と、畔柳博士がもぐもぐとつぶやいた時、突然、あちこちからけたたましいサイレンの音が聞こえてきた。「あっ、来た!」新日報号の機上では、マリー・宮本がきつと唇を噛みしめる……。網の少女「マリー、用意だ!」三津木俊助の合図に、「はい!」と、答えて立ちあがったマリー・宮本は、さすが

に緊張のため、まっ青な顔をしていた。立ちあがったマリーは、マントを脱ぎすてる。軽業をする時のような身軽さだ。(風船魔人・黄金魔人)

- 46) 当直のあいさつをうけ、大あくびを一つしたとたん、甲板員の叫びを聞いた。船橋から南を見わたして、その白光の連なりを見たとたん、船長は自分で緊急警報ボタンにとびついた。「エンジン始動!」と船長は当直士官にどなった。「緊急退避用意!」当直士官はあわを食って、エンジンルームを呼び出した。「乗客は?——まだどのくらいのこっているか?」船長は、船内に鳴りわたる警報におどろいて船橋にとびこんできた事務長(パーサー)にかみつくようにどなった。「あと二百人ぐらい残っていますが——今、乗船中です」「人数をやって大至急乗船させろ。五分たったらタラップをはずせ、緊急出航だ。通信士を呼べ。運航事務所に緊急出航する旨伝えろ。——汽笛吹鳴だ。ほかの船にも知らせろ。沖合へ退避する」

「なにをですか?」事務長は面くらったように眼をしばたいた。

「ばか!——津波をだ。襲ってくるぞ。たぶんな……」(日本沈没)

- 47) 湯川は左側のチームには、やや腰高に構えさせた。草薙の目には、不安定な姿勢に見えた。これでは勝負は明らかだと思った。「よし、じゃあ試合開始だ。両者とも構えて。用意……ワン、ツー、スリー、スタート」湯川のかけ声で試合が始まった。両チームとも懸命に引っ張る。(予知夢)
- 48) 高松発東京行きの直行便と、大阪経由便の羽田到着時間は、同席の五人、各自の脳裏に刻み込まれている。(中略)「大阪乗り換えの480便では絶対無理です。羽田に着くのが九時四十分ですからね。だが、直行の578便なら間に合います」(中略) 凶行時間は短縮される。その点に新しい問題が派生するかもしれない。しかし、芙美の東京ー高松間往復が可能となれば、推理はさらに一歩前進して肉付けされるわけだ。「よし、本部へ連絡だ。578便の女性搭乗者を徹底的にチェックしてもらおう」森安は吉井に命じた。(瀬戸内を渡る死者)

なお、稀ではあるが、次のように、意志的に実行可能ではない動作に使用され、〈励まし〉の意味になっている例が見られた。勧誘文にもこのような移行は見られると思われるが、用例は見当たらなかった。

- 49) パ・リーグの先発投手は乱調で、一回裏にセ・リーグの連打をくらい、二点を先取されてしまった。それに対し、パ・リーグは三回表に連打と四球で一死満塁のチャンスをつくった。竜堂兄弟は、椅子から半分立ちあがった。「よおし、いけいけ、一気に逆転だ!表面的な人気にあぐらをかいてるセ・リーグなんか、たたきつぶせ!」「最低でも二点、二点!」終が西海白竜王、余が北海黒竜王であるとしても、眼前の試合を左右するような能力はない。ふたりの声援もむなしく。(創竜伝)

2.4.2 決意文

運動名詞述語文には決意文と解釈できるものがある。ただし、ここでも主体の制限が厳しく、組織や機関の運営・存廃に関する権限を握る人物でなければならない。基本的に、主語は「～は」で示されるが、それは動作主体ではなく、動作の対象である。一種の遂行文であるといえる。⁵

- 50) 「さっき、とつぜん気がついたのだが、その十年がたった。そこで、急いでやってきたのだ。さあ、結果を知らせてもらおう。成功だったら、いくらでも報酬を払う。しかし、だめだったのなら、この研究所はただちに廃止だ」エヌ博士はすぐには答えず、ちょっと首をかしげた。すると、どういう順序で告げるべきか、最も適切な発表の方法が頭に浮かんできた。(ごたごた気流)
- 51) 部屋に入ってドアを閉めると、船長はつんのめるようにしてしゃべりだした。「今夜の計画は一旦中止だ。延期になった」「どうして?」「江口総子というお手伝いの女——」「牧原とかいう刑事に相談してた女だろ?」「ああ。その刑事に知恵をつけられたらしい。近づいてくる人間を写真に撮ってる」(中略)「(中略) あの女、昨夜、レストランの客の顔も写していたかもしれない。我々が写っている可能性も、まったく無いとは言えない」(クロスファニア)
- 52) 錠 「やめろやめろ、探クラやめちまえ!」
麻 耶 「偉そうに何よ、部長ったって飾りものじゃないの。マーローがやめれば!」
葉 山 「(呆れて) 二人ともいい加減にしろ」
麻 耶 「ホームズは関係ない!」
錠 「(ヤケクソ) じゃあ解散! 今日限り探クラは解散だ!」
麻 耶 「結構ね、普通の女の子に戻れるわ!」プイッと部屋を出てゆく。(探偵同盟)

また、「離婚だ、絶交だ、絶縁だ」のように、話し手が一方的に人間関係の断絶を宣言するような例も見られた。

- 53) さより 「もう、あんたとなんか一緒にいたくないの!」
修 造 「ああ、だったら出てけ! 離婚だ!」
さより 「上等じゃない! 届け、出しといて!」と、吐き捨てて出てゆく。
修 造 「ったく!」雑誌を投げ捨てる。(寿司、食いねえ!)
- 54) 真 衣 「好きなら好きって言えええやろ! 女らしくないで!」

⁵ 「きさまは免職だ」のように、聞き手に身分の変更を申し渡す例も多く見られた。これらも遂行文的であり、決意文的な性質が認められるが、一人称文ではないため、区別すべきである(一人称文にするためには「～を～にする」と言い換える必要がある)。同様のものが、「出向だ、解雇だ、停学だ、退学だ」といった語彙に集中している傾向が見られた。

亜衣 「あー、ウルサイウルサイウルサイ！」

真衣 「亜衣ちゃんとは絶交や！」

亜衣 「こっちから絶交や！」（双子探偵）

あまり用例は多くないが、自分のとるべき行動を判断し、自分に言い聞かせるような例もある。決意文としては、こちらが典型的である。

- 55) 考えこんでいたロイエンタールは、不意に人の悪い微笑を黒と青の瞳に浮かべた。「よし、ここは後退だ。多大の犠牲を払ってまで、死守する価値はない。奪回するのはローエングラム侯にやっていただく」（中略）ロイエンタールはそう計算した。（銀河英雄伝説）
- 56) ついて行くと、トイレの中には人気がなかった。「どうしたんだ？」「その一番奥」——覗いてみて、ギョッとした。堀川あけみが、タイルの床に、体をねじるようにして、倒れている。「死んでるな」と、私は言った。（中略）「急いでホテルの人間と警察に連絡だ」私は、念のために、あけみの手首の脈を取ってみてから、立ち上った。「君、ここにいてくれ。誰も近付けるな」「分ったわ」（幽霊園遊会）
- 57) （敏子と浜田はつきあっている。敏子と別の男が高級車に乗っているとき、道で歩いて浜田の姿が見えた場面である）浜田は上着を脱ぎ、手に持ってうつむきかげんに歩いた。車はその浜田を次々に追い抜いて行く。（中略）「そんじゃ、ま、左折だな」と車をスタートさせた。「静かにやって」敏子は鋭い声で言った。「ちえっ、これじゃまるで間男だ。こそこそしちゃってよ」それでも男は言われたとおりに、静かにゆっくりと車を進めた。浜田が来たほうへ行く。（平家伝説）（括弧の解説は、筆者が原文にもとづいてつけくわえたものである）

2.5 おわりに

以上、運動名詞述語文のモーダルな意味について、認識的な文と意志表示的な文に分けて述べてきた。

認識的な文におけるモーダルな意味は、動詞述語文の場合とさほど変わらないといえる。断定形と推量形は、認識の仕方と情報伝達の両面で対立している。ただし、運動名詞述語文では、名詞文としての性質から、テンス形式が、事象の時間から離れて、判断時や確認時を表すようになるという現象が見られる。

これに対して、意志表示的な文のモーダルな意味は、ムードの分化がないこともあって、著しい制約がある。まず、希求文や依頼文にはならない。勧誘文では、ひきいれ的な用法がない。ムードがないため、勧誘・命令・決意の意味の区別はもっぱら人称に依存する。さらに、人間関係の面での主体の制約が著しく、基本的に、組織や集団の構成員としての聞き手の行動や、組織や集団の活動に関する決定権をもつ人物でなければならない。この制約から解放されているのは、決意文の一部にすぎない。また、決意文の多くが遂行文化している。

3. 運動名詞述語文のムード的・テンス的・アスペクト的な意味について

3.1 はじめに

本節では、認識的な文（平叙文と疑問文）を対象として、運動名詞述語文が表すムード的・テンス的・アスペクト的な意味について、小説の会話文から収集した用例にもとづき、体系的に考察することを目的とする。

運動名詞述語文には、「お客様が到着だ」、「局長は出張だ」のような普通形もあるし、「お客様がご到着だ」や「お客様がお待ちだ」のような「お／ご〜だ」をともなう敬語形もある¹。また、運動名詞述語文は、形態論的にはテンス対立（「〜だ」「〜ダッタ」）はあるが、動詞述語文のように「スルーシテイル」のアスペクト対立はない。にもかかわらず、実際の使用において、動詞述語文と同じように、完成性や継続性といったアスペクト的な意味を読み取ることができる。だとすれば、そのアスペクト的な意味が、どのように実現されているのが問題となる。そこで、本節では、運動名詞述語文のムード的・テンス的・アスペクト的な意味の体系を考察し、そのアスペクト的な意味の実現条件について、語彙的な意味との相関性、テンス、ムード、情報構造との相関性を視野に入れながら検討する。

3.2 先行研究

従来の研究では、「お／ご〜だ」のような敬語形を対象として、それが表すテンス及びアスペクト的な意味について言及したのは、菊地（1994）、丹羽（2008）、新屋（2010）が挙げられる。

まず、菊地（1994）では、「「お／ご〜だ（です）」は、「……ている」の尊敬語として、なかなかすっきりしたスマートな語形である」と位置づけていると同時に、「この「お／ご〜だ（です）」という形は、（中略）（1）「……している」の意だと説明できる場合が多いが、ほかに、単に（2）「……する」、あるいは（3）「……した」の意でも、使われることがある」と指摘している（菊地 1994: 193）。それぞれにあたる例文は、（1）「何をお探しですか」（2）「部長、今日はまっすぐお帰りですか」（3）「〇〇さんがお見えです（＝来た意）」などが挙げられている（下線は菊地（1994）に従う）。

また、丹羽（2008）では、「お／ご〜だ」を動詞の語形として位置づけながら、名詞述語の性格と動詞述語の性格の両面をあわせもつものとして、それが表すテンス・アスペクト的な意味がどのようなものであるかについて具体的に記述し、結論を次の表にまとめている。

¹ このようなことは、すでに高橋（1984）、佐藤（1997）によって指摘された。

(過去の完了)				(未来の完了) ²
過去の状態			現在の状態	(未来の状態)
過去の動き	動き+効力	直前の動き	(現在の動き)	未来の動き
オ V ダッタ形	オ V ダ形			

丹羽 (2008: 73)

そのうち、「動き+効力」と「直前の動き」をあわせたものが「現在の完了」である（丹羽 2008: 73）と指摘されている。また、丹羽に使われている「動き」「状態」「完了」は、それぞれ本研究の「完成性」「継続性」「パーフェクト性」に相当するものであろう。つまり、非過去形の「お／ご～だ」は、未来完成性／未来継続性／未来パーフェクト性と現在継続性／現在パーフェクト性を表し、過去形の「お／ご～だった」は、過去継続性／過去完成性／過去パーフェクト性／現在パーフェクト性（一部）を表すと丹羽が結論づけている。そして、過去形の「お／ご～だった」には、発見や想起といったムード的な用法があると注に指摘されている。

新屋（2010）では、「お／ご～だ」のテンスについて、非過去形は現在／未来を表すのに対し、過去形は過去を表すが、過去形には発見や想起といったムード的な用法があると述べている。また、「お／ご～だ」にはアスペクトがないが、アスペクト性（「アスペクト的な意味」）があると指摘したうえで、「お／ご～だ」の非過去形が表すアスペクト的な意味について次のように分類している（例文は新屋（2010）による）が、過去形については言及していない。

- A. 現在持続中の行為を表わすもの
 - (35) どなたかお探しですか。
- B. 過去に終了した動きの結果として現在の状態を表わすもの
 - (36) 伯父上は、すでに 70 歳におなりです。
 - (37) みなさん、クリスマスのご予定は、お決まりですか？
- C. 現在の思考・感情などの主観のあり方を表わすもの
 - (38) 学校様はお怒りだ！
- D. 現在の反復、習慣などを表わすもの
 - (40) あの方は毎日隅から隅まで新聞をお読みです。
 - (41) 同じような髪質の方、シャンプーは何をお使いですか。

²丸括弧が付いている意味と付いていない意味の違いについては、「丸括弧の付いている用法が丸括弧の付いていない用法に比べて用いられる度合いが低いことを示す」と述べている（丹羽 2008: 73）。

E. 長期的な状態を表すもの

(43) どちらにお住まいですか。

F. 眼前の状況を意味づけるもの

(44) おや、もうお帰りですか、ありがとうございます。また、ごひいきに。

(46) やあ、今お着きですか。

G. 過去の動作を問題にするもの

(50) 平三郎が筆を走らせた紙を手を、(中略)「何の絵をお書きです?」「いや」と平三郎は言葉を濁し、腕を組んだ。

(新屋 (2010: 36-39) にもとづく)

つまり、A と E は現在継続性、D は現在反復性／現在習慣性のことで、F は (44) のような未来完成性 (直後) と (46) のような現在パーフェクト性 (直前) の 2 種類に分かれ、G は過去完成性を表しているのである。だが、後述 (本節の 3.4.1.2 を参照) するように、G は過去完成性を表すのは、文の焦点が述語以外の部分「何の絵」にあたっているからだと考え。また、B と C のような《運動》ではないものが表すテンス・アスペクト的な意味については区別して考える必要があると思われる。

以上見てきたように、「お／ご～だ」のような敬語形が表すテンス・アスペクト的な意味の範囲については、詳しく記述されているが、形態論的にはアスペクトが欠けているなか、アスペクト的な意味がどのように実現されているのかについては、ほとんど言及されていない。また、「お／ご～だ」の過去形には、ムード的な用法があるという指摘があるが、ムードとの相関についてはさらに詳しく検討する余地があると思われる。本論文では、テンス・アスペクト的な意味の研究にあたっては、時間的限定性を土台とし、ムードとの相関のなかでとらえなければならないと考える。

したがって、本節では、《運動》を表す名詞述語文 (敬語形も普通形も含む) を対象として、それが表すテンス的・アスペクト的な意味について、ムード、情報構造 (述語に焦点があたっているか否か) との相関のなかで検討し、アスペクト的な意味の実現条件を明らかにしたい。なお、本節の考察は、会話文から収集した使用例の観察にもとづいている。

以下では、調査方法と考察対象とした語彙を示したうえで、3.4 では「テンスとムード」について、3.5～3.7 では「アスペクト的な意味」について見ていく。

3.3 調査方法及び考察対象

本節では、まず、BCCWJ の短単位検索を用いて、表 1、表 2 のような検索条件によって、敬語形と普通形に分けて用例収集を行った。また、『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』、伴一彦のホームページで公開されているシナリオや青空文庫、小説類から用例収集を補った³。

³ 検索用リストの作成には、工藤 (1995・2002a・2004・2014) を参考にしながら、小説の目視で手拾いした語彙、BCCWJ から収集した語彙に加えて、『分類語彙表 増補改訂版』から集めた語彙を使用している。

表 1 BCCWJ 検索条件—敬語形—

検索対象	前方共起条件	キー	後方共起条件
出版・新聞、出版・雑誌、出版・書籍、図書館・書籍、白書、ベストセラー、法律、国会会議録、広報誌、教科書；全てのジャンル；全期間；コア・非コア	キーから 1 語、語彙素が「御」	品詞の大分類が「動詞」、AND 活用形の大分類が「連用形」	語彙素が「だ」
		品詞の大分類が「名詞」	語彙素が「です」
			語彙素が「で」

表 2 BCCWJ 検索条件—普通形—

検索対象	キー	後方共起条件
出版・新聞、出版・雑誌、出版・書籍、図書館・書籍、白書、ベストセラー、法律、国会会議録、広報誌、教科書；全てのジャンル；全期間；コア・非コア	品詞の小分類が「名詞—普通名詞—サ変可能」	語彙素が「だ」
		語彙素が「です」
		語彙素が「で」

それから、収集した用例のなかで、次のすべての条件を満たすもの（約 3000 例）を考察対象とした。

- ① 《運動》を表す。⁴
- ② 「～だ／だった、～である／であった、～であります／でありました、～です／でした、～でござる／でござった、～でございます／でございました、～でいらっしゃる／でいらっしゃった、～でいらっしゃいます／でいらっしゃいました」などのようなコピュラをとる⁵。
- ③ 認識的な文（平叙文・疑問文）に現れる。
- ④ 会話文に用いられる。
- ⑤ 終止形に使用される。

また、敬語形の用例を収集するにあたっては、「文字列検索 QGREP」のあいまい検索で補った。なお、できるだけ網羅的に収集するため、この段階ではやや広めに用例をとっている。

⁴ 第 2 章 1 節「本章の目的」の規定を参照。

⁵ 当然のことながら、「だろう」を代表とする推量形のバリエーションなども含まれる。なお、否定形は考察の対象外とする。

次の表3では、考察対象とした名詞述語のリスト（非過去形で代表とさせる）を、語彙的な意味の区別およびそれらが実現するアスペクト的な意味の範囲とともに示す。

表3 考察対象とした名詞述語のリスト

語彙的な意味		名詞述語	アスペクト的な意味
主体動作	I類	お言い／お云いだ、お話しだ、お読みだ、お書きだ、ご覧だ、ご上覧だ、お見だ、お睨みだ、お飲みだ、お吸いだ、お召しだ（食べる）、お召し上がりだ、ご入浴だ、お召しだ（入浴する）、お歩きだ、お洗濯だ、お勉強だ、勉強だ、お習いだ、お手習いだ、ご研究だ、研究だ、ご出勤だ、出勤だ、ご精勤だ、勤務だ、お通夜だ、残業だ、徹夜だ、ご旅行だ、旅行だ、お散歩だ、散歩だ、お泊まりだ、外泊だ、ご相談だ、ご見物だ、ご見学だ、ご視察だ、お登りだ、お遊びだ、ご予約だ、ご注文だ、ご変更だ、ご支配だ、ご辞退だ、お作りだ、おやりだ、お使いだ、お用いだ、おかけだ（電話をかける）、お会い／お逢いだ、ご面会だ、お見送りだ、お見合いだ、お育ちだ、ご加入だ、お引き出した、お買いだ、お笑いだ、お叱りだ	継続性と完成性の両方がある
	II類	お呼びだ、お召しだ（呼び寄せる）、お待ちだ、お待ち合わせだ、お待ち受けだ、お探し／お捜しだ、お調べだ、お尋ねだ、お訪ねだ、お持ちだ、お住まいだ、お住みだ、お暮らした、お過ごしだ、お勤めだ、お働きた、お控えた	継続性に偏る
	III類	お聞き／お聴き／お訊きた、お聞き及びだ、お聞き取りだ	パーフェクト性のみ
主体変化	I類	お見えだ、おいでだ、お発ち／お立ちだ（出発する）、ご出発だ、出発だ、お越した、ご出立だ、出立だ、お立ち出でだ、お旅立ちだ、ご発足だ、お帰りだ、お戻りだ、お着きた、ご到着だ、到着だ、ご着到だ、ご帰宅だ、ご帰館だ、帰館だ、ご帰京だ、ご帰国だ、帰国だ、ご帰還だ、帰還だ、帰郷だ、お出かけた、ご出張だ、出張だ、おでました、出港だ、出動だ、ご外出だ、ご参詣だ、お参りだ、お墓参りだ、お詣りだ、出社だ、お迎えだ、ご出陣だ、出陣だ、お出迎えだ、お廻りだ、お通いだ、お通りだ、お見廻りだ、お引越した、引っ越した、ご登場だ、ご入場だ、お籠りだ、ご参籠だ、お乗りだ、お召しだ（乗る）、お上がりだ、お下り／お降りだ、お別れだ、お集まりだ、集合だ、お向き合いだ、お座りだ、お亡くなりだ、お生まれだ	継続性と完成性の両方がある
	II類	お寝み／お休みだ（寝る）、お眠り／お睡りだ、お目覚め／お目醒め／お眼ざめだ、お起きた、起床だ、（お腹が）お空きた、お召しだ（着る）、お履きた	継続性に偏る
	III類	ご卒業だ、卒業だ、ご結婚だ、ご転勤だ、転職だ、ご栄転だ、昇格だ、昇進だ、ご転任だ、転任だ、転勤だ、異動だ、ご出仕だ、ご退官だ、退官だ、定年／停年だ、退職だ、引退だ、退役だ、復帰だ、入院だ、退院だ	完成性のみ

表3が示している通り、運動名詞述語文に使用される語彙は、おもに衣食住や勉強・仕事をはじめとする日常生活を表すものに集中している傾向が見られる。それから、語彙的な意味は、アスペクト的な意味との相関から見れば、大きく主体動作を表すものと主体変化を表すものに二分類することができる。さらに、それぞれのグループに属するものが実現するアスペクト的な意味によって、継続性と完成性の両方があるⅠ類、継続性に偏るⅡ類、パーフェクト性のみまたは完成性のみを表すⅢ類に分けることができる。このように、動詞述語のように形態論的なアスペクト対立のない名詞述語は、そのアスペクト的な意味の実現が語彙的な意味に大きく依存しているということがいえる。すなわち、完成性のみを表すのは社会的地位・身分の変化を表すもの（主体変化Ⅲ類）であり、パーフェクト性のみを表すのは情報の取得を表す「お聞きだ」のグループ（主体動作Ⅲ類）である。また、継続性に偏るのは、目的のある動作や長期的な動作（主体動作Ⅱ類）、日常生活の起臥や再帰的な動作を表すもの（主体変化Ⅱ類）であると概括的にいうことができる。この点に関しては、また後述する。

3.4 テンスとムードについて

本研究の調査によると、非過去形は約9割であり、過去形より圧倒的に多いことがわかる。そして、非過去形と過去形のテンス対立はムードや情報構造と相関している。ムードが確認・記述（新情報の伝達）である場合は、テンス対立が成立している。また、話し手の評価感情や発見、想起といったムードが前面化される場合は、過去の出来事に非過去形が使われたり、その逆のことが起こったりする。さらに、述語に焦点があたっていないときには、過去の出来事に非過去形が使用されるようになりうる。以下では、ムードによって、3.4.1の確認・記述（新情報の伝達）である場合と3.4.2の確認・記述（新情報の伝達）ではない場合に、さらに情報構造の観点から、3.4.1.1の述語に焦点が当たる場合と3.4.1.2の述語に焦点があたっていない場合に分けて、テンスの対立について見る。なお、用例は、敬語形と普通形をあわせて示すことにする。

3.4.1 確認・記述（新情報の伝達）である場合

3.4.1.1 述語に焦点が当たる場合—テンス対立がある

確認・記述（新情報の伝達）というムードのなかで、かつ述語に焦点が当たる場合は、アスペクト的な意味はどうであろうと、基本的に非過去形と過去形のテンス対立が成立し、非過去形は現在または未来を、過去形は過去を表す。そして、非過去形は未来を表すには、基本的には状況語が必須である。ただし、非過去形のうち、現在を表すのは約7割弱、未来を表すのは約3割弱を占めている。

非過去形―〈現在〉

- 1) 「若旦那様でございますか。寛様はお出かけでございます。はい、お仕事で…」(黒い扇)
- 2) 「先生は？」西田は女性秘書にきいた。「外出です。今日はお戻りになりません」愛想のない声で彼女は答えた。(迷走地図 上)

〈現在継続性〉

- 3) 店員 「お連れさまがお着きです」
南雲 「お通しして下さい」(スチュワーデス刑事 10)
- 4) 「……ああ、話しているうちにもう到着だ」いつのまにかフェリーは西岸に着いていた。
(「ナイルの甲虫」殺人事件)

〈現在パーフェクト性〉

- 5) 「大奥のお女中の浦風さまが一年に二回はお詣りになります。そのほかは代参のお女中がよくお見えでございます」(鬼火の町)
- 6) 「まだまだ驚くのは早いですよ。何せ、朝の五時には出勤ですよ。冬はちょっと遅いですけどね」
「え!?五時に? 竜太さん、一度もそんなこと言わなかったわね」(銃口)

〈現在反復性〉

非過去形―〈未来〉

- 7) 「(奥さんは) 一足、遅れていらっしゃるそうで、明日はおつきでございましょう」(幽霊西へ行く)
- 8) 「――間もなく御城下はずれまでお見えでございます」(新書太閤記 四)
- 9) 「まあ、それでとにかく、小川さんに知らせておこうと思ったんです。明日から旅行ですしね。でも、連絡がつかなくて……」(キラレ×キラレ)
- 10) 「怒らないでやってください。たぶんあの人も、そろそろ異動でしょう。そしたら杉村さんが編集長になるんだ。それまでの辛抱です」(名もなき毒)
- 11) 「たいへんですね。今から出勤ですか?」
「ええ、もう少しして出掛けます」(砂の器 下)

〈未来完成性〉

過去形―〈過去〉

- 12) 「(伊太郎が) お昼前にみえて、ちょうど方斎先生がお出かけでしたので、ずっと道場でお帰りをお待ちでした。つい、先程から先生のお居間で話し込んでいらっしゃいます」(狐の嫁入り)
- 13) 「私は前の奥様の亡くなった事情を調べてみました。強盗に殺されたといっても、抵抗した跡がないとか、玄関の鍵がかかっていなかったとか、色々妙な点があったことを知りました。けれど旦那様はその日出張だったのです。(中略)」(死者は空中を歩く)

〈過去継続性〉

- 14) 「今朝女子バレーの試合を話題にしようとお話をおかけしたら、先生もすでにご覧だった」

(作例)

〈過去パーフェクト性〉

15) 「月に一度ほどおみえでした。(中略)」(風の日⁶にララバイ)

16) 「お義父さんって、いつも週末しか帰って来ないの？」(中略)

「いつもってことはないよ。きっと出張なんだろう。最近は偉くなって減ったみたいだけど、僕が子供の時は月の半分以上は出張だったから」笑いながら彼は言った。(紙婚式)

〈過去反復性〉

また、Yes-No 疑問文の場合は、述語に焦点があたっている限り、テンス対立については上述と同じである。なお、非過去形が未来を表す場合、例 17、18 のような直後の動作であれば、状況語は必須ではない。

17) フロントへ鍵を出すと、「お出かけでございますか？」と係の男が訊いた。(自殺行き往復切符)

18) 「あれ、お客さまもお帰りですか？」結城はうすい微笑をした。

「いや、ぼくは散歩だ。靴を出してくれ」(波の塔 下)

〈未来完成性〉

3.4.1.2 述語に焦点があたっていない場合—テンス対立が中和する

一方、確認・記述(新情報の伝達)である場合であっても、述語に焦点があたっていない場合は、非過去形と過去形のテンス対立が緩くなり、過去の出来事に非過去形を使用することができるようになる。例 19 は過去の出来事を表すので、当然過去形に置き換えることができるが、焦点が述語ではなく、「お一人で」にあたっているため、非過去形でもよくなる。⁶逆に、過去の出来事に過去形を使うなら、〈出来事の生起時⁷〉が前面化されているからである。例えば、例 20 は、焦点が述語ではなく、「わたしのほうに」にあたっているにもかかわらず、過去の出来事に過去形が使用されている。

このように、名詞述語文においては、焦点が述語にあたっていない場合、過去の出来事に過去形を使うか、または非過去形を使うかという選択は、話し手の《私》がどこに注目するかによって決まる。つまり、出来事を客観的に伝える場合は、焦点が述語にあたっていなくても、過去形が使われるのに対し、発話時における判断を前面にさしだす場合は、非過去形が使用されうる。

ところが、このような現象は動詞述語には見られないという点においては重要である。例えば、例 21 は、過去の出来事を表す動詞述語文であり、焦点が述語からはずれているが、これを非過去形の「お一人で泊まっていच्छいます」に言い換えることはできない(現

⁶工藤(1998)、佐藤(2009)は、名詞述語文で過去の出来事に非過去形が使用される現象について、〈判断時=発話時の焦点化〉と解釈している。

⁷佐藤(2009)を参照。

在パーフェクトになってしまう)。

19)「あ、ただ、兼岡ミドリは、誰かと一緒に泊まったのかもしれないんです。(中略)」

「いや、この写真の方がもし私の記憶にある方でしたら、お一人でお泊まりです」

「去年の五月の連休に?」

「ええ」新藤がうなずいた。(長崎・壱岐殺人ライン)

20)「その連れのほうも様子が分かっていますが、問題は、従妹のほうなんです。そういう女が泊まっていたかどうか、まず、教えていただきたいのです」

「分かりました」(中略)「しばらくお待ちください。心あたりの番頭か女中にきいてまいります」(中略)しばらくして、番頭と女中とが、おかみの後ろからはいつてきた。

「確かに、そのお客さまは、わたしのほうにお泊まりでございました」(波の塔 下)

21)「(中略)。海東先生がギリシャ風呂で死んでいるってのを発見したのは、やっぱりお客さんだったそうだね」(中略)

「そうなんですよ。この別館の方へ泊まっていた……」(中略)

「くわしい事は知りませんが、あの晩は確かこの桂の間と百合の間にお二人ずつ砂糖の会社の方がお泊まりになり、楓の間に男のお客様がお一人でお泊まっていたしゃいました」
(黒い扇)

同様の現象は、WH 疑問文にも見られる。それは、WH 疑問文では、焦点が述語からはずれるためである。例 22、23 は、焦点が述語以外の「なにを」「どちらに」にあるため、過去の出来事に非過去形が使用されうようになる。なお、Yes-No 疑問文でも、述語に焦点があたっていない場合は、同様な現象が見られる。例 24 は、焦点が述語ではなく、「五月五日の夜は、その旅館で」にあたっているため、過去の出来事であるが、非過去形でも使われるようになる。

22)「で、なにをお求めにおいでですの」

「ちょっとうかがいたいことが……」

「なんでしょう」

「藤川という男のことについて……」そのとたん、女は手を横に振った。(ごたごた気流)

23)「十日は朝から仕事で、その後は娘と出かけました」靖子は答えた。

「どちらにお出かけですか」

「夜、映画を見に行っただです。錦糸町の楽天地というところです」(容疑者 X の献身)

24)「熊本で、お泊りになったのは？」

「いつも、泊ることにしている『かどた』という旅館ですが」

「五月五日の夜は、その旅館で、お過ごしですか？」(祝日に殺人の列車が走る)

3.4.2 確認・記述（新情報の伝達）ではない場合

3.4.2.1 話し手の評価感情が前面化される場合

以上確認してきたように、確認・記述（新情報の伝達）というムードのもとで、かつ述語に焦点があたっている場合には、基本的にテンスの対立が成り立つのである。だが、例 25～28 のように、過去の出来事であるにもかかわらず、非過去形が使用されていることもある。この場合は、非過去形の使用によって、話し手の評価感情（点線で示されている部分）が前面化されているようになる。

25) 「お前さん、ずいぶんと、おもいきったことをおいしいだねえ」（雲ながれゆく）

26) 「おや、ばからしい、眼も見えないくせに生意気をお言いだよ」（悪魔の設計図）

27) 沼田は、自分のポケットへ封筒を押しこんだと思える、業界二位の電機メーカー幹部の自宅へ駆けつけて、金を押し返した。「角の立つことをおやりですな」押し返された封筒を持ちながら、相手は顔をしかめた。（機密文書）

28) 前夜来の雨が、降りやまない。「木村（隆吉）君、わるい日に出陣だな」旗本は、苦笑した。それっきりしばらく口をきかず、昌平橋を渡った。（燃えよ剣 下）

3.4.2.2 発見・想起（再確認）が前面化される場合

一方、発見・想起というムードが前面化されると、現在の出来事であっても、過去形が使用されうる。例 29～34 は、出来事の成立時は発話時の現在であるため、非過去形を使ってもよいのだが、発見や想起という確認の仕方（認識的ムード）を前面にさしだされているがゆえに、過去形が使われている。このような現象は、動詞述語の研究ではすでに指摘されていることではあるが、運動名詞述語文では過去形の約 2 割を占めていることが注目されるべきであろう。そして、「のだ」をとみなわなくても発見を表せる点においては、運動名詞述語の特徴であるといえよう（例 30）。

〈発見〉

29) 瑠璃 「（一方を見て）エリカさん!？」 飛鳥と由紀子、見ると、エリカがいた。

瑠璃 「（笑顔で）今晚は！こちらにお泊まりだったんですか」

エリカ 「（驚いていて）ええ。明日、木島さんの番組に出演するので……」（スチュワードス刑事 2）

30) 「——奥様、お食事の——あら、お嬢様、お帰りでしたか」（過去から来た女）

31) 「まだお仕事ですか？」とすぐに帰ったものと思っていたので、修平は少し驚いて言った。

「いいや。そういうふりをしていただけ。君も遅いね。みんな帰ったよ。残業だったのか？」

「また、子供の時間は過ぎたよ、ですか？」真理子が笑った。（女ざかり）

〈想起〉

32) 「あなたはこのご近所にお住まいでしたね」

「おぼえていらっしゃいましたか。あの汚いアパートにいまでも住んでいます（中略）」

（棟居刑事の断罪）

33) 「出版社にお勤めでしたね？」

「ええ。小さな出版社ですけど」（北緯四三度からの死の予告）

34) 「明日、出発だったな。取りあえず乾杯しよう」と提案してソファーにどさりと坐った。

（炎熱商人 下）

3.5 アスペクト的な意味について—継続性と完成性

運動名詞述語文は標準語の動詞述語文のように、継続性と完成性を区別する形態論的な手段を持たないため、どのように継続性と完成性を表し分けるかが問題となる。そして、これが問題になるのは、主に、表3に示している主体動作Ⅰ類と主体変化Ⅰ類である。とはいえ、これらのグループにおいても、継続性が基本であって、完成性は限られた条件のなかで実現するのである。以下では、情報構造、ムード、テンス、語彙的な意味との相関から、3.5.1では継続性、3.5.2では完成性の実現条件について見ていく。

3.5.1 継続性について

3.5.1.1 非過去形—〈現在＝継続性〉

確認・記述（新情報の伝達）のムードのもとで、運動名詞述語文の非過去形の多く（約7割弱）はテンス的に現在を表すのだが、この場合、完成性ではありえず、継続性と決まってくる（動詞述語文の場合と同様）。そして、主体動作を表すもの（表3の主体動作Ⅰ、Ⅱ類）は動作継続を表し、主体変化を表すもの（表3の主体変化Ⅰ、Ⅱ類）は結果継続を表す。このように、動作継続と結果継続の形態論的な区別はなく、語彙的な意味（主体動作・主体変化）によって区別される点においては、標準語の動詞述語文と変わりはない。

〈動作継続〉

35) 「只今、お風呂をお召しでございます」（江戸の子守唄）

36) 「ほう、ちょっとおいで。舩洲先生がお呼びだよ」（孤宿の人）

37) 「旦那さま、お夕食のご用意が出来まして、お嬢さまがお待ちでございます」（華麗なる一族 中）

38) 「なにをしてるんだ？」もう一度、大声で尋ねた。

「散歩です」明快な答が返って来た。（箱の中）

〈結果継続〉

- 39)「さあ、どうぞ、先生は今ちょっと宮内省までお出かけですがね、もうじきお戻りになります」(花埋み)
- 40)「あなたは今、麻のジャケットをお召しですね。(中略)」(シャイロックの密室)
- 41)「あいにくですが、御主人様はまだお休みです。(中略)」(メイド刑事)
- 42)「先生は？」西田は女性秘書にきいた。
「外出です。今日はお戻りになりません」愛想のない声で彼女は答えた。(迷走地図 上)

3.5.1.2 過去形―〈過去＝継続性〉

一方、確認・記述(新情報の伝達)というムードのもとで、過去形においても、継続性が基本であり、完成性を表すことは少ない。過去完成性を表しているように見えるのは、述語に焦点があたっていないか、ムードが変容している場合である(3.5.2.2を参照)。また、動作継続と結果継続のいずれになるかは、非過去形の場合と同様、語彙的な意味(主体動作・主体変化)による。

〈動作継続〉

- 43)女は、やはり何かを質問している。店員に向かって、何枚かの写真を、提示したりもしている。「間違いないな、あれは人捜しだ」谷田は先方に目を向けたままつぶやくと、女が立ち去るのを待って、その食堂へ寄った。
「はい、男の人をお捜しでした」食堂の女店員は、谷田の質問にこたえて、言った。(寝台急行銀河の殺意)
- 44)「旦那さまが、ずいぶんおそくまでお待ちだったんですよ」
「え？そりやまずいな。何の用だろ？」(風の果て 上)
- 45)「昨日の晩もお電話したんですけど、いらっしゃいませでしたね」
「残業だったのよ」(無印おまじない物語)

〈結果継続〉

- 46)「ふだんは練馬の、東都開発という会社に出ております。でもなにしろ、お忙しい方ですからね。わたしも他の用事でさっき電話をしたら、やっぱりお出かけでしたわ」(彼女はたぶん魔法を使う)
- 47)蒲団を片づけ終ったところへ、おかみさんが、朝食を運んできた。
「さっき、お持ちしたんですけど、よくお休みだったようなので」(夜が待っている)
- 48)「もう失礼なこと言うなよ」(中略)
「おれあの時、出張だったんだよな」じろりと、うわ眼で村田を見た。
「親の死に目に会えなかった」(恐怖)

3.5.2 完成性について

3.5.2.1 非過去形—〈未来＝完成性〉

まず、語彙的な意味から見ると、もっぱら完成性を表すものがある。表3に示している、主体変化Ⅲ類、社会的地位・身分の変化を表すものはそれである。ただし、過去形は過去＝完成性は表さず、非過去形で未来＝完成性を表す⁸。なお、非過去形は未来＝完成性を表す場合、相変わらず状況語が必須である。

49) 「おいつつくらいなんですか？」

「あと三年でご退官ですよ。ですから、六十歳かな」(θは遊んでくれたよ)

50) 「もうすぐご卒業ですね、あちらでは寮にでも入っているのですか？」(虚無の道標)

51) 「いや突然お邪魔した上に、どうも無様なことをお尋ねして申し訳ありませんでした。いよいよ明後日はご結婚ですな、何かとお忙しいでしょう」(高層の死角)

52) 「あと二年で俺も停年だ」(宮本輝全集)

53) 「美紀子、おまえもいよいよ来年の春で卒業だな。(中略)」(日本アルプス殺人事件)

また、継続性と完成性の両方を表せる主体動作Ⅰ類、主体変化Ⅰ類も、非過去形が完成性の意味を表せるのは、基本的に未来の出来事の場合に限られる。そして、その際にしても、未来を表す状況語が必須となる。Yes-No 疑問文でも同様である(例55)。ただし、直後の動作である場合は、状況語がなくてもよい。

54) 「——明日、お発ちですね。もうお帰りになるのですか」(禁じられた過去)

55) 彼女はすっかり外出の支度でいた。

「お早うございます。これからハイパークなどご散歩ですか？」門田は愛想よく挨拶した。(黒の回廊)

56) 「ありがとう。だが、明日は出勤です。再度の訪問はこの次にします」(赤い氷河期)

3.5.2.2 過去形—〈過去＝完成性〉

一方、確認・記述(新情報の伝達)というムードのもとで、かつ述語に焦点があたっている場合には、過去形は完成性を表しにくく、その多くは過去＝継続性を表す(3.5.1.2を参照)。「今朝、先生は新聞をお読みだった」というのは、「今朝、先生は新聞を読んでいらった」という意味であり、決して「お読みになった」という意味には解釈できない。「今朝お邪魔したとき、先生は新聞をお読みだった」では、同時性のタクシスとなることから、「お読みだった」のアスペクト的な意味が完成性ではなく、継続性であることがわかる。過去形が過去＝完成性を表せるのは、情報構造やムードと深くかかわっており、以下の述語に

⁸ 丹羽(2008)では、「山田さんはご結婚です」のような未来完成性しか表さないものと注に指摘されているが、本研究の調査では、主体変化Ⅲ類がむしろそれにあたる。

焦点があたっていない場合とムードが変容している場合に限られる。

3.5.2.2.1 述語に焦点があたっていない場合

まず、例 57～59 のように、述語以外の部分（「つい三十分ほど前に」「どちらへ」「何時に」）に焦点があたっている場合には、過去形は過去完成性を表せるようになる。また、このような事例は、例 58 と例 59 のような WH 疑問文に多く見られる。

- 57) 「おはよう、長谷川さん」と直美は生ジュースのコップを取り上げた。「お帰りなさいませ」と君代は盆を置きながら言った。「私、おはよう、って言ったのよ」
「つい三十分ほど前にお帰りでしたね」君代は至って真面目な顔で、
「木に登るのは危のうございます。お帰りの時は、ちゃんと玄関からどうぞ」（一日だけの殺し屋）
- 58) 「敵様はどちらへお出かけだったんですか、足袋もお召物もそりゃひどい汚れで、とてもお着せ申すわけには行きませんよ」（幽霊殺し）
- 59) これでは、とても強固なアリバイとは言えない。「朝は何時にお目覚めでした？」（朱色の研究）

3.5.2.2.2 ムードが変容している場合

例 60～62 のムードは、確認・記述（新情報の伝達）ではなく、〈話し手の予想外の新事実の発見〉といったものに変容している。このような場合にも、過去形は過去＝完成性を表せるようになる。また、例 63 のように、〈想起（事実の再確認）〉というムードや、例 64 のように、〈体験的確認〉というムードを前面化させている場合も、過去形が過去＝完成性が表しうる。

- 60) 「どこかお出かけだったんですか？」
津本という刑事が、リビングの床にふたを広げた格好で置かれているスーツケースをちらりと見て言った。
「あっ、すみません、散らかしてまして。今日、ニューヨークから帰ったばかりで」千鶴は、あわててふたを閉め、脇へ移動させた。（女友達）
- 61) 「麻生の義父上様のお具合はかなりよくなったぞ。七重の話だと今日は鰻を召し上ったと申す」
「麻生家へお見舞にお出かけだったのですか」（長助の女房）
- 62) 「あら」と、声がして、谷川は顔を上げた。「やあ、外出だったのか」
「ええ。先方で時間食っちゃって……」（さよならをもう一度）
- 63) 「村田さん、このところ、みえなかったじゃない。ああ、そうか、出張だったわね」
「ンだ、ンだ」（水底の祭り）

64)「あんた、知らない？うちのひとが、どこに行ったか」(中略)女中は、ぼんやりした顔をしていた。

「なんですか、先ほど散歩に出かけるとおっしゃって、玄関からお出かけでございましたが」(波の塔 下)

以上のように、運動名詞述語文におけるアスペクト的な意味の実現は、語彙的な意味だけではなく、テンス、ムード、情報構造ともいっそう強く関係しているといえよう。

3.6 パーフェクト性について

動詞と同じく、運動名詞述語文においても、パーフェクト性を表すことができる。非過去形は現在＝パーフェクト性を、過去形は過去＝パーフェクト性を表す。ただし、動詞述語文のように、過去形が現在＝パーフェクト性を表すことはない。用例調査では、現在＝パーフェクト性を表すものは、非過去形の約1割弱を占めている。

動詞述語文においては、パーフェクト性は派生的意味であり(工藤 1995)、語彙的な意味(主体動作・主体変化)の制限がないが、運動名詞述語文では、むしろパーフェクト性が基本的な意味になっているものもあり、語彙的な意味との関係は無視できない。以下では、3.6.1の非過去形と3.6.2の過去形に分ける。

3.6.1 非過去形―〈現在＝パーフェクト性〉

まず、主体動作Ⅲ類の「お聞きだ」などの非過去形は、もっぱら現在＝パーフェクト性を表し、現在＝継続性を表す例は皆無である。このことと関連して、「お聞きだ」の語彙的な意味は、「聴覚でとらえる」という意味から「知る」という意味に変容している。

65)「事件のことはお聞きでしょう」紅茶を一口飲んで、待田が言った。

「まだ、捕まらないそうですね」(黒い森の記憶)

66)「無理を言って済みませんな。事情は滝さんからお聞きでしょう?」(球形の荒野 上)

また、主体変化Ⅰ類(移動・発着を表すもの)のうち、到着を表すもの(お見えだ、お越しだ、おいでだ、お着きだ、ご到着だ、到着だ)では、非過去形のうち、現在＝パーフェクト性を表している例が約半数を占めている。話し手が発話時直前に確認した出来事を聞き手に伝え、続けて、それに対応して行動するように指示(点線部)する例が多い。

67)「部長、お嬢様がおいでですが」

「そ、そうか。――じゃ、下で待てと言ってくれ」(幽霊園遊会)

68)「津川運輸大臣が今お着きです」

「そうか。よし、休憩中の連中を集めてくれ。ニュースカメラマンも入ってくるだろうか

らな」(ひまつぶしの殺人)

69)「閣僚が到着だ」と、剣持が言った。

「さあ、下へ行こうか」(プロメテウスの乙女)

最後、ほかの類については、数は多くないが、動詞述語文と同様、「もう、とくに、すでに、もはや」などの状況語によって、現在＝パーフェクト性の実現する。例 73 のように、過去の状況語が共起した例もある。

70)「僕は、すでに、お調べでしょうが、赤軍派だった早坂一夫の弟です。(中略)」(京都の祭に人が死ぬ)

71)「旦那さまは、とっくにお帰りますよ」女中(中略)は(中略)声をひくめ、「どうなされたんです」(協奏曲)

72)「——朋美、何してんの?」と、同じクラスの子が声をかけて来る。

「石原君を待ってるの」

「へえ。——そうか、もう卒業だもんね」(素直な狂気)

73)「社長から、ご連絡はないんですか」と、言った。

「え?だって明日までニューヨークでしょう」

「いや、今日の午後、お帰りますよ。社に顔を出しておられたし」(紙細工の花嫁)

3.6.2 過去形—〈過去＝パーフェクト性〉

過去形も過去＝パーフェクト性を表すことができる。そして、過去を表す状況語、または過去を示す従属節と「もう、とくに、すでに」などの状況語によって、過去＝パーフェクト性の実現すると考えられる。本研究の調査では、実例はほとんど見つからなかったので、作例も一緒に示すことにする。

74)私が大野様の御屋敷に奉公に上がりましたのは算えの十四。次郎右衛門様と吉村さんは同じ天保五年の午でござんしたから、二十三だったてえことになりやす。お二方ともすでに奥方をお迎えになっておりやして、惣領の坊ちゃんもお生まれでした。——そうです。千秋さんと嘉一郎さん。(壬生義士伝 下)

75)「私がそのことを伝えようとしたとき、彼はすでにお聞きでした。」(作例)

76)「私が来たときには、お客様はもうお着きでした」(作例)

3.7 反復性について

一方、反復性は、完全に語彙的な意味の制限から解放され、「よく、いつも、たびたび、毎晩、週一回」などのような頻度を表す状況語のささえによって実現する。非過去形は現在／未来＝反復性を、過去形は過去＝反復性を表す。また、非過去形は未来＝反復性を表す場

合は、さらに未来を表す状況語が必須である。

3.7.1 非過去形―〈現在＝反復性〉

77)「大奥のお女中の浦風さまが一年に二回はお詣りになります。そのほかは代参のお女中がよくお見えでございます」(鬼火の町)

78)「九州にはたびたびご旅行ですか?」と、次の探りを入れた。(影の地帯)

79)「珍しかとこでお遇いましたな。たびたびこっち方面にはお出かけですか」
(迷走地図 上)

80)「まだまだ驚くのは早いですよ。何せ、朝の五時には出勤ですよ。冬はちょっと遅いですけどね」

「え!?五時に? 竜太さん、一度もそんなこと言わなかったわね」(銃口)

3.7.2 非過去形―〈未来＝反復性〉

81)「ね、ね、あの京都大学の有名な先生はね、4月から週一回非常勤講師としてお見えだそうです」(作例)

3.7.3 過去形―〈過去＝反復性〉

82)「月に一度ほどおみえでした。わたくしもなん度か食事をご一緒させていただきました」(風の日にララバイ)

83)「以前からうちへはよくお見えでしたけど、近頃はかなり頻繁においででした。(中略)」
(不可触領域)

84)「お義父さんって、いつも週末しか帰って来ないの?」(中略)

「いつもってことはないよ。きっと出張なんだろう。最近は偉くなって減ったみたいだけど、僕が子供の時は月の半分以上は出張だったから」笑いながら彼は言った。(紙婚式)

3.8 おわりに

本節では、運動名詞述語文(普通形と敬語形を含む)における、ムード的・テンス的・アスペクト的な意味体系について、情報構造との相関性を視野に入れて考察を行った。そして、形態論的なアスペクトが欠けているなか、そのアスペクト的な意味の実現条件について検討した。その結果、確認・記述(新情報の伝達)というムードのもとで、述語に焦点があたっている場合、つまり、テンス対立が成立する場合、テンス的・アスペクト的な意味体系は次の表4になる。なお、そのアスペクト的な意味の実現条件については丸括弧で示す。

表4 運動名詞述語文のテンス的・アスペクト的な意味体系
(確認・記述(新情報の伝達)かつ述語に焦点があたっている場合)

アスペクト的な意味 テンス		継続性	完成性	パーフェクト性	反復性
非過去 ～だ	現在	◎	×	○ (語彙的な意味によるか状況語による)	○ (状況語)
	未来	○ (状況語)	○ (語彙的な意味によるか状況語による)	○ (状況語)	○ (状況語)
過去 ～だった	過去	◎	× ⁹	○ (状況語)	○ (状況語)

◎：基本的な意味

○：条件が必須

×：表せない

本節をまとめると、次のようになる。

まず、テンスについては、ムードだけではなく、情報構造とも強く相関している。

- 1) ムードが確認・記述(新情報の伝達)である場合、しかも述語に焦点があたっている場合は、非過去形(「～だ」)と過去形(「～だった」)は、基本的に非過去(現在／未来)と過去のテンス対立が成立する。そして、非過去形は過去形より極端に多いが、非過去形においても、現在を表すものが圧倒的に多く、未来は有標的であり、未来を表す状況語が必須である。
- 2) ムードが確認・記述(新情報の伝達)である場合においても、述語に焦点があたっていない場合は、〈判断時＝発話時〉が前面化されると、過去の出来事にも非過去形が使用されうるようになる。この点は、動詞述語文にありえない、名詞述語文の特徴である。
- 3) ムードが話し手の評価感情や発見・想起などが前面にさしだされると、過去の出来事に非過去形が使われたり、その逆のことが起こったりする。この点においては、動詞述語文と変わらないが、動詞述語文より起こりやすい傾向が見られる。

また、アスペクト的な意味については、語彙的な意味だけではなく、ムードやテンス、情報構造とも次のように強く相関している。

⁹表4が示しているように、確認・記述(新情報の伝達)かつ述語に焦点があたっている場合、〈過去＝完成性〉が実現できないことを注意されたい。

- 1) ムードが確認・記述（新情報の伝達）である場合かつ述語に焦点があたっている場合は、非過去形でも過去形でも、基本的には継続性を表す（現在＝継続性／過去＝継続性）。非過去形が完成性を表すのは、未来テンスに限られる。しかも、未来を表す状況語が必須である。それに対し、過去形が過去＝完成性を表すことができない。
- 2) ムードが確認・記述（新情報の伝達）であっても、述語から焦点がはずれる場合や、ムードが確認・記述から発見や想起といったものに変容する場合になってはじめて、過去形が過去＝完成性を表せるようになる。
- 3) そして、アスペクト的な意味があらかじめ語彙的な意味によって決まるグループがある。主体動作Ⅲ類はパーフェクト性のみ、主体変化Ⅲ類は完成性のみを表す。さらに、主体動作Ⅱ類と主体変化Ⅱ類は継続性に偏る傾向が見られる。
- 4) パーフェクト性や反復性といった、いわゆる派生的な意味を表すこともできる。だが、パーフェクト性については、語彙的な意味との関係から完全に解放されていない。そして、過去形は現在パーフェクト性を表すことができない。反復性については、完全に語彙的な意味から解放され、もっぱら状況語によって、実現される。

以上のように、運動名詞述語文が表すムード的・テンス的・アスペクト的な意味の範囲は動詞述語文と比べてほとんど変わらないものの、アスペクト的な意味が基本的に継続性を表し、完成性を表すのに条件が必要であるなどの制約が多い。にもかかわらず、コミュニケーションには支障がないのである。それは、継続相と完成相の対立を持たない運動名詞述語文が表すアスペクト的な意味は、語彙的な意味との相関性やムード的・テンス的・アスペクト的な意味相互の相関性、情報構造との相関性がより強いためであるといえよう。

4. 本章の結論

本章では、運動名詞述語文のモーダルな意味とムード的・テンス的・アスペクト的な意味体系について記述してきた。まとめると次のようになる。

まず、運動名詞述語文のモーダルな意味は、認識的な文においては、動詞述語文とはあまり違いが見られないが、意志表示的な文においては、形態論的なムードが分化していないがゆえに、もっぱら人称性という構文論的手段に依存し、しかも、権威者である話し手が集団やグループの行動を決するような場面での命令・勧誘・決意にしか使用されず、依頼や希求などは表せない特徴が見られる。

また、認識的な文における運動名詞述語文が表すムード的・テンス的・アスペクト的な意味の範囲は、動詞述語文とはさほど変わらない。だが、名詞述語文の MTA 体系は、語彙的な意味との相関性、MTA 相互の相関性、また情報構造との相関性が動詞述語文より強い体系をなしていることが明らかになった。

以上、本章では、対象的な内容が《運動》を表す名詞述語文の文法的な意味について、二段階に分けて、その体系をより厳密に記述することを試みた。

第三章

形容詞の規定語をとる名詞述語文について

1. 本章の目的

本章は、「彼はやさしい人だ」のような形容詞の規定語をとる名詞述語文について、主語が人である場合、人を特徴づける重要な表現手段として、大規模な調査を通してその使用実態を明らかにしたうえで、このタイプの文がテキストにおける機能について考察することを目的とする。

2. 形容詞の規定語をとる名詞述語文の使用実態について —主語が人である場合—

2.1 はじめに

文は、述語にすえられる単語の品詞によって、形容詞述語文、名詞述語文、動詞述語文に分けられる。そのうち、名詞述語文は、主に主語にすえられる人や物の《質》や《特性》を特徴づけるものである。そして、名詞述語文には、「彼は先生だ」のような主語と述語の二単語からなるもののほかに、さらに形容詞が加わった、三単語からなるものがある。

- (1) 彼はやさしい性格だ。
- (2) 彼はやさしい先生だ。

(1)は、形容詞と名詞があわせ述語になっていて、形容詞「やさしい」は文の成分ではなく、述語を構成する要素である。(1)のような、「顔」「性格」といった部分や側面を表す名詞を述語にもつ文は、かざり成分を義務的に要求し、あわせ述語全体ではじめて、主語にさしだされたものや人を特徴づけることができるようになる(《特性》を表す)。一方、(2)は、形容詞「やさしい」が文の成分(規定語)であり、述語である「先生だ」を修飾している。

従来の名詞述語文の研究では、(1)のようなものは注目されているが¹、名詞が形容詞にかざられるのはごくありふれたことであり、(2)のようなものを名詞述語文の一つのタイプと

¹ 新屋(1989)、角田(1996)、丹羽(2018)などを参照。

してとりたてて記述することはあまりないように思われる。しかし、(1)と(2)は、「彼」を特徴づける文であることに変わりはなく、その特徴づけの手段が異なっている。人の特徴づけの手段として、まず、主語と述語の二単語からなる形容詞述語文、名詞述語文、動詞述語文があり、それ以外に(1)や(2)のようなものがあるとすれば、(1)だけでなく、(2)のようなものも、人を特徴づける一つの手段として、その意味的・機能的な特徴を考察する必要があるといえる。

そのような問題意識をもつものとしては、光信 (2014) がある。光信は、(1)や(2)のような文における、主語と述語の意味的な関係 (高橋 (1984) にもとづく) について、「仲町貞子は進歩的な女性だった」のように述語名詞が主語の上位概念を表す場合には「種類づけ」になり、「ぼくたちは、いい気分だった」のように述語名詞が主語の上位概念を表さない場合には「性質・状態づけ」になると指摘している。前者の場合は、形容詞によって (私は淋しい人間です)、あるいは形容詞と名詞のそれぞれによって (編集長の淀川さんはとっても素敵なレディだ)、あるいは形容詞と名詞が一体となって (日本は有名な結核国なんです)、主語の性質が表される。後者の場合は、形容詞によって (彼女は、優しい性格だった)、あるいは形容詞が名詞と一体なって (街で見かける人はみんな黒い髪だわ)、主語の性質・状態が表される (例文は簡略化した)。

本節では、特に、(2)のような文を対象として、そもそも日本語においてこのタイプの文がどのような形容詞と名詞のくみあわせによって成立しているかという実態に関する大規模な調査を行った結果を報告する。

2.2 調査の方法

調査に使用する用例は、BCCWJ の長単位検索で、表 1 の検索条件によって検索して収集した²。

表 1 BCCWJ 検索条件

検索対象	前方共起条件	キー	後方共起条件
出版・新聞、出版・雑誌、出版・書籍、図書館・書籍、白書、ベストセラー、法律、国会会議録、広報誌、教科書；全てのジャンル；全期間；コア・非コア	キーから 1 語、品詞の大分類が「形容詞」	品詞の小分類が「名詞—普通名詞—一般」	語彙素が「だ」
	キーから 2 語、品詞の大分類が「形状詞」		語彙素が「である」
			語彙素が「です」
	キーから 1 語、品詞の大分類が「連体詞」		品詞の中分類が「助詞—終助詞」

そして、その中から、次のすべての条件を満たすもの (約 4000 例) を調査対象とした。

² 前方共起条件を表 1 のように設定するのは、第一形容詞 (やさしい)、第二形容詞 (優秀な)、第三形容詞 (抜群の) のすべてを収集するためである (「背の高い」「気が短い」のような例を含む)。ただし、第三形容詞は『分類語彙表 増補改訂版』の〈相の類〉に掲載されているものに限っている。

- ①主語が人である。
- ②述語名詞が文末名詞（「性格」「感じ」など）でない。
- ③「～だ、～だった、～である、～であった、～です、～でした」などのコピュラをとる。
- ④述語名詞がただ一つの形容詞によって修飾されている。
- ⑤単文あるいは複文の主文に現れている。

名詞によっては、形容詞とくみあわせる用例が BCCWJ からは十分に得られない場合があることから、「CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊」や小説類から収集した用例を加えた。名詞の範囲や用例の選定条件は、BCCWJ の場合と同一である。こうして得られた約 7000 例を対象として、このくみあわせに現れる形容詞と名詞の『分類語彙表 増補改訂版』の〈相の類〉〈体の類〉における分類項目を調査した³。

2.3 調査結果の概要

まず、調査結果の概要を示す。表 2、表 3 は、名詞と形容詞の出現頻度上位 40 語の語彙リストであり、表 4、表 5 は、部門と中項目レベルでの名詞と形容詞の分布である。

表 2 名詞語彙リスト（上位 40 語）

人 1196、男 927、奴 552、女 450、子 391、人間 228、方 199、女性 165、娘 128、人物 120、友達 78、子供 71、友人 61、青年 50、野郎 47、先生 47、女の子 45、少年 44、刑事 40、人たち 38、母親 35、連中 34、父親 33、美人 31、若者 27、画家 25、者 24、少女 24、相手 24、生徒 23、教師 21、お嬢さん 19、男性 19、選手 19、妻 17、老人 17、紳士 17、職人 15、学生 15、お母さん 15

表 3 形容詞語彙リスト（上位 40 語）

いい 713、若い 202、立派な 141、やさしい 121、かわいい 103、美しい 92、きれいな 92、ひどい 83、すばらしい 82、優秀な 80、悪い 76、おもしろい 69、大切な 65、ばかな 63、変な 63、偉い 61、有名な 59、不思議な 56、すごい 54、嫌な 53、恐ろしい 53、大事な 51、すてきな 49、普通の 48、古い 46、真面目な 43、妙な 40、とんでもない 39、おかしい 39、しょうがない 39、親切な 39、かなりの 38、かわいそうな 37、大変な 37、賢い 36、だめな 34、幸せな 32、背の高い 32、有能な 32

名詞については、「人」をはじめとする上位 5 語が全体の約半分を占め、強い集中が見られる。それに対して、形容詞については、「いい」を除けば、集中はさほど強くない。「いい」が特に多いのは、「いい人」「いい子」が多用されていることによる（表 8 を参照）。

³ 『分類語彙表 増補改訂版』に見当たらなかったものについては、『類語辞典』（東京堂出版）や国語辞書類の記述を参考にして分類した。ただし、分類が困難であった約 200 語は割愛した。また、複数の分類項目に属する語彙について、実例の用法にもとづいて判断した。

表 4 名詞の部門・中項目

名詞部門	名詞中項目	例	頻度	比率
人間活動の 主体	人間	人、人間、奴、方、人物、男、女、女性、男性、青年、若者	4943	71.87%
	成員	先生、刑事、生徒、画家、学生、弁護士、職人、ファン、社長	763	11.09%
	家族	母親、父親、妻、亭主、息子、弟、娘さん	496	7.21%
	人物	紳士、人材、金持ち、政治家、詐欺師、人気者、悪党	408	5.93%
	仲間	友達、友人、仲間、相棒、親友、敵、恋人、顧客	266	3.87%
	公私	名族、名門	2	0.03%

表 5 形容詞の部門・中項目

形容詞部門	形容詞中項目	例	頻度	比率
抽象的關係 (2620・ 38.1%)	様相	いい、立派な、美しい、すばらしい、普通の、危険な	1837	26.71%
	量	かなりな・の、大変な、相当な、完璧な、最高の	317	4.61%
	力	すごい、有力な、パワフルな、手強い、屈強な・の	119	1.73%
	作用	優秀な、抜群の、卓抜の、無類の	96	1.40%
	時間	古い、幼い、長い	91	1.32%
	真偽	まともな、代表的な、まっとうな、模範的な	80	1.16%
	存在	しょうがない、影が薄い、仕方がない	63	0.92%
	類	相性のよい、負けず劣らずの	8	0.12%
	空間	世界的な、国際的な	5	0.07%
	形	いかつい、ごつい	4	0.06%
精神及び行為 (3819・ 55.5%)	行為	やさしい、ばかな、真面目な、有能な、強情な	1604	23.32%
	心	かわいい、おもしろい、図々しい、頼もしい、執念深い	1434	20.85%
	待遇	親切的な、ひどい、厳しい、冷たい、甘い、人懐っこい	244	3.55%
	生活	幸せな、忙しい、運のよい、エレガントな、地味な	236	3.43%
	言語	有名な、無口な、評判のよい、寡黙な、うるさい	181	2.63%
	交わり	親しい、仲がよい、面倒見がよい、社交的な	68	0.99%
	経済	貴重な、重要な、貧しい、裕福な、貧乏な、貧乏臭い	52	0.76%
自然現象 (439・6.4%)	生命	若い、元気な、健康な、たくましい、か弱い、タフな	285	4.14%
	身体	背の高い、小柄な、大柄な、華奢な、色白な・の	129	1.88%
	自然	騒々しい、暗い、柔らかい、静かな、酒臭い	24	0.35%
	生物	無害な	1	0.01%

名詞（表 4）については、中項目レベルでは、【人間活動の主体/人間】（以下、【人間活動の主体】を【主体】と略称する）が約 7 割を占め、強い集中が見られる。その多くは、「人」をはじめとする一般性・抽象性の高いものである。そして、それらの名詞は、情報構造上、新情報にならないものが多い。

一方、形容詞（表 5）については、部門から見ると、【精神及び行為】が最も多く使われているのに対し、【自然現象】が最も少ない。中項目では、【抽象的關係/様相】【精神及び行為/行為】【精神及び行為/心】への集中度が高い。ただし、固定化した「いい人」「いい子」を除けば、【精神及び行為/行為】がトップになる。さらに、分類項目から確認すると、【精神及び行為/行為】のうち、【精神及び行為/行為/人柄】（「やさしい」など）が、最も多く使用されている。

以上、名詞と形容詞のそれぞれについて見てきたが、以下では、形容詞と名詞のセットについて、中項目レベル（表 6）、分類項目レベル（表 7）、語彙レベル（表 8）の調査結果について説明する。

表 6 形容詞と名詞の中項目レベルの相関（上位 30 組）

順位	形容詞中項目	名詞中項目	例	頻度	比率
1	抽象的關係/様相	主体/人間	いい人	1406	20.44%
2	精神及び行為/行為	主体/人間	やさしい人	1258	18.29%
3	精神及び行為/心	主体/人間	かわいい子	1063	15.46%
4	精神及び行為/生活	主体/人間	忙しい人	199	2.89%
5	自然現象/生命	主体/人間	若い男	194	2.82%
6	精神及び行為/待遇	主体/人間	親切な男	191	2.77%
7	抽象的關係/様相	主体/家族	いい父親	160	2.29%
8	抽象的關係/量	主体/人間	大した女	159	2.31%
9	抽象的關係/様相	主体/成員	いい先生	145	2.11%
10	精神及び行為/行為	主体/成員	有能な助手	145	2.11%
11	精神及び行為/心	主体/成員	熱心な信者	140	2.04%
12	自然現象/身体	主体/人間	小柄な男	114	1.66%
13	精神及び行為/行為	主体/家族	やさしい父親	111	1.61%
14	精神及び行為/心	主体/家族	大事な弟	106	1.54%
15	精神及び行為/言語	主体/人間	無口な男	103	1.50%
16	抽象的關係/量	主体/人物	大変な悪党	92	1.33%
17	精神及び行為/行為	主体/人物	有能な人材	83	1.21%
18	精神及び行為/心	主体/仲間	大切な友達	74	1.07%
19	抽象的關係/力	主体/人間	弱い女	71	1.03%
20	抽象的關係/様相	主体/人物	立派な紳士	67	0.97%
21	抽象的關係/作用	主体/成員	優秀な部下	66	0.96%
22	抽象的關係/様相	主体/仲間	いい友達	59	0.86%
23	精神及び行為/言語	主体/成員	有名な画家	58	0.84%
24	自然現象/生命	主体/成員	若い刑事	55	0.80%
25	抽象的關係/存在	主体/人間	仕方がない男	51	0.74%
26	精神及び行為/心	主体/人物	惜しい人材	51	0.74%
27	抽象的關係/時間	主体/仲間	古い友人	44	0.64%
28	抽象的關係/量	主体/成員	最高の先生	41	0.60%
29	精神及び行為/交わり	主体/仲間	親しい友人	39	0.57%
30	精神及び行為/待遇	主体/家族	ひどい父親	30	0.44%

表 7 形容詞と名詞の分類項目レベルの相関（上位 30 組）

順位	形容詞分類項目	名詞分類項目	例	頻度	比率
1	精神及び行為/行為/人柄	主体/人間/人間	やさしい人	345	5.02%
2	抽象的關係/様相/良不良・適不適	主体/人間/人間	いい人	337	4.90%
3	精神及び行為/行為/人柄	主体/人間/男女	やさしい男	236	3.43%
4	抽象的關係/様相/良不良・適不適	主体/人間/男女	いい女	189	2.75%
5	抽象的關係/様相/良不良・適不適	主体/人間/老少	いい子	161	2.34%
6	抽象的關係/様相/特徴	主体/人間/人間	普通の人間	160	2.33%
7	精神及び行為/行為/才能	主体/人間/人間	賢い人	147	2.14%

8	精神及び行為/心/好悪・愛憎	主体/人間/人間	かわいい人	134	1.95%
9	抽象的關係/様相/趣・調子	主体/人間/人間	立派な人間	128	1.86%
10	精神及び行為/待遇/待遇・礼など	主体/人間/人間	親切な人	121	1.76%
11	精神及び行為/行為/才能	主体/人間/男女	ばかな女	102	1.48%
12	自然現象/生命/生	主体/人間/男女	若い女性	101	1.47%
13	精神及び行為/行為/威厳・行儀・品行	主体/人間/人間	狡い人	98	1.42%
14	精神及び行為/心/好悪・愛憎	主体/人間/老少	かわいい娘	93	1.35%
15	精神及び行為/心/好悪・愛憎	主体/人間/男女	かわいい女	89	1.30%
16	精神及び行為/行為/人柄	主体/人間/老少	明るい少年	87	1.26%
17	抽象的關係/様相/美醜	主体/人間/人間	美しい人	79	1.15%
18	抽象的關係/様相/特徴	主体/人間/男女	普通の男	75	1.09%
19	精神及び行為/心/快・喜び	主体/人間/人間	おもしろい人	73	1.06%
20	自然現象/身体/身体	主体/人間/男女	小柄な男	71	1.03%
21	抽象的關係/様相/美醜	主体/人間/男女	美しい女	66	0.96%
22	抽象的關係/量/程度	主体/人物/人物	大変な悪党	66	0.96%
23	精神及び行為/心/恐れ・怒り・悔しさ	主体/人間/人間	恐ろしい人	62	0.90%
24	精神及び行為/生活/人生・禍福	主体/人間/人間	幸せな人	59	0.86%
25	抽象的關係/様相/趣・調子	主体/人間/男女	素敵な女性	59	0.86%
26	精神及び行為/行為/威厳・行儀・品行	主体/人間/男女	ふしだらな女	59	0.86%
27	精神及び行為/行為/才能	主体/人間/老少	利発な娘	59	0.86%
28	精神及び行為/待遇/待遇・礼など	主体/人間/男女	ひどい男	56	0.81%
29	抽象的關係/量/程度	主体/人間/男女	大した女	51	0.74%
30	精神及び行為/生活/人生・禍福	主体/人間/男女	幸せな女	50	0.73%

中項目レベルの相関（表6）では、【様相】と【人間】、【行為】と【人間】、【心】と【人間】のくみあわせが全体の約半分を占めている。そして、「いい」の例を除くと、【行為】と【人間】のくみあわせが最も多く使われている。

さらに、分類項目レベルの相関（表7）については、【行為】と【人間】とのくみあわせでは、【行為/人柄】と【人間/人間】とのくみあわせが最も多い。そして、形容詞側では、特に【抽象的關係/様相/良不良・適不適】【精神及び行為/行為/人柄】への強い集中が見られる。一方、名詞側では、【人間/人間】【人間/男女】【人間/老少】といった、一般性、抽象性が最も高いものに集中している。

最後に、語彙レベル（表8）では、「いい」を規定語とする、「いい人」「いい子」「いい女」「いい男」「いい奴」が上位を占めている。これらの多用が形容詞と名詞のくみあわせの分布にかなり影響している。

表8 形容詞と名詞の語彙レベルのくみあわせ（上位40組）

くみあわせ	頻度	くみあわせ	頻度	くみあわせ	頻度	くみあわせ	頻度
いい人	168	若い女	30	大切な人	18	若い女性	14
いい子	126	偉い人	30	変な奴	18	有名な人	14
いい女	83	ひどい奴	30	古い友人	18	すごい人	14
いい男	68	おもしろい人	26	優秀な刑事	16	親しい友人	14
いい奴	60	嫌な奴	23	親切な人	16	恐ろしい女	13
やさしい人	48	悪い奴	22	普通の人間	16	すばらしい人	13
若い男	45	しょうがない奴	21	いい娘	16	悪い人	13

ばかな奴	39	美しい人	20	きれいな子	15	怖い人	13
きれいな人	36	変な人	19	妙な男	15	立派な男	13
かわいい子	33	すてきな人	19	古い友達	15	ひどい男	13
立派な人	33	いい方	19	ほんの子供	14		

2.4 個別語彙の考察

以上、くみあわせに現れる名詞と形容詞のそれぞれの分布、及び形容詞と名詞のくみあわせの分布について概観した。次は、【主体/人間】【主体/家族】【主体/成員】に所属する、代表的な名詞のいくつかを対象として、形容詞とのくみあわせを詳しく見ていく。

2.4.1 「人」「人間」―【主体/人間/人間】

表 9⁴は、このくみあわせで最も多く使用されている名詞である「人」および「人間」とくみあわせる形容詞を調査した結果を示したものである。この表から、「人」は広範囲の形容詞とくみあわさることがわかる。「人」にあり「人間」にない項目は多数あるが、その逆は2項目にとどまる。

また、頻度からいえば、「人」は、【人柄】(やさしい)、【良不良・適不適】(いい)、【好悪・愛憎】(かわいい)、【待遇・礼など】(親切的な)／【趣・調子】(立派な)、【特徴】(普通の)という順である⁵。一方、「人間」は、【特徴】(普通の)／【人柄】(やさしい)、【良不良・適不適】(いい)、【才能】(有能な)という順である。【人柄】【良不良・適不適】【特徴】を表す形容詞が多数を占める点においては、「人」と「人間」に共通である。しかし、【人柄】【特徴】の項目に現れる語彙のバリエーションについては、特に違いが見られない。ただし、「人間」においては、【特徴】の比率が「人」よりも高い。「人」と【良不良・適不適】の形容詞とのくみあわせにおいて、異なり語数が少ないのに頻度が高いのは、「いい人」が固定化され、多用されているからである。

両方にある項目でも、個々の語彙について見れば、それぞれに特有のものがある。例えば、「古い」は「人」には使われないのに対し、「チャームングな」「かっこいい」「きれいな」などは「人間」には使われない。すなわち、印象的な《特性》を表す形容詞は、「人間」とくみあわさりにくい傾向がある。

「人」や「人間」を形容詞とくみあわせて人を特徴づけるのは、基本的に、その人がどういう人であるかということを説明する場合であろう。つまり、形容詞が表す《特性》は、その人の本質としてさしだされている。その点で、「人」と「人間」に大きな違いは見られない。違いは、【感覚】(印象的な)が「人間」にないこと、【恐れ・怒り・悔しさ】(恐ろしい)、【待遇・礼など】(親切的な)などが「人」に偏る傾向があること、そして、【自然現象】(小柄な)は、特に「人間」に少ないことなどである。

⁴ 以下の表の見出し行の()の中に示した数値は、名詞の頻度と異なり語数である。各形容詞の直後に付した数値は、その形容詞の出現頻度である。ただし、頻度が1の場合は頻度の表示を省略する。

⁵ ／は同順位を意味する。以下も同様。

表9 「人」「人間」とくみあわさる形容詞

部門	形容詞 分類項目	人 (1196・364)	頻度	比率	異 なり 語 数	異 なり 語 数の 比率	人間 (228・ 137)	頻度	比率	異 なり 語 数	異 なり 語 数の 比率
抽象的 関係	真偽/真偽・ 是非	まっとうな、正しい	2	0.2%	2	0.5%	まともな、まっとうな	2	0.9%	2	1.5%
	真偽/本体・ 代理	掛け替えのない3、代表的な	4	0.3%	2	0.5%	掛け替えのない2	2	0.9%	1	0.7%
	存在/必然 性	しょうがない4	4	0.3%	1	0.3%		0	0.0%	0	0.0%
	様相/趣・調 子	立派な33、すてきな19、すばらしい13、都合がよい、とんでもない、成績の悪い	68	5.7%	6	1.6%	立派な3、すばらしい2、すてきな、不都合な	7	3.1%	4	2.9%
	様相/特徴	変な19、珍しい9、おかしい8、特別な・の6、普通の6、妙な4、非凡な・の2、ユニークな2、風変わりな、非の打ちどころのない、疑い深い、独特な、おかしい、得体の知れない、個性的な、申し分がない	64	5.4%	16	4.4%	普通の16、特殊な・の3、平凡な3、特別な・の2、珍しい2、変哲もない、エクセレントリックな、妙な、取り柄のない	30	13.2%	9	6.6%
	様相/良・ 不良・適不適	いい168、悪い13、かっこいい3、だめな	185	15.5%	4	1.1%	いい10、だめな7、善良な2、悪い2、邪魔な2、ましな、不適格な	25	11.9%	7	5.1%
	様相/弛緩・ 粗密・繁簡	細かい	1	0.1%	1	0.3%	ややこしい	1	0.4%	1	0.7%
	様相/美醜	きれいな36、美しい20、繊細な、みっともない、器量のよい、姿のいい	60	5.0%	6	1.6%	清らかな	1	0.4%	1	0.7%
	様相/難易・ 安危	どうしようもない2、危険な、危ない、便利な、円満な	6	0.5%	5	1.4%	どうしようもない3、危険な2	5	2.2%	2	1.5%
	力/力	すごい14、強い5、手強い、弱い	21	1.8%	4	1.1%	弱い8、弱小な	9	3.9%	2	1.5%
	作用/作用・ 変化		0	0.0%	0	0.0%	不安定な	1	0.4%	1	0.7%
	作用/限定・ 優劣	優秀な3、有数の	4	0.3%	2	0.5%	錚々たる、優秀な	2	0.9%	2	1.5%
	時間/新旧・ 遅速	新しい	1	0.1%	1	0.3%	古い5	5	2.2%	1	0.7%
	量/長短・高 低・深淺・厚 薄・遠近	身近な2	2	0.2%	1	0.3%	身近な	1	0.4%	1	0.7%
	量/広狭・大 小	小さな、ばかでかい、大きい、大きな	4	0.3%	4	1.1%	小さな	1	0.4%	1	0.7%
	量/軽重	軽やかな	1	0.1%	1	0.3%		0	0.0%	0	0.0%
	量/程度	大変な2、大した	3	0.3%	2	0.5%	最低な・の3	3	1.3%	1	0.7%
	量/限度	完璧な	1	0.1%	1	0.3%		0	0.0%	0	0.0%
精神 及び 行為	心/心	鈍感な、デリケートな、鋭敏な、敏感な、感受性の強い	5	0.4%	5	1.1%	無関心な、本能的な、コチコチの、敏感な	4	1.8%	4	2.9%
	心/感覚	印象的な2、忘れられない	3	0.3%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	心/感動・興 奮	感心な、感動的な	2	0.2%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	心/快・喜び	おもしろい30、愉快的な4、気持ちがいい3、享乐的な、テンションの高い、爽やかな、興味のない	41	3.4%	7	1.9%	つまらない3、爽やかな、不快な、おもしろい	6	2.6%	4	2.9%
	心/恐れ・怒 り・悔しさ	怖い13、恐ろしい12、薄気味悪い2、惜しい2、不気味な、おっかない、気味が悪い	32	2.7%	7	1.9%	惨めな2	2	0.9%	1	0.7%
	心/安心・焦 燥・満足	頼もしい4、のんきな3、心の丈夫な、能天気な、心が安らかな	10	0.8%	5	1.4%	平気な、冷静な	2	0.9%	2	1.5%
	心/苦悩・悲 哀	寂しい3、鬱陶しい、情けない、厄介な	6	0.5%	4	1.1%	寂しい3、情けない2、悲観的な	6	2.6%	3	2.2%
	心/好悪・愛 憎	気の毒な10、かわいい9、かわいそうな9、感じがよい8、可愛らしい5、魅力的な4、哀れな3、憎らしい2、好きな・の2、懐かしい2、嫌な2、嫌らしい2、嫉妬心のない、義理人情に厚い、可憐な・の、奥ゆかしい、チャミングな、情がない、キュートな、愛しい、無慈悲な、不憫な、憎い、子供好き	70	5.9%	24	6.6%	哀れな2、魅力的な、気の毒な、かわいそうな、好ましい	6	2.6%	5	3.6%

心/敬意・感謝・信頼など	ありがたい	1	0.1%	1	0.3%		0	0.0%	0	0.0%
心/表情・態度	愛想がよい2、無表情な、ぶっきらぼうな、表情豊かな	5	0.4%	4	1.1%	無表情な	1	0.4%	1	0.7%
心/信念・努力・忍耐	芯の強い2、我慢強い2、几帳面な2、熱い2、忍耐強い、勤勉な、ぐうたらな、執念深い	12	1.0%	8	2.2%	忍耐強い、辛抱強い、熱心な	3	1.3%	3	2.2%
心/自信・誇り・恥・反省	図々しい2、プライドが高い	3	0.3%	2	0.5%	恥ずかしい2	2	0.9%	1	0.7%
心/欲望・期待・失望	吝嗇な3、名誉心の強い2、恬淡な、無欲な、けちな	8	0.7%	5	1.4%	独占欲の強い	1	0.4%	1	0.7%
心/意志	勝手な3、自由な2、いい加減な2、不注意な、気まぐれな	9	0.8%	5	1.4%	意識的な3、自由な、いい加減な、思い切りのよい	6	2.6%	4	2.9%
心/判断・推測・評価	意外な	1	0.1%	1	0.3%		0	0.0%	0	0.0%
心/詳細・正確・不思議	不思議な12、用心深い2、疑り深い、疑い深い、未知の、謎の多い、奇態な	19	1.6%	7	1.9%	不思議な2、正体の怪しい、未知の	4	1.8%	3	2.2%
心/意味・問題・趣旨など	大切な18、大事な7、重要な	26	2.2%	3	0.8%	大切な4、重要な、大事な	6	2.6%	3	2.2%
心/説・論・主義	楽観的な、保守的な、精神的な、孤高な	4	0.3%	4	1.1%	現実的な、实际的な	2	0.9%	2	1.5%
言語/言語活動	うるさい3、無口な3、喧しい、口が重い、口数が多い、口数が少ない、話がきれいな	11	0.9%	7	1.9%	寡黙な	1	0.4%	1	0.7%
言語/評判	有名な14、名高い2、評判の悪い、評判の、噂のない	19	1.6%	5	1.4%	評判のよい	1	0.4%	1	0.7%
生活/文化・歴史・風俗	無粋な、センスのよい、粋な、ハイカラな、地味な	5	0.4%	5	1.4%		0	0.0%	0	0.0%
生活/人生・禍福	幸せな9、不幸な6、幸福な4、運のよい3、運の悪い2、運のない、おめでたい、ラッキーな、運の強い、アンラッキーな、悲劇の、物騒な	31	2.6%	12	3.3%	運のよい2、不幸な2、霊的な、おめでたい、幸運な	7	3.1%	5	3.6%
生活/労働・作業・休暇	忙しい12	12	1.0%	1	0.3%	暇な	1	0.4%	1	0.7%
生活/生活・起居	酒好き	1	0.1%	1	0.3%		0	0.0%	0	0.0%
行為/身上	縁遠い、孤独な・の	2	0.2%	2	0.5%	孤独な・の2	2	0.9%	1	0.7%
行為/人柄	やさしい48、真面目な13、おとなしい6、正直な6、素直な5、まっすぐな4、陽気な4、頑固な4、気が弱い4、誠実な3、物静かな3、心のやさしい3、慎重な3、強情な3、気難しい3、責任感が強い3、温厚な3、潔癖な3、気が強い2、気のよい2、静かな2、快活な2、実直な2、意志が強い2、我が強い3、神経質な2、昔気質の2、自尊心が強い2、無責任な2、豪放な2、無邪気な2、堅気な・の2、心の広い2、シャイな2、朗らかな2、純情な、生真面目な、感情の起伏が激しい、明るい、剛毅な、意志が弱い、勝ち気な、折れない、まめな、思い込みの強い、外向的な、私心のない、気が小さい、義理堅い、気が小さな、信心深い、嫌な、偏屈な、だらしがいない、狷介な、気さくな、せっかちな、短絡的な、気位の高い、思い込みの激しい、気性の烈しい、篤実な、気立てのよい、思慮深い、律義な、臆病な、ナイーブな、自尊心の強い、プライドが高い、感情の強い、潔癖感の強い、軽率な、心の弱い、内向的な、忠義に厚い、不真面目な、根のいい	199	16.6%	77	21.2%	やさしい3、臆病な2、誠実な2、正直な2、気が弱い2、血の気の多い、潔癖な、心の広い、忠実な、真面目な、慎重な、責任感が強い、私の強くない、潔い、偉大な、まっすぐな、気が小さい、強情な、嫌な、心がよい、気が短い、陽気な、気性の荒い、気立てのよい	30	13.2%	24	17.5%

	行為/才能	頭のよい 5、賢い 4、不器用な 3、有能な 3、造詣が深い 2、利口な 2、鈍い 2、物分りのよい 2、勘がよい 2、愚かな 2、多才な、勘が鈍い、はしこい、天才的な、非常識な、できのよい、物好きな、教養のない、賢明な、教養の低い、勘が鋭い、了解の悪い、器用な、ばかな、物分りの悪い	42	3.5%	25	6.9%	有能な 3、物知らずな、能がない、ばかな、知的な、底が深い、あざとい、手際がよくない	10	4.4%	8	5.8%
	行為/威厳・行儀・品行	偉い 30、狡い 4、乱暴な 2、上品な 2、正義感の強い、手が早い、受けがよい、品のない、折目正しい、腹黒い、凶暴な、意地汚い、所作のきれいな、女癖の悪い	48	4.0%	14	3.8%	狡い 3、罪深い 2、罪のない、偉い、がさつな、卑しい	9	3.9%	6	4.4%
	行為/行為・活動	勇敢な・なる 4、活動的な 2、無茶な 2、強引な 2、無鉄砲な、大胆な、元気な、押しが強い、意欲的な	15	1.3%	9	2.5%	頑強な	1	0.4%	1	0.7%
	交わり/交わり	親しい 2、平和な・の 2、面倒見がよい 2、協力的な、食えない	8	0.7%	5	1.4%	社交的な、付き合いがよい	2	0.9%	2	1.5%
	待遇/公式・公平	公平な、フェアな	2	0.2%	2	0.5%	フェアな	1	0.4%	1	0.7%
	待遇/待遇・礼など	親切な 16、ひどい 10、厳格な 6、厳しい 6、冷たい 5、残酷な 3、失礼な 3、懐の深い 2、腰が低い 2、傲慢な 2、思いやりがない 2、つれない、意地悪な、随分な、人使いの荒い、底意地の悪い、丁重な、陰険な、礼儀正しい、順応性の高い、細やかな、罪な	68	5.7%	22	6.0%	ひどい 2、失敬な、甘い、冷たい、冷酷な	6	2.6%	5	3.6%
	経済/経済・収支	質素な、必要な	2	0.2%	2	0.5%	有用な 2、必要な 2	4	1.8%	2	1.5%
	経済/貧富	贅沢な、豊かな	2	0.2%	2	0.5%	贅沢な、富裕な	2	0.9%	2	1.5%
自然現象	自然/光	暗い 2	2	0.2%	1	0.3%		0	0.0%	0	0.0%
	自然/音	騒々しい、賑やかな	2	0.2%	2	0.5%	騒々しい 2	2	0.9%	1	0.7%
	自然/材質	純粋な 3	3	0.3%	1	0.3%		0	0.0%	0	0.0%
	生物/生物		0	0.0%	0	0.0%	無害な	1	0.4%	1	0.7%
	身体/身体	背の高い 6、背の低い 3、色っぽい、肌の白い、色の青白い、体格がよい、小柄な	14	1.2%	7	1.9%	背の高い、背の低い	2	0.9%	2	1.5%
	生命/生	若い 8	8	0.7%	1	0.3%		0	0.0%	0	0.0%
	生命/生理・病気など	健康な 4、元気な 3、丈夫な 2、足が早い、頑丈な、弱い	12	1.0%	6	1.6%		0	0.0%	0	0.0%

2.4.2 「男」「女」「男性」「女性」－【主体/人間/男女】

次は、【主体/人間/男女】における代表的な語彙である、「男」「女」「男性」「女性」を取り上げる。表 10 は、「男」「男性」とくみあわさる形容詞を、表 11 は、「女」「女性」とくみあわさる形容詞を調査した結果を示したものである。なお、形容詞の分類項目については、「男」「男性」「女」「女性」とくみあわさる形容詞のすべての項目を二つの表に同じ順番で並べている。

まず、注目されるのは、「男性」がこのくみあわせに用いられることが「女性」に比べても非常に少ないということである。それに対して、「男」は、頻度が最も高く、くみあわさる形容詞の範囲も最も広い。

また、頻度から見ると、「男」は【人柄】(やさしい)、【良不良・適不適】(いい)、【才能】(頭のよい) という順、「女」は【良不良・適不適】(いい)、【人柄】(気が強い)、【好悪・愛憎】(かわいい) / 【生】(若い) という順である。「男」も「女」も【良不良・適不適】が多いのは、「いい男」「いい女」が多いからである。これらは、「いい人」とは違って、主

に外見に関する意味になる。

一方、【良不良・適不適】と「女性」「男性」のくみあわせは見られなかった。「女性」は、【趣・調子】(すてきな)、【人柄】(快活な)、【美醜】(美しい) / 【生】(若い) という順、「男性」は、【生】(若い)、【身体】(小柄な)、【人柄】(控えめな) という順である。このように、【良不良・適不適】を除けば、それぞれのトップになるのは、「男」「女」は【人柄】、女性は【趣・調子】、「男性」は【生】である。そして、【人柄】の頻度が比較的に高いこと、異なり語数が最も多いことは、「男」「女」「男性」「女性」に共通である。この点は、「人」とも共通である。

さらに、くみあわさる形容詞をやや詳しくみると、【才能】【品行・威厳・行為】の項目に明らかなように、「女」は否定的な評価を表すものが多く、「女性」は肯定的な評価を表すものが多くという違いが見られる。例えば、「ばかな女」「ふしだらな女」「賢い女性」「上品な女性」などである。また、「女性」については、【美醜】(美しい) や【人柄】(明るい) など、印象面について特徴づけるものが多い。一方、「女」は、【才能】(ばかな)、【人柄】(強情な) など、内面について特徴づけるものが多い。「男性」も、肯定的な評価に集中する傾向が見られるが、「男」には、そうした偏りはない。

表 10 「男」「男性」とくみあわさる形容詞

部門	形容詞分類項目	男 (927・419)	頻度	比率	異なり語数	異なり語数の比率	男性 (19・15)	頻度	比率	異なり語数	異なり語数の比率
抽象的関係	真偽/真偽・是非	正しい	1	0.1%	1	0.2%	まともな	1	5.3%	1	6.7%
	真偽/本体・代理	模範的な	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	類/等級・系列		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	存在/存在	目立たない 2、影が薄い	3	0.3%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	存在/必然性	しようがない 2、救いようがない、仕方がない	4	0.4%	3	0.7%		0	0.0%	0	0.0%
	様相/趣・調子	立派な 13、とんでもない 2、見事な、天晴れな・なる	17	1.8%	4	1.0%	すばらしい	1	5.3%	1	6.7%
	様相/特徴	妙な 15、平凡な 6、おかしい 3、普通の 4、おかしい 2、珍しい 2、風変わりな、けたはずれの、取り柄のない、変な、型破りの	37	4.0%	11	2.6%		0	0.0%	0	0.0%
	様相/良不良・適不適	いい 68、だめな 8、悪い 4、善良な 2、悪くない、根のいい、恰好よくない、うってつけの	86	9.3%	8	1.9%	理想的な	1	5.3%	1	6.7%
	様相/調和・混乱	めちゃくちゃな	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	様相/弛緩・粗密・繁簡	単純な 6、複雑な	7	0.8%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	様相/美醜	美しい 3、醜い 2、風采の立派な、はでやかな、派手な、ハンサムな、風采のよい、不細工な、きれいな、人相の悪い	13	1.4%	10	2.4%	容姿の美しい	1	5.3%	1	6.7%
	様相/難易・安危	危険な 5、どうしようもない	6	0.6%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	力/力	すごい 4、強靱な、弱い	6	0.6%	3	0.7%		0	0.0%	0	0.0%
	作用/限定・優劣	優秀な 3	3	0.3%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	時間/新旧・遅速	旧式な	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	時間/時間的前後	初めての	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	形/形	ごつし、いかつい	2	0.2%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	量/多少	数少ない、数の多い	2	0.2%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%

精神及び行為	量/広狭・大小	大きな8、小さな3、巨大な2、でかい	14	1.5%	4	1.0%		0	0.0%	0	0.0%
	量/速度	機敏な3、すばしこい、敏捷な	5	0.5%	3	0.7%		0	0.0%	0	0.0%
	量/寒暖		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	量/程度	最低な・の5、したたかな5、大した3、相当な2、相当な2、最適な・の、大変な	19	2.0%	7	1.7%	最高の	1	5.3%	1	6.7%
	量/限度	際限のない	1	0.1%	1	0.2%	完璧な	1	5.3%	1	6.7%
	心/心	多感な2、鋭敏な	3	0.3%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	心/感覚	印象の強い	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	心/飢渴・酔い・疲労・睡眠など	退屈な	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	心/快・喜び	おもしろい12、楽しい4、つまらない3、心持ちがよい2、気持ちがよい2、痛快な、テンションの高い	25	2.7%	7	1.7%		0	0.0%	0	0.0%
	心/恐れ・怒り・悔しさ	恐ろしい4、怖い3、気味が悪い2、惜しい、投げやりな、忌々しい、不気味な	13	1.4%	7	1.7%		0	0.0%	0	0.0%
	心/安心・焦燥・満足	頼もしい3、頼りない2、のんきな、堅い、身軽な、心の強い、気軽な、焦れたい	11	1.2%	8	1.9%		0	0.0%	0	0.0%
	心/苦悩・悲哀	情けない9、面倒な、信頼の厚い、悲しい	12	1.3%	4	1.0%		0	0.0%	0	0.0%
	心/好悪・愛憎	かわいそうな7、感じがよい4、嫌な3、哀れな2、好きな・の2、気の毒な2、血も涙もない2、嫌らしい2、魅力的な2、薄情な、首ったけの、憎い、嫌みな、憎体な、非情な、情が深い、嫉妬深い、笑止な、感じが悪い	36	3.9%	19	4.5%		0	0.0%	0	0.0%
	心/敬意・感謝・信頼など	親不孝な	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	心/表情・態度	愛想がよい2、愛想のない、無愛想な、愛想が悪い	5	0.5%	4	1.0%		0	0.0%	0	0.0%
	心/信念・努力・忍耐	しつこい5、執念深い4、執拗な2、熱心な2、我慢強い、仕事熱心な、忍耐強い、健気な、熱い、几帳面な、しぶとい、辛抱強い、勤勉な	22	2.4%	13	3.1%		0	0.0%	0	0.0%
	心/自信・誇り・恥・反省	図々しい4、厚かましい2、自信過剰な、太々しい、自負心の強い、誇り高い、神経の太い、懲りない	12	1.3%	8	1.9%		0	0.0%	0	0.0%
	心/欲望・期待・失望	計算高い3、抜け目ない3、無欲な2、けちな2、禁欲的な、吝い、貪欲な、権勢欲の強い、欲望の強い	15	1.6%	9	2.1%		0	0.0%	0	0.0%
	心/意志	いい加減な4、自分勝手な、あきらめのよい、自己中心的な、身勝手な、勝手な、無造作な、迂闊な	11	1.2%	8	1.9%		0	0.0%	0	0.0%
	心/詳細・正確・不思議	奇妙な7、不思議な7、用心深い3、周到な2、未知の2、疑り深い、克明な、奇怪な、綿密な、胡乱な、明晰な、怪しい	28	3.0%	12	2.9%		0	0.0%	0	0.0%
	心/意味・問題・趣旨など	重要な、大切な、論理的な、ドグマティックな	4	0.4%	4	1.0%		0	0.0%	0	0.0%
	心/説・論・主義	楽観的な	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	心/見聞き	耳敏い	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	言語/言語活動	無口な12、寡黙な3、喧しい2、口がうまい2、口が重い2、口が堅い、おしゃべりな	23	2.5%	7	1.7%		0	0.0%	0	0.0%
	言語/評判	有名な2、評判のよい、評判のよくない、噂の多い、名高い、悪名高い	7	0.8%	6	1.4%		0	0.0%	0	0.0%
	生活/文化・歴史・風俗	書生風の、優雅な、野暮な、ろくでもない、安っぽい、ハイカラな、貧相な、下劣な、けばけばしい、低俗な	10	1.1%	10	2.4%	むくつけき	1	5.3%	1	6.7%
	生活/人生・禍福	運の強い5、おめでたい4、運のよい4、幸せな4、幸運な3、運の悪い2、幸福な2、運のない2、不幸な2、不運な、間が悪い、騒がしい、皮肉な	32	3.5%	13	3.1%		0	0.0%	0	0.0%
	生活/労働・作業・休暇	忙しい6	6	0.6%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	生活/生活・起居	酒好き	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	行為/身上	縁遠い2、孤独な・の2	4	0.4%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%

	行為/人柄	やさしい 8、だらしがない 7、律義な 7、真面目な 7、おとなしい 6、正直な 6、臆病な 5、頑固な 5、気が弱い 5、義理堅い 4、強情な 4、気のよい 4、物静かな 3、気弱な 3、陰気な 3、気がやさしい 2、実直な 3、誠実な 2、嫌な 2、度量の小さい 2、怒りっぽい 2、剛腹な 2、意志が弱い 2、意気地がない 2、明るい 2、気が小さい 2、潔癖な、負けぬ気の強い、素直な、スケールの小さい、スケールの大きな、人のよい、まめな、思慮深い、居心地がよい、性根ない、難しい、信心深い、温厚な、信用のない、無責任な、慎重な、そっかしい、救い難い、考え深い、偉大な・なる、謹直な、根のいい、度し難い、楽天的な、シャイな、偏屈な、沈着な、剛毅な、潔い、まっすぐな、無神経な、気が小さな、物腰の柔らかい、勝ち気な、生真面目な、気が早い、篤実な、気が短い、気さくな、小心な、気っぶのよい、調子のよい、執念深い、負けず嫌いな、気前のよい、軽忽な、堅気な・の、陽気な、気性の激しい、静かな、気質のやさしい、頭が固い、気難しい、決断のない	154	16.6%	80	19.1%	控えめな、おとなしい	2	10.5%	2	13.3%
	行為/才能	ばかな 7、頭のよい 5、有能な 4、賢い 3、天才的な 3、利口な 2、凡庸な 2、無能な・の 2、勘がよい 2、間抜けな 2、如才ない 2、底が浅い 2、欠点のない 2、要領のよい、頭の回転が速い、愚鈍な、呑み込みの早い、敏腕な、頭が固い、俊敏な、聡い、頭の悪い、記憶力のよい、勘が鋭い、鈍な、天晴れな・なる、非常識な、物好きな、堪能な、独創的な、愚図な、目がない、浅はかな、賢しい	59	6.4%	34	8.1%	才能豊かな	1	5.3%	1	6.7%
	行為/威厳・行儀・品行	恰幅がよい 5、偉い 5、狡猾な 3、汚い 3、狡い 2、卑劣な 2、悪辣な 2、女癖の悪い、不埒な、狂暴な、好色な、粗暴な、小汚い、業の深い、乱暴な、下品な、さもない、礼儀のない、手が早い、腹黒い、押し出しがよい、奸悪な、柄の悪い	38	4.1%	23	5.5%		0	0.0%	0	0.0%
	行為/行為・活動	卑怯な 3、無茶な 2、無鉄砲な 2、激しい、勇敢な・なる、姑息な、押しも粘りも強い	11	1.2%	7	1.7%	凛々しい	1	5.3%	1	6.7%
	交わり/交わり	人当たりの柔らかい、面倒見がよい、人付き合いがよい、付き合いづらい	4	0.4%	4	1.0%		0	0.0%	0	0.0%
	待遇/待遇・礼など	ひどい 13、親切な 8、傲慢な 4、甘い 2、冷酷な 2、水臭い、残酷な、傲岸な、無礼な、礼儀正しい、失礼な、事務的な、謙虚な、意地の悪い	38	4.1%	14	3.3%		0	0.0%	0	0.0%
	経済/経済・収支	必要な、実用的な	2	0.2%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	経済/貧富	贅沢な	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
自然現象	自然/音	声の大きい	1	0.1%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	自然/におい	酒臭い、臭い	2	0.2%	2	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	自然/材質	純粋な 3	3	0.3%	1	0.2%		0	0.0%	0	0.0%
	身体/身体	背の高い 10、小柄な 7、大柄な 3、体の大きな 2、色の浅黒い 2、体格の大きな、背丈の低い、体の小さな、色っぽい、体格がよい、色の白い、華奢な、体の細い、面長な、顔の長い、毛深い、背の低い、小太りの	37	4.0%	18	4.3%	小柄な 2、背の低い	3	15.8%	2	13.3%
	生命/生	若い 45、年若な・の、若々しい	47	5.1%	3	0.7%	若い 4	4	21.1%	1	6.7%
	生命/生理・病気など	健康な 4、頑丈な 3、タフな 2、足が早い、腕力の強い、エネルギーな、たくましい、元気な、強い	15	1.6%	9	2.1%	筋骨たくましい	1	5.3%	1	6.7%

表 11 「女」「女性」とくみあわさる形容詞

部門	形容詞分類項目	女 (450・184)	頻度	比率	異なり語数	異なり語数の比率	女性 (165・85)	頻度	比率	異なり語数	異なり語数の比率
抽象的関係	真偽/真偽・是非		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	真偽/本体・代理	掛け替えのない	1	0.2%	1	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	類/等級・系列		0	0.0%	0	0.0%	最高級の	1	0.6%	1	1.2%
	存在/存在		0	0.0%	0	0.0%	目立たない	1	0.6%	1	1.2%
	存在/必然性		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	様相/趣・調子	すばらしい 3、とんでもない 3、立派な	7	1.6%	3	1.6%	すてきな 11、すばらしい 10、立派な 2	23	13.9%	3	3.5%
	様相/特徴	平凡な 6、変な 5、特別な・の 3、おかしい 3、妙な 3、普通の 2、申し分がない、例外的な	24	5.3%	8	4.3%	普通の 3、珍しい、特別な・の、平凡な	6	3.6%	4	4.7%
	様相/良不良・適不適	いい 83、悪い 12、理想的な、だめな、似つかわしくない	98	21.8%	5	2.7%		0	0.0%	0	0.0%
	様相/調和・混乱		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	様相/弛緩・粗密・繁簡	ややこしい、きつい	2	0.4%	2	1.1%		0	0.0%	0	0.0%
	様相/美醜	きれいな 10、美しい 8、華やかな、派手な、姿のいい、不細工な、見た目のよい、小ぎれいな	24	5.3%	8	4.3%	美しい 10、きれいな 4、華やかな、艶やかな	16	9.7%	4	4.7%
	様相/難易・安危	どうしようもない 2、言い難い、不自由な	4	0.9%	3	1.6%	危険な	1	0.6%	1	1.2%
	力/力	強い 5、非力な、弱い	7	1.6%	3	1.6%	パワフルな、強い	2	1.2%	2	2.4%
	作用/限定・優劣		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	時間/新旧・遅速	古い 2、新しい	3	0.7%	2	1.1%		0	0.0%	0	0.0%
	時間/時間的前後		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	形/形		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	量/多少		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	量/広狭・大小	小さな	1	0.2%	1	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	量/速度		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	量/寒暖		0	0.0%	0	0.0%	温和な	1	0.6%	1	1.2%
	量/程度	したたかな 4、大した 3、最高の 2、相当な、かなりの・の、大変な	12	2.7%	6	3.3%	大変な 2、最高の、したたかな	4	2.4%	3	3.5%
	量/限度		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
精神及び行為	心/心	鈍感な、癪の強い	2	0.4%	2	1.1%	多情な	1	0.6%	1	1.2%
	心/感覚		0	0.0%	0	0.0%	印象的な	1	0.6%	1	1.2%
	心/飢渴・酔い・疲労・睡眠など		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	心/快・喜び	清々しい、愉快的な、つまらない	3	0.7%	3	1.6%	楽しい 2、不愉快な、おもしろい、ハッピーな	5	3.0%	4	4.7%
	心/恐れ・怒り・悔しさ	恐ろしい 13、怖い 4、すごい 2、おっかない、忌々しい	21	4.7%	5	2.7%	怖い	1	0.6%	1	1.2%
	心/安心・焦燥・満足	心の強い、堅い	2	0.4%	2	1.1%		0	0.0%	0	0.0%
	心/苦悩・悲哀	淋しい 2、厄介な	3	0.7%	2	1.1%		0	0.0%	0	0.0%
	心/好悪・愛憎	かわいい 12、哀れな 3、魅力的な 2、感じがよい 2、床しい、世話好き、嫌らしい、可憐な・の、恋しい、憎い、かわいそう、憎らしい、気の毒な、嫉妬深い、いけ好かない、嫌な	31	6.9%	16	8.7%	魅力的な 8、かわいい 3、情が深い、チャーミングな、好ましい	14	8.5%	5	5.9%
	心/敬意・感謝・信頼など		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	心/表情・態度	可愛げのない	1	0.2%	1	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	心/信念・努力・忍耐	執念深い 2、辛棒のいい、芯の強い	4	0.9%	3	1.6%		0	0.0%	0	0.0%

	心/自信・誇り・恥・反省	図々しい	1	0.2%	1	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	心/欲望・期待・失望	計算高い、虫のよい	2	0.4%	2	1.1%		0	0.0%	0	0.0%
	心/意志	勝手な、いい加減な、迂闊な、わがままな・の、利己的な	5	1.1%	5	2.7%		0	0.0%	0	0.0%
	心/詳細・正確・不思議	不思議な 5、用心深い 2、怪しい、分かりやすい	9	2.0%	4	2.2%	不思議な 2、奇妙な	3	1.8%	2	2.4%
	心/意味・問題・趣旨など	大切な 2、大事な 2、合理的な	5	1.1%	3	1.6%	常識的な	1	0.6%	1	1.2%
	心/説・論・主義		0	0.0%	0	0.0%	ロマンチックな	1	0.6%	1	1.2%
	心/見聞き		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	言語/言語活動	うるさい 2、口が悪い、口数が少ない、口が堅い	5	1.1%	4	2.2%		0	0.0%	0	0.0%
	言語/評判		0	0.0%	0	0.0%	有名な 2	2	1.2%	1	1.2%
	生活/文化・歴史・風俗	モダンな、都会風の、現代風の	3	0.7%	3	1.6%	エレガントな 2、地味な、おしゃれな、古風な	5	3.0%	4	4.7%
	生活/人生・禍福	幸せな 7、不幸な 3、不運な、運の強い、運のよい	13	2.9%	5	2.7%	幸せな、不幸せな	2	1.2%	2	2.4%
	生活/労働・作業・休暇	忙しい 2	2	0.4%	1	0.5%	多忙な	1	0.6%	1	1.2%
	生活/生活・起居		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	行為/身上	孤独な・の、羽振りのよい	2	0.4%	2	1.1%	高貴な・の	1	0.6%	1	1.2%
	行為/人柄	気が強い 9、やさしい 5、嫌な 5、強情な 3、気のよい 2、気高い 2、気っぶのよい 2、気持ちがよい 2、真面目な、せっかちな、ナルシストな、気さくな、無邪気な、勝ち気な、しとやかな、気性の激しい、気立てのよい、心の広い、気位の高い、忠実な、意地の強い、気立のよい、意志が強い、無責任な、控えめな、生真面目な、気が多い、神経の細かい、素直な、陽気な、おとなしい	53	11.8%	31	16.8%	明るい 3、気さくな 2、物静かな 2、内気な 2、気弱な 2、人のよい、気っぶのよい、やさしい、慎重な、穏やかな、負けず嫌いな・の、おとなしい、気が強い	19	11.5%	13	15.3%
	行為/才能	ばかな 8、頭のよい 3、生意気な 3、賢い 2、気が利かない、愚かな、どん臭い、不束な、達者な、仕事が早い、できの悪い、利口な	24	5.3%	12	6.5%	賢い 2、聡明な 2、頭のよい 2、賢明な、教養豊かな、有能な、明哲な	10	6.1%	7	8.2%
	行為/威厳・行儀・品行	ふしだらな 2、身持ちの固い、狡い、がさつな、淫乱な、スケベな、色ごと好きの、不貞な、身持ちの悪い、偉い、好色な	12	2.7%	11	6.0%	品のよい 2、上品な	3	1.8%	2	2.4%
	行為/行為・活動	大胆な、気丈な、大胆積極的な	3	0.7%	3	1.6%	気丈な 4、積極的な、元気のよい、勇敢な・なる	7	4.2%	4	4.7%
	交わり/交わり	家庭的な	1	0.2%	1	0.5%		0	0.0%	0	0.0%
	待遇/待遇・礼など	ひどい 3、親切的な 2、意地悪な 2、高慢な、底意地の悪い、冷たい、甘い	11	2.4%	7	3.8%		0	0.0%	0	0.0%
	経済/経済・収支		0	0.0%	0	0.0%	不可欠な	1	0.6%	1	1.2%
	経済/貧富	贅沢な、貧乏くさい	2	0.4%	2	1.1%		0	0.0%	0	0.0%
自然現象	自然/音		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	自然/におい		0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%
	自然/材質	固い	1	0.2%	1	0.5%	ハードな、純粋な	2	1.2%	2	2.4%
	身体/身体	小柄な 5、背の高い 3、色っぽい 2、姿の美しい、大柄な、小作りの、小太りの	14	3.1%	7	3.8%	大柄な 4、小柄な 3、背の高い 2、豊満な、ふくよかな、背の低い	12	7.3%	6	7.1%
	生命/生	若い 30、年若い	31	6.9%	2	1.1%	若い 14、か弱い、初々しい	16	9.7%	3	3.5%
	生命/生理・病気など	健康な	1	0.2%	1	0.5%	元気な、たくましい	2	1.2%	2	2.4%

2.4.3 「母親」「父親」－【主体/家族/親・先祖】

表 12 は、【主体/家族/親・先祖】における、「母親」「父親」とくみあわさる形容詞を調査した結果を示したものである。この表から、「母親」「父親」は、このくみあわせで用いられることや関係する形容詞の項目が非常に少ないことがわかる。くみあわさる形容詞によって、主語にすえられた人を「母親」として「父親」として評価している。

主語にすえられた人を「親」として評価するにあたっては、【待遇・礼など】（ひどい、大甘な）、【良不良・適不適】（いい、悪い）といった形容詞が多く使われている。この点においては、「母親」と「父親」は共通である。語彙のバリエーションについても、特に違いが見られなかった。「人」「男」などとの違いとして最も特徴的なのは、【待遇・礼など】が非常に多く用いられていることである。それは、子どもに対する態度がどうであるかといった観点からの特徴づけが、「親」としての人の特徴づけとして基本的であるからであろう。

表 12 「母親」「父親」とくみあわさる形容詞

部門	形容詞分類項目	母親 (35・29)	頻度	比率	父親 (33・23)	頻度	比率
抽象的関係	真偽/真偽・是非	本当の、まともな	2	6%	本当の	1	3%
	真偽/本体・代理	掛け替えのない	1	3%		0	0%
	様相/趣・調子	とんでもない	1	3%	すばらしい	1	3%
	様相/特徴	ユニークな、珍しい、変な	3	9%	妙な	1	3%
	様相/良不良・適不適	悪い 3、いい	4	11%	いい 4、だめな 2、悪い、善良な	8	24%
	様相/美醜	美しい	1	3%		0	0%
	様相/難易・安危		0	0%	危ない	1	3%
精神及び行為	心/安心・焦燥・満足	のんきな、馴染深い	2	6%		0	0%
	心/苦悩・悲哀		0	0%	情けない	1	3%
	心/好悪・愛憎	旅行ずきの、可愛らしい	2	6%	哀れな、嫌いな、好きな・の	3	9%
	心/信念・努力・忍耐		0	0%	熱心な	1	3%
	言語/言語活動	能弁な、無口な	2	6%		0	0%
	行為/人柄	淡泊な・の	1	3%	やさしい 3、無責任な、かたくなな	5	15%
	行為/才能	未熟な、賢い、聡明な	3	9%	愚かな	1	3%
	行為/威厳・行儀・品行	心掛けのよい 2、偉い	3	9%		0	0%
	待遇/待遇・礼など	ひどい 2、大甘な・の、残酷な、冷たい	5	14%	ひどい 5、大甘な・の、厳格な、冷たい、失敬な、厳しい	10	30%
	経済/貧富	貧しい	1	3%		0	0%
自然現象	生命/生	若い 3	3	9%		0	0%
	生命/生理・病気など	健康な	1	3%		0	0%

2.4.4 「画家」「タレント」「職人」「弁護士」「刑事」「教師」－【主体/成員】

表 13 と表 14 は、【主体/成員】における職業を表す名詞のうち、頻度が比較的に高い名詞とくみあわさる形容詞を調査した結果を示したものである。これらは、それ自体が《質》規定になっているので、このくみあわせで用いられることは、非常に少ない。また、形容詞の項目もかなり限られている。そして、名詞（つまり、職業）によって、それとくみあわさりやすい形容詞の傾向に違いが見られる。例えば、「画家」「タレント」は【評判】（有名な、売れない）、「職人」は【才能】（腕のよい）、弁護士は【才能】（抜け目ない）と【限定・優劣】（優秀な）、「刑事」は【限定・優劣】（優秀な）と【生】（若い）、「教師」は【良不良・適不適】（いい）が多い。

表 13 「画家」「タレント」「職人」とくみあわさる形容詞

部門	形容詞分類項目	画家 (25・14)	頻度	比率	タレント (10・7)	頻度	比率	職人 (15・9)	頻度	比率
抽象的関係	様相/趣・調子	立派な、すばらしい	2	8%		0	0%	立派な 3	3	20%
	様相/特徴	例外的な	1	4%		0	0%		0	0%
	様相/良不良・適不適	いい	1	4%		0	0%		0	0%
	様相/美醜	美しい	1	4%		0	0%		0	0%
	力/力		0	0%	すごい	1	10%		0	0%
	時間/新旧・遅速		0	0%	新しい	1	10%	古い	1	7%
精神及び行為	量/程度		0	0%	大変な	1	10%	大変な	1	7%
	心/心	敏感な	1	4%		0	0%		0	0%
	心/好悪・愛憎	好きな・の	1	4%		0	0%		0	0%
	行為/身上		0	0%	前途有望な	1	10%		0	0%
	心/詳細・正確・不思議		0	0%		0	0%	巧緻な	1	7%
	心/意味・問題・趣旨など		0	0%	大事な	1	10%	大事な	1	7%
	言語/評判	有名な 10、売れない 2、高名な、著名な	14	56%	売れない 4	4	40%		0	0%
	行為/身上	有望な	1	4%		0	0%		0	0%
	行為/人柄		0	0%		0	0%	おとなしい	1	7%
	行為/才能		0	0%		0	0%	腕のよい 5	5	33%
自然現象	行為/威厳・行儀・品行	偉い	1	4%	手が早い	1	10%	品のよい	1	7%
	生命/生	若い 2	2	8%		0	0%	若い	1	7%

表 14 「弁護士」「刑事」「教師」とくみあわさる形容詞

部門	形容詞分類項目	弁護士 (13・10)	頻度	比率	刑事 (40・15)	頻度	比率	教師 (21・13)	頻度	比率
抽象的関係	様相/趣・調子		0	0%		0	0%	すばらしい 2、立派な	3	14%
	様相/良不良・適不適		0	0%	いい	1	3%	いい 3、いい加減な、だめな	5	24%
	様相/美醜		0	0%	人相の悪い	1	3%		0	0%
	力/力		0	0%		0	0%		0	0%
	作用/限定・優劣	優秀な 3	3	23%	優秀な 16	16	40%	優秀な 2	2	10%
精神及び行為	心/安心・焦燥・満足		0	0%	頼りない 2、のんきな	3	8%	頼りない	1	5%
	心/信念・努力・忍耐		0	0%	熱心な、しつこい	2	5%	熱心な 3	3	14%
	言語/評判	有名な	1	8%	有名な	1	3%		0	0%
	生活/文化・歴史・風俗	ろくでもない	1	8%	ろくでもない	1	3%		0	0%
	行為/身上		0	0%		0	0%	しががない	1	5%
	行為/人柄	調子の軽い、良心的な	2	15%	忠実な 2、だらしががない	3	8%	真面目な	1	5%
	行為/才能	老練な、抜け目ない、未熟な	3	23%	冴えない	1	3%	有能な	1	5%
	行為/威厳・行儀・品行	老獪な	1	8%		0	0%		0	0%
自然現象	待遇/待遇・礼など		0	0%	親切な	1	3%		0	0%
	生命/生	若い 2	2	15%	若い 9、若々しい	10	25%	若い 3、若々しい	4	19%

2.5 おわりに

以上、本節では、人を主語とする名詞述語が形容詞の規定語をとった例における、形容詞と名詞述語の語彙・くみあわせ・意味項目について、大規模な調査を行った結果を報告した。以下、まとめとして、表 2～表 14 の各調査結果において、頻度や比率がトップであった語彙・くみあわせ・意味項目について確認しておく。

まず、調査結果の概要としては、このくみあわせに使われる語彙については、名詞は「人」

と「男」が傑出して多く、形容詞は「いい」がきわだって多い。【表 2・3】

名詞と形容詞の意味項目については、名詞は「人」「人間」が所属する【主体/人間】が最も多く（71.87%）、形容詞は、部門としては【精神及び行為】が過半数を占める（55.55%）が、中項目では【様相】がトップ（26.71%）である（「いい」が多数であることによる）。

【表 4・5】

形容詞と名詞のくみあわせについては、中項目では、「いい人」などの【様相】と【人間】（20.44%）、分類項目では、「やさしい人」などの【人柄】と【人間】のくみあわせがトップ（5.02%）を占めている。【表 6・7】

個別語彙のくみあわせで頻度が最も高いのは、「いい人」（168 例）であった。【表 8】

以下は、名詞を固定した調査の結果である。まず、「人」および「人間」とくみあわさる形容詞は、【人柄】の項目の形容詞が最も多く使用されている（「人」16.6%、「人間」13.2%）。

【表 9】

次に、「男」とくみあわさる形容詞も、【人柄】の項目の形容詞が最も多い（16.6%）が、「女」とくみあわさる形容詞は、【良不良・適不適】を表す形容詞が最も多く（21.8%）使われている（「いい女」が多数であることによる）。一方、「女性」「男性」になると、くみあわさる形容詞のトップは、前者が【趣・調子】（13.9%）、後者が【生】（21.1%）である。【表 10・11】

さらに、「母親」「父親」については、【待遇/礼など】を表す形容詞がトップである（「母親」14%、「父親」30%）。【表 12】

そして、職業を表す名詞については、「画家」と「タレント」は【評判】が（「画家」56%、「タレント」40%）、「職業人」は【才能】が（33%）、「弁護士」は【才能】／【限定・優劣】が（23%）、「刑事」は【限定・優劣】が（40%）、「教師」は【良不良・適不適】が（24%）トップであった。【表 13・14】

佐藤（1997）は、人を主語とする名詞述語文の意味的なタイプを体系的に記述したものであるが、その一部で、形容詞と名詞述語がくみあわさった文についても言及している。佐藤は、このくみあわせを「一つの《質》の表現手段」としてとらえ、そこにおいて形容詞が表す《特性》について、「主語の位置にある人物にとっては、《本質的な特性》であって、《現象的な特性》ではない。とすれば、その特性はすでに《質》である。あるいは、《質規定のなかに入り込んだ特性》である」（p. 175-176）と述べている。「いい人」と「いい女」「いい男」の「いい」の語彙的意味が異なることから明らかなように、人を特徴づける手段のひとつとして、このくみあわせをとらえていかなければならないだろう。次節では、この調査を踏まえて、形容詞の規定語をとる名詞述語文がテキストにおいてどんな機能をはたしているかについて考察する。

3. 形容詞の規定語をとる名詞述語文のテキスト的機能について

—「形容詞＋人だ」の場合—

3.1 はじめに

名詞述語文のテキスト的機能について、佐藤（2001a）は、意味的・文法的特性との関連のなかでとらえる必要があるということを前提にして、名詞述語文における典型的なものである、《質・特性表現》の名詞述語文を取り上げ、それが《説明》としてはたらくとき、つくりだす《説明的なむすびつき》の体系を、奥田（1990）の枠組みにしたがって記述している。そして、佐藤（2001a）における《質・特性》を表現する名詞述語文についての基本的な考え方は、佐藤（1997）¹の次のような指摘を受け継いでいる。

名詞述語文は、《質》を表現することを基軸にしつつ、そのおおくが《特性》表現にながれこんでいる。そして、《特性》を表現する名詞述語文のおおくが、その述語をかざる連体修飾語をしたがえていて、物や出来事の《特性》は、直接的には、その連体修飾語にさしだされる。（佐藤 2001a: 74）

このような事実を認めつつ、佐藤（2001a）では、名詞述語文による《質・特性》の表現手段²を問わず、《説明》としてはたらくすべての《質・特性表現》の名詞述語文を対象にしている。ただし、佐藤（2001a）では、主語が物やことである場合に限定し、人を主語とする場合を除外している。その理由については特に言及されていないが、佐藤（1997）では、人の《質》や《特性》を表現する手段として頻繁に使われているのは、「あの人はたいへんにぎやかな人ですね」のような文であると指摘している³。このような事実を踏まえて、本節では、人を主語とし、形容詞の規定語にかざられる「人だ」を述語とする、「あの人はたいへんにぎやかな人ですね」のようなタイプの名詞述語文のテキスト的機能について記述することを目的とする。

人の《質・特性》表現としてのこのタイプの文は、コンテキスト（他の文との関係）にお

¹ 本論文第1章が紹介しているように、佐藤（1997）は、文の対象的な意味の観点から、名詞述語文の意味的なタイプを網羅的・体系的に記述しているものである。

² 名詞述語文による《質・特性表現》は、その表現手段によって、次の4つのタイプに分かれる（例文は佐藤（1997・2001a）によるが、一部省略あり）。①それにしても与次郎は交際家だ。（三四郎）②あの人はたいへんにぎやかな人ですね。（三四郎）③三人目の質問者は、有名な京劇俳優であった。（大地の子）④上司の楊処長は、公平で快活な人柄であった。（大地の子）。まず、連体修飾成分をもつか否かによって、①を②③④から大きく区別される。また、連体修飾成分をうけるもののうち、連体修飾成分と述語名詞があわせ述語を作ってはじめて、《特性》を表す④と、そうではない②③に分かれる。さらに、述語で《質規定》しておいたうえで、連体修飾成分に《特性》をさしだしている点において、②と③が共通しているが、連体修飾成分が文の焦点となるか（②）、連体修飾成分と述語がともに文の焦点となるか（③）で異なっている。

³ 主語が人である場合、形容詞の規定語をとる名詞述語文のうち、「人だ」を述語にするものが最も多く使用されていることについては、本章の2節の調査を参照。

いて、基本的に《説明》としてはたらいっている⁴。そうであれば、このタイプの文による《説明》は、どのような《説明的なむすびつき》をつくりだすかを問わなければならない。したがって、本節では、「形容詞+人だ」の文のテキスト的機能は何かについて、《説明》としてはたらいっているとき、それがつくりだす《説明的なむすびつき》をとりだし、記述することを目的とする。

なお、本節の考察では、小説の地の文のみを取り上げることにする。以下では、《説明》に関する先行研究を概観し、考察に入ることにする。

3.2 先行研究

《説明》に関する先駆的な研究としては、奥田（1990）がある。奥田（1990）では、《説明》の概念を規定したうえで、述語に「のだ」をともなう文による《説明の文》と《説明されの文》がつくりだす《説明的なむすびつき》の体系を、それぞれの文の一般的な意味とともに記述している。また、奥田の《説明》に関する一連の論考⁵にもとづいて、《質・特性表現》の名詞述語文による《説明》の体系を記述しているのが佐藤（2001a）である。以下では、両氏の研究を詳しく紹介しておくことにする。

3.2.1 《説明》としてはたらく述語に「のだ」をともなう文の記述—奥田（1990）—

まず、奥田（1990）では、《説明》とはなにかについて、「物や出来事をめぐって、これらの内部おくふかくにかくされている、直接的な経験ではとらえることのできない、本質的な特徴をあきらかにすること」であり、「また、物のあいだの相互作用のなかから、原因・結果の関係のような、法則的なむすびつきをとりだすこと」であると規定している。また、「説明される出来事をさしだしている文のこと」を《説明されの文》と呼び、「《説明されの文》にさしだされている出来事を説明している文」を《説明の文》と呼んでいる。そして、《説明》の規定にしたがって、「のだ」をともなう文が《説明の文》としてはたらくとき、《説明されの文》とのあいだにつくりだす《説明的なむすびつき》について、《説明されの文》と《説明の文》がもつ一般的な意味とのかかわりのなかで、その下位タイプを次のようにまと

⁴ もちろん、このタイプの文は、次のはじめの例のように、《説明され》としてはたらい、他の文と《説明的なむすびつき》を作る場合がある。また、このタイプの文は、二番目の例のように、そもそも《説明の構造》にない場合もある。なお、いずれも、本節の対象外とする。

・ 佐吉、つまり私の父は、幼時を追憶して、母についてこう他人に語っている。世の中に多くの女性がいるが、おそらく私の母ほど親切な人はないだろうと思う。それほど親切な人であった。たとえば、自分はぼろのようなよごれた着物をまとっていても、出入りの者の子供たちには、きれいな着物を作ってやるのだった。（明治・父・アメリカ）

・ こんな感じの手紙を書き続けることは不可能に近いから、ケンケンのことを少しだけ書くことにしよう。お酒に詳しくて、東京大学が学生によって占拠され、入学試験が惜しくも受けられなかったと悔やみ、慶應大学を卒業した、信念の強い人だ。僕が驚いてしまうような色々な人を紹介してくれるし、僕知らないことを惜しみなく教えようと限り無く努力してくれる頼りがいのある人だよ。僕の尊敬にあたいする数少ない大人の一人なんだ。実際そうであってほしいよ。（墮天使達のレクイエム）

⁵ 奥田（1990・1992・1993a・2001）を参照。

めている（表1は奥田（1990）にもとづいて筆者がまとめたもの）。

表1 述語に「のだ」をともなう文がつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプ
—奥田（1990）—

《つけたし的な説明》	《ひきだし的な説明》
(a)原因	(j)結果（原因の）
(b)理由	(k)結果（理由の）
(c)動機	(l)発見的な判断
(d)感情の源泉	(m)必然の判断
(e)判断の根拠	(n)評価的な判断
(f)具体化・精密化・いいかえ	(o)一般化の判断
(g)思考の対象的な内容	
(h)意義づけ	
(i)本質的な特徴づけ	

ここでは、《説明》が《つけたし的な説明》と《ひきだし的な説明》に大きく分けられている。これは、「条件づけ・条件づけられ」という論理的な関係にある二つの出来事をめぐっての論理のはこび方による区別であり、《説明の文》が条件づける出来事をさしだしている場合は《つけたし的な説明》と呼び、《説明の文》が条件づけられる出来事をさしだしている場合は《ひきだし的な説明》と呼んでいる。以下に挙げる例文は奥田（1990）による（一部省略あり、そして例文の末尾に《説明的なむすびつき》のタイプをつけくわえる）。

- (a) 去年のくれ、2名の教師のうち、26歳の青年教師が自殺している。島流しの生活にたええなかったのだ。（人間の壁） 《つけたし的な説明》〈原因〉
- (j) 仏応寺は境内にも中庭にも樹木がおいしげっている。陽のあたらしめ部屋がおおいのだ。（菩提樹） 《ひきだし的な説明》〈結果（原因の）〉

また、述語に「のだ」をともなう文による《説明》においては、《ひきだし的な説明》に比べて《つけたし的な説明》のほうが多く、そして、〈原因〉〈理由〉〈動機〉が中心的な位置を占めていると結論づけている。

3.2.2 《説明》としてはたらく名詞述語文の記述—佐藤（2001a）—

奥田（1990）の記述をもとにして、名詞述語文による《説明》の記述に発展させたのが佐藤（2001a）である。佐藤（2001a）で記述の対象となっているのは、次のような条件を満たしているものである。

- ①小説の地の文に使用されている。
- ②自立的な名詞がいいおわりの述語の位置にすえられている。
- ③主語が物やことをさしだしている。(主語が人名詞からなる例は、原則として対象としない。ただし、物・こと主語の文に適当な用例がないばあい、必要におうじてとりあげる。)
- ④主語が「は」のかたちをとっている。(一語文、主語省略文はあつかわない。)
- ⑤アクチュアルな分割の観点からは、ノーマルな構造をとっている。(ひっくりかえしの文、転位の文はあつかわない。)
- ⑥《質》や《特性》を表現している。(《関係》《状態》《存在》を表現する文、同一認定文はあつかわない。)

(佐藤 2001: 76)

このうち、⑥のように、《質》や《特性》を表現しているものに限定している理由は、二つある。一つは、文の対象的な意味がその機能を決めるため、その機能を記述するにあたっては、意味との関連の中で考察しなければならないからである。もう一つは、《質・特性表現》の名詞述語文は、名詞述語文の全体系において、土台となる位置を占めているため、それらのテキストのなかでの機能の現れ方が、名詞述語文の最も典型的な現れ方になると考えられるからである。

佐藤が結論として示している、名詞述語文がつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプは、表 2⁶のようなものである。各タイプの代表的な例文⁷を表の下に示す。

⁶ 佐藤 (2001a: 109) の表において、「(5) 理由」というタイプは、《ひきだしの説明》に入っているが、論文内容を確認したところ、《つけたしの説明》に属すべきだと判断し、原文にもとづいてもとの表を修正した。

⁷ 例文における線の引き方や太字の表示などは、佐藤 (2001a) に従う。つまり、細線は《説明されの文》、太線は《説明の文》である。なお、(4) の点線は、《必然の判断》が実現する条件を表すつきそい文を示している。そして、例文の末尾で《説明的なむすびつき》のタイプをつけくわえる。なお、例文の一部を省略したところがある。

表2 《質・特性表現》の名詞述語文がつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプ
—佐藤（2001a: 109）—

説明的なむすびつき		《説明されの文》にさしだされる対象的な内容
※ ⁸	(1)一般化の判断 本質的な特徴づけ ⁹	その本質的特徴・法則が適用される出来事 その本質・法則の具体的なあらわれとしての出来事
ひきだ し 的	(2)評価的な判断	その評価的な判断の根拠となる出来事
	(3)発見的な判断	その事実の発見の手がかり、根拠をつとめる物の状態
	(4)必然の判断	そうすることの必要・必然を判断する根拠となる現実の状況
つ け た し 的	(5)理由	し手のその論理のもとに成立する、動作・態度・状態
	(6)感情の源泉	その出来事（源泉）によってよびおこされた感情
	(7)判断の根拠	その根拠のもとに成立する判断、意見、評価、態度
	(8)思考の内容	その内容をみちびく思考活動
	(9)具体化・精密化 ・いいかえ	それによって具体化され、精密化され、いいかえられるところの、 一般的な命題
	(10)意義づけ	それによって意義・使命・目的があきらかにされる出来事

- (1) 人も知るように、当時の諸大名が農民から収めた年貢米のおおくは、大阪の方に輸送されて、金銀に替えられた。大阪は米取引の一大市場であった。（夜明け前・一・32）
〈一般化の判断・本質的な特徴づけ〉
- (2) まだ製鉄所の各設備ごとの技術交渉、価格交渉が終了していないにもかかわらず、なぜか一挙に総額の値決め交渉が上海で行われることは、計画司の中でも一部の人間しか知らされていない。一心の上海行きは、その交渉の間、上からの質問に備えて、何事も即答するための重要な出張であった。（大地の子・二・342）〈評価的な判断〉
- (3) 昼間、私は日記をばらばらとめくってみました。そこには死と罪と愛という文字がやたらに多く目につき、今さらながら私とあなたとのたどってきた歳月の容易でないこ

⁸ 「※」というのは「ひきだしの」でありながら「つけたしの」でもあり、区分できないという意味である。

⁹ 佐藤（2001a）では、《一般化の判断》と《本質的な特徴づけ》をひとまとめにしている。そして、このようにするのは、奥田（1992）には次の指摘があるからであると述べている。「ひきだしの説明のおおくは、「のだ」をともなう説明の文が、先行する文にさしだされる、現象としての出来事から、その本質的な特徴をみいだしている、というようなばあいである。（用例：「青年はずかしそうにあかくなった。まだすれていないのだ。」「女は写真をくれといっている。未練はあるのだ。」など）このような説明において、説明されの文にさしだされる、現象としての出来事にたいして、説明の文は本質的な特徴づけをあたえながら、つけたしの説明をおこなっているとも解釈することができる。そして、どちらの解釈を利用するのがこのましいか、ということは、テキストのながれがきめてかかるのだろうが、どちらに解釈しようとしつかえないとすれば、この種の説明はひきだしのであり、かつつけたしのであるということになる。」

- とを思いしらされた気持ちでしたが、大学のノート一冊の日記の重さは、掌の上にのせてみると、やはり幸福の重さでした。（猟銃・53）〈発見的な判断〉
- (4) 病菌は足のひび割れから侵入したということであった。薄氷の中の道を藤岡まで薬とりにかよっているうちに、破傷風菌におかされたのだ。それはまた、堤内が水につかっているかぎり、そして、堤内に残留しているかぎり、どの子どものうえにも、明日にもみまいかねない運命である。（辛酸・197）〈必然の判断〉
- (5) 黎元は、時計に目をやり、ベッドの後方にそなえつけているテレビのスイッチを入れた。中央電視台（テレビ局）が午後七時から流すニュースは、高級幹部には見のがせない重要な情報であった。（大地の子・二・131）〈理由〉
- (6) しびれるような荒涼たる感情が、私の心を占領していた。それは一部は私の肉体の疲れの、一部は今通ってきた大きな草原の、孤独の効果らしかった。（野火・24）〈感情の源泉〉
- (7) この田舎にも朝夕くばられてくる新聞紙の報道は、私のもっとも欲しないこと、つまり戦争をさせようとしているらしい。現代の戦争をあやつる少数の紳士諸君は、それが利益なのだから別として、ふたたび彼らにだまされたいらしい人たちを、私は理解できない。おそらく彼らは私が比島の山中であったような目にあうほかはあるまい。そのとき、彼らは思い知るであろう。戦争を知らない人間は、半分子どもである。（野火・165）〈判断の根拠〉
- (8) 自分の将来を突きつけられたようにさえ感じるのであった。男のひとり暮らしよりも、働いて養わねばならぬ寡婦の方にこの弱点が考えられるのは、女の力の弱さや、女に辛い社会制度の欠陥なのである。（くれない・92）〈思考の内容〉
- (9) ふたたび、作業開始の笛になった。今度は一人槌にかわった。相棒のいない一人槌は、勝手ができるように見えるが、三人一組のタコより苦しかった。自分に課せられた広い面積の土を一人で何時間もたたきつづけることは、気が狂いそうなほど単純で、労力のいる作業であった。（大地の子・一・221）〈具体化・精密化・いいかえ〉
- (10) 稲村は、にっこりと頭を下げた。“よろこんでもらえる話”というのは、上海の宝華製鉄の工事再開であることは、あらかじめ知らされていた。鄧平化との会談は、いわば、そのお墨つきをいただくための儀式であった。（大地の子・三・338）〈意義づけ〉

佐藤は、《質・特性》を表現する名詞述語文がつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプは、述語に「のだ」をとまなう文の場合とはかなりの部分で共通しながら、独自の性格、独自の領域をもち、異なる体系を作っているとしている。以下、このことを具体的に説明する。

まず、名詞述語文による《説明的なむすびつき》では、《つけたし的な説明》よりは《ひきだし的な説明》のほうが中心的な位置を占めている。

次に、奥田（1990）にあって、《質・特性表現》の名詞述語文にないむすびつきのタイプ

がある。それは、「《説明の文》に《原因》としての、あるいは《結果》としての出来事をさしだす《説明的なむすびつき》と、し手を動作へと動機づける具体的な目標をさしだすところの、《動機》による《説明的なむすびつき》」(佐藤 2001a: 108)であり、これは文の対象的な内容によると指摘されている。つまり、「《結果》《原因》《具体的な目標としての動機》としてはたらくのは、基本的には、その対象的な内容が《出来事》からなる文」であって、「《質・特性表現》の名詞述語文は、このようなむすびつきを原則としてつukれない」からである。代わりに、名詞述語文による《説明》においては、〈一般化の判断〉〈本質的な特徴づけ〉〈評価的な判断〉としての《説明》が中心的な位置を占めているという。

そして、名詞述語文は、「のだ」をともしなわしないはだかのかたちでも、《説明》としてはたらくことができるとする。それは、「物や出来事の本質をあばきだす」という《説明》の基本的な機能は、《質》をさしだすという名詞述語文の典型的な意味とは、重なるためであるとしている。大変説得的な説明である。

ただし、《質》をさしだす名詞述語文は「のだ」をともしなわしないはだかのかたちでも《説明》としてはたらくことができるとすれば、そうした文では常に「のだ」はつけてもつけなくてもいいということになるが、実際はどうなのであろうか。さらに、《説明の文》と《説明されの文》の位置関係も、常に自由とはいえないと思われる。そこで、本節の記述においては、《説明的なむすびつき》のタイプ、「のだ」の必須性、《説明の文》と《説明されの文》の位置関係の相関関係に注意したい。

3.3 「形容詞+人だ」による《説明的なむすびつき》のタイプ

「形容詞+人だ」という表現手段による人の特徴づけにおいては、述語の位置に「人だ」と質規定しておいたうえで、さらに形容詞で《特性》をさしだすというかたちで、「形容詞+人だ」全体で主語にすえられる人の《特性》を表現する。情報構造の観点から見れば、形容詞が文の焦点となっており、「人だ」は情報構造上は無意味である。とはいえ、「人だ」を述語にしている以上、《本質的な特徴づけ》という名詞述語文の基本的な意味は拭いがたい。そのため、このタイプの文は、テキストにおいては基本的に《説明》としてはたらいっており、佐藤(2001a)の記述と共通するところが多いのである。

あらかじめ結論を示すなら、「形容詞+人だ」がつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプは、次の表3のようになる。そのうち、《つけたし的な説明》より《ひきだし的な説明》のほうがより多く使用されている。そして、《ひきだし的な説明》においては、〈一般化の判断〉〈評価的な判断〉〈発見的な判断〉、《つけたし的な説明》においては、〈本質的な特徴づけ〉〈理由〉〈判断の根拠〉がかなり多く使われ、このタイプの文による《説明》の中心的な位置を占める。

表3 「形容詞+人だ」がつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプ

ひきだし的な説明	つけたし的な説明
(1) 〈一般化の判断〉	(5) 〈本質的な特徴づけ〉
(2) 〈評価的な判断〉	(6) 〈理由〉
(3) 〈発見的な判断〉	(7) 〈判断の根拠〉
(4) 〈必然の判断〉	(8) 〈感情の源泉〉
	(9) 〈具体化・精密化・いいかえ〉
	(10) 〈思考の内容〉

また、このタイプの文による《説明》において、もっとも典型的なむすびつきのタイプとしては、〈一般化の判断〉、〈本質的な特徴づけ〉、〈評価的な判断〉が挙げられるが、この三つのタイプの扱い方について、次の2点を指摘しておかなければならない。まず、佐藤(2001a)では、〈一般化の判断〉と〈本質的な特徴づけ〉を区別していないのに対して、表3では、(1)〈一般化の判断〉と(5)〈本質的な特徴づけ〉を《ひきだし的な説明》と《つけたし的な説明》で区別している。両者のこのような違いは、「のだ」の必須性にも反映していることからわかる。一方、(1)〈一般化の判断〉と(2)〈評価的な判断〉を区別しているが、このタイプの文は形容詞をとまなっていることもあって多少なりとも評価的な意味合いを含んでいるため、実際には両者を厳密に区別することが難しいので、連続しているものと扱っておくことにする。

「のだ」は《説明の文》であることを明示するので、《説明》としてはたらいっている限り、「形容詞+人なのだ」のように「のだ」をとまなうことができるはずであるが、実際には、「のだ」をとまなわずに、はだかのかたちで用いられているものが多い。一方で、「のだ」をとまなわなければ、《説明》としてはたらくことができなくなる場合もある。また、《説明の文》と《説明されの文》との位置関係も、まったく自由であるわけではない。「のだ」の必須性、位置関係、むすびつきのタイプの相関性を明らかにする必要があるのである。

そこで、以下の記述では、《説明的なむすびつき》のタイプについて、「のだ」の必須性、《説明されの文》と《説明の文》の位置関係を念頭に置きながら、〈一般化の判断〉〈本質的な特徴づけ〉〈評価的な判断〉が主要なタイプであることをおさえたうえで、「のだ」をとまなうものにとまなわないものをあわせて、《説明的なむすびつき》のタイプごとに論じていく。

3.3.1 〈本質的な特徴づけ〉と〈一般化の判断〉

奥田(1990)では、〈本質的な特徴づけ〉と〈一般化の判断〉について、次のように規定している(下線は筆者による)。そして、論理の運び方でいえば、前者は演繹であるのに対して、後者は帰納的であると指摘している。

《説明されの文》が出来事をさしだして、「のだ」をともなう《説明の文》が、その出来事に本質的な特徴づけをあたえるがごとく、一般的な命題をさしだしているばあいがある。この一般的な命題のなかには本質的な特徴、法則的な関係が一般化されていて、《説明されの文》にさしだされる出来事は、その本質的な特徴、法則的な関係の具体的なあらわれなのである。(中略)

ところが、おなじように《説明の文》が一般的な命題をさしだしているとしても、先行する文にさしだされる出来事から、本質的な特徴、一般的な法則をひきだしている、というような、はんたいの論理のはこび方になっているばあいにくわす。先行する、いくつかの《説明されの文》のなかに出来事が記述されてあって、その出来事から一般的な、本質的な特徴、法則的な関係をひきだしているのである。(奥田 1990: 204-205)

このような論理の運び方の違いは、「形容詞+人だ」による《説明の文》にも見られる。このタイプの文に表される人の《特性》は、先行する《説明されの文》にさしだされる具体的な《出来事》に対して、その奥に隠れている本質的な特徴をつけたすのであれば、〈本質的な特徴づけ〉になるが、先行する《説明されの文》に描かれる具体的な《出来事》から新たな判断をひきだすのであれば、〈一般化の判断〉にあたる。そして、このタイプの文による〈本質的な特徴づけ〉は「のだ」が必須であるのに対して、〈一般化の判断〉は「のだ」をともなわなくてもよいのである。次の二つの例を比較してみよう。

まず、例1では、先行する文に「それまで黙っていた」、「英夫が初めて話した」と「英夫」の具体的な振る舞いがさしだされ、後続する文にこのような振る舞いを見せる原因として、「無口な人なのだ」と「英夫」の〈本質的な特徴づけ〉をつけたすことで説明している。ここでは、「のだ」をとりはずすと、《説明》としてはたらかなくなるのである。そのため、「形容詞+人だ」というタイプの文は、〈本質的な特徴づけ〉としてはたらくには、「のだ」が必須であると考えられる。

また、例2では、安原さんの具体的な発言及びそこから見出された「簡単、明瞭」という話し方の特徴が先行する文に描かれ、それにもとづき一般化の手続きを通して、「賢い人なんだ」と新たな判断をひきだしている。この例では、「のだ」によって《説明》であることを明示しているが、「賢い人だ」に言い換えても、《説明》としてはたらくことには変わりはないのである。

- 1) 「聡子さんは、軽井沢の地理にも詳しくてらっしゃるのよ。お母さま、今日、びっくりしてしまいましたわ」
「そんな。昔、毎年、来ていたものですから、それで」
「ねえ、詳しいわよね、英夫」
「うん。たいしたものだと思うよ。僕やお父さんより、よっぽど、細い道、知っているも

の」

それまで黙っていた英夫さんが、初めて話した。無口な人なのだ。開成高校から東大の理学部。ル・キャステルやビブロスに来ていた麻布の遊び人とは大違いだ。(昔みたい)

- 2) ナルもちょっと目元をなごませる。

「それでは、代表して安原さんからお聞きします。事件の詳しい状況は？」

「新聞でご存知かもしれませんが、事件が起こったのは十二月の十八日です。月曜日、二時間目の授業中でした」

簡単、明瞭。安原さんって、賢い人なんだ。(悪霊はひとりぼっち)

このタイプの文による〈本質的な特徴づけ〉という《説明》において「のだ」が必須であることは次の例から一層明らかになるであろう。例 3 では、先行する文に「大川さん」の「妙な習慣」が述べられ、後続する文にそれを根拠にして「小心で用心深い人なのだろう」とおしはかりを通して、「大川さん」の〈本質的な特徴づけ〉をつけたしている。「小心で用心深い人だろう」に言い換えたら、根拠とおしはかりの判断のむすびつきのみが成立していて、《説明》のむすびつきが壊れてしまうのである。

- 3) 大川さんは少量の酒で気持よく酔う人だった。しかし寝る前に催眠薬をのむので四五十分もむうちに大イビキで眠りこんでしまう。この日もそうだった。この人は変った人で、
「お前のようなまずい顔のメクラでも酔ってアンマをとるうちにはとかく変な心も起きやすいものだから、その壁にかかった鬼女の面をかぶってもんでもらうことにしよう」
こういう妙な習慣になっていた。小心で用心深い人なのだろう。そのくせアンマは強くて、
もっときつく、もっと力いっぱい催促されるので、こういう人をもむと何人前も疲れるからアンマには苦手の客だ。(能面の秘密)

3.3.2 〈一般化の判断〉と〈評価的な判断〉

奥田 (1990: 204) では、「《説明の文》が評価的な判断を表現しているばあい、(中略)《説明されの文》が、そこから判断をひきだしてくる前提になるところの、出来事をさしだしている」と述べている。佐藤 (2001a) では、〈一般化の判断〉と〈評価的な判断〉について、「《一般化の判断》は多少なり評価をとまなうことがおおい」と指摘し、これを〈一般的な評価的な判断〉と呼んでいると同時に、「名詞述語そのものが評価をふみこんでいる」場合¹⁰、または「名詞述語をかざる連体修飾語が評価的な意味をになっている」¹¹場合、〈一般化

¹⁰ 「頭陀袋をとると、そのまま原田の家を出ていった。財産や身分だけではなく、夫婦の愛情さえも、正造にはよけいなものであり、まわり道であった。」(辛酸・110))

¹¹ まだ製鉄所の各設備ごとの技術交渉、価格交渉が終了していないにもかかわらず、なぜか一挙に総額の値決め交渉が上海で行われることは、計画司の中でも一部の人間しか知らされていない。一心の上海行きは、その交渉の間、上からの質問に備えて、何事も即答するための重要な出張であった。(大地の子・二・342) (佐藤 2001a: 86 による)

の判断〉から区別し、〈評価的な判断〉としてとりたてている。つまり、両者とも《ひきだしの説明》である点において共通するが、評価的な意味を含むかいないかで区別しつつ、連続的にとらえているのである。「形容詞+人だ」は、後者の場合に相当し、〈一般化の判断〉と〈評価的な判断〉との区別は実際には難しい。

〈一般化の判断〉や〈評価的な判断〉の用例を見ると、多くの場合、先行する文にさしだしている具体的な《出来事》を根拠に、後続する文に語り手（作中人物）によって〈一般的な評価的な判断〉をひきだすというしかたで《説明》している。例4では、先行する文に、慶喜が「土壇上になって尻込みする」という具体的な事実や、「将軍にはなりたくない」という態度が述べられ、登場人物の海舟は、後続する文で、それらを一般化しながら、「臆病な人なんだ」と評価している。前述したように、例4でも、「のだ」という《説明》の明示的な手段が用いられているが、「臆病な人だ」に言い換えても、《説明》としてはたらくことには変わりはない。

4) —これまで将軍代理のつもりで、あれこれやってきたのだから、土壇場になって尻ごみするというのは男らしくないねえ。

海舟は胸のなかで、慶喜を軽蔑した。そのうち越前藩の松平春嶽から説得されて、しぶしぶ徳川家の相続は承知したが、将軍にはなりたくないというのだ。

—責任回避じゃないか。臆病な人なんだな。幕府もいよいよ末期症状だ。(勝海舟)

ところが、「形容詞+人だ」の文による〈一般化の判断〉と〈評価的な判断〉は完全に一致しているとは限らない。先行する文にさしだされる《出来事》から新たな判断をひきだす際、語り手（登場人物）のおしはかりをともなっている場合、〈評価的な判断〉にはならず、〈一般化の判断〉という《説明》になる。例えば、例5では、先行する文に「辰巳コーチ」のアドバイスとしての発言や話し方の特徴が述べられ、後続する文に「真っ直ぐな人なんだ」とおしはかりのなかで、「辰巳コーチ」を特徴づけている。ここでは、「形容詞+人だ」といういいきりの形で確信的な判断が表されているが、この判断はやはり真か偽かをめぐって行われているのである。

5) 「キミには、気の毒だけど、アイツのことは、忘れるんだなアイツ、徳永は、もう随分前から五土風サンと付き合ってたサ。五十嵐サンなんか、自分が年上だからって遠慮してる部分も大分あるみたいで、見ていて、こっちの方がツラくなっちゃうくらいに」

「あ…」

何だか、五十嵐サンに、悪いことしちゃったのかな、わたし。ひとりで浮かれちゃって、ホントに、バカみたい。

「ショックだとは思うけど」

辰巳コーチは、ストレート過ぎるくらいに、真っ直にわたしを見つめて、淡々と話を続け

る。

「ホント、オレが、もっと早くクギを刺しておけばよかったとは思うけど、…まあ、ひとつ利口になったと思って、ガマンしてくれよな」

「…はい」

こんなにたくさん、辰巳コーチがしゃべったのなんて、初めて見たような気がする。しゃべったって言っても、相変わらず、やさしさのカケラもないような冷たい口調は変わらないけど。でも、悪い人じゃ、ない、よね。すごく、真っ直な人なんだね、きっと。(大人の恋にあこがれて)

他方では、「形容詞+人だ」の文にさしだされる判断には、真偽判断を放棄して、もっぱら語り手(登場人物)の立場から行われる評価を表す場合がある。もっとも典型的なのは、「いい人だ」によって特徴づける場合である。例えば、次の例6では、先行する文に描かれる相手の行動の特徴に対して、後続する文に「いい人なのかもしれない」だと語り手の私の立場から婉曲的に評価づけているのである。ここでは、「いい人かもしれない」に言い換えても、《説明》に支障がないと考える。

- 6) 「重ねてお手数をかけて申し訳ありませんが、今、読んでいただいた〈作者の言葉〉をこれから取りに伺ってもかまいませんか？もちろん、コピーがいただければいいんですけど」

それも面倒だと思ったからか、親切心からか、多賀は私の家にファックスで送信しておくと言ってくれた。口はよくないが、さつきから行動で期待以上に応えてくれる。いい人なのかもしれない。

「ファックスの番号をどうぞ」

番号を告げ、長電話が終わった。(海のある奈良に死す)

以上のように、「形容詞+人だ」による〈一般化の判断〉と〈評価的な判断〉は、判断をひきだす過程において、おしはかりをともなっているかどうかで区別されつつ、連続しているのである。それは、「形容詞+人だ」の文にさしだされる判断は、たいてい語り手(作中人物)個人の立場から行われるものであり、その判断は判断主体の私にとって真であれば真になるので、実際には真か偽かを問わないからである。したがって、このタイプの文による〈一般化の判断〉と〈評価的な判断〉が区別できないことが多いのも当然のことである。

さらに、次の例7のように、〈一般的な評価的な判断〉が先行する文にさしだされ、後続する文にこのような判断を導いた具体的な出来事が描かれている場合がある。

- 7) 思えば夫は、四郎は、不憫な人だ。このあたしと一緒にあったばかりに、お父様が亡く

なつてからは少しも重要視されず、同じ養子の徹吉からは面罵され、不遇で楡病院の片隅に追いやられ、そのためいつも愚痴たらたらで、この桃子の髪まで引っぱり……それも無理からぬことではあった。当然のことであつた。なんと気の毒な不憫なひと……。 (楡家の人びと)

以下では、《ひきだしの説明》から、《つけたしの説明》へ、表3で示している各タイプを見ていく。

3.3.3 〈発見的な判断〉

奥田(1990: 201)では、〈発見的な判断〉とは、「対象の認知から、それを手がかりにして、なんらかの、未知の事実の発見へとむかう。(中略)《説明の文》が《判断》を表現していて、《説明されの文》に確認されている物や物の状態がその判断の成立の根拠をつとめる、ということになる」と述べている。ここでは、大事なものは「対象の認知」から始まるということである。次の例8、9はこの規定にもっともふさわしい例である。

例8では、先行する最初の文に観察した「奥さん」の目つきが描かれ、続いてその目つきの特徴を具体化してさしだしてから、それらを手がかりに、「奥さん」の運勢をおしはかっている。同様に、例9では、先行する文に現場で確認した「看護婦」の表情をさしだし、後続する文に「おもしろい人なのである」という〈発見的な判断〉をひきだしている。ここでも、「のだ」をとりはずして、「きっと不幸な人だ」「なかなかおもしろい人だ」とすることも可能である。

- 8) 自分は立つて、取り敢えず何か適当な薬をと思ひ、近くの薬屋にはいつて、そこの奥さんと顔を見合せ、瞬間、奥さんは、フラッシュを浴びたみたいに首をあげ眼を見はり、棒立ちになりました。

しかし、その見はつた眼には、驚愕の色も嫌悪の色も無く、ほとんど救いを求めるような、慕うような色があらわれているのでした。

ああ、このひとも、きっと不幸な人なのだ、不幸な人は、ひとの不幸にも敏感なものなのだから、と思つた時、ふと、その奥さんが松葉杖をついて危かしく立っているのに気がつきました。(人間失格)

- 9) 「どこか具合悪いの？」

何ともタイミングが悪い。敦子は、がっかりした様子を、表情に出さないようにして、「風邪気味なんです」と、言つた。

「課長さんは飲みすぎ？」

「おいおい、はっきり言わないでくれよ」

と、苦笑する。

仕方ない。これ以上は話してられない、と敦子は判断して、受付の看護婦に、

「お邪魔して、ごめんなさい」

と、声をかけた。

「いいえ、お大事に」

看護婦は、敦子にちょっとウインクして見せた。三十代半ばの、かなりベテランという感じ。なかなか面白い人なのである。(人形たちの椅子)

また、次の例 10、11 では、先行する文に現場における知覚した現象を述べて、後続する文にそれを根拠にひきだした〈発見的な判断〉をさしだす点においては、典型的な〈発見的な判断〉の《説明》とみなされる。そして、この場合には、「のだ」をとりはずすことができない。過去形であるため、「のだ」がなければ、その場で判断するという意味にならないからである。

10) 明治十年の二月に永野信夫は東京の本郷で生まれた。

「お前はほんとうに顔かたちばかりか、気性までおかあさんにそっくりですよ」

祖母のトセがこういう時はきげんの悪い時である。

亡き母に似ているということは、決してほめていう言葉ではないことを、信夫は子供心にも知っていた。

(おかあさまって、どんな人だったのだろう?)

母は信夫を生んだ二時間あとに死んだと聞かされている。

信夫は今、鏡にむかってつくづくと自分の顔をみつめていた。

形のよい円らな目、通った鼻筋、きりっとしまった厚くも薄くもない唇。

(おかあさまは、きれいな人だったんだなあ)

十歳の信夫は、その濃い眉に走る自分の利かん気な表情には気がつかない。(塩狩峠)

11) えり裏のすっかり変色した白い布に、なにか文字が書いてあるのが見てとれた。ライトの明かりでは文字は読めない。

「ここじゃだめだ。どっか明るいところに持っていってみよう」

建物の外側の、外に面した部屋にそれを持っていった。近くの部屋の洗面台で軽く名札の部分洗う。変色した布に墨で書いたらしい文字がかるうじて読み取れた。

『美山慈善病院付属保護施設』

「先々代が建てたつー、病院のことかな」

「だろうね」

先々代さんは慈善事業にも手をつくした偉い人だったんだ。(悪霊になりたくない!)

さらに、現場における認知にもとづいて〈発見的な判断〉をひきだすしかた以外、例 12 のように、「再発見」というしかたで行われる場合もある。この例では、「真沙子」は、姉の多恵子の遊び着を発見したときの戸惑いから、想像のなかでその原因を確かめるうちに、

「多恵子は生来どんな人だ」ということを再び発見したのである。ここにおいても、「だったのだ」という明示的な手段が用いられている。

12) あの設備の完備した高層マンションの中で、姉はどんなにか孤独だったのだと、真沙子は今さらのように胸を締めつけられた。

わずかでもそれを紛らすために、彼女はスカッシュクラブへ通いはじめた。土屋と親しくなり、いっそ遊んでやろうといった自棄的な気持も生まれた。それが彼に誘われるまま旅館までついていくという行動をとらせたのであろう。

しかし、結局唇も許さずに逃げ帰ったらしい。それを思うと、真沙子はいつも涙が滲んだ。多恵子の持物の中に派手な遊び着を発見して戸惑っていた心が、ようやくまた本来の姉を見出したような気がした。多恵子はやはり生来おとなしい、内向的な人だったのだ。(死刑台のロープウェイ)

3.3.4 〈必然の判断〉

奥田（1990: 203）では、〈必然の判断〉について、「現実存在する状況から、そうすることの必要、必然を判断する」と規定しており、「しなければならぬのだ」ともなう文を挙げている。「形容詞＋人だ」というタイプの文においても、「～人でなければならぬ」という形式をもつ文は、まさにこれにあたるものであると考えられる。例えば、例 13 では、先行する文にさしだされた事態を根拠にして、「牟田口中将」は「異常な人でなければならぬ」という必然の判断を導いている。ただし、この種の《説明的なむすびつき》は、実際の使用においては、ほとんど見つからなかった。この例には、「のだ」がないように、〈必然の判断〉というタイプの説明には「のだ」は必須ではない。

13) 先の柳田中将と合せて、三人の師団長が解任されたこと、一個師団の独断撤退が行なわれたこと、いずれも、世界戦史に類例のない異常な事態であった。その直接の原因を作った牟田口中将もまた、異常な人でなければならぬ。インパール作戦は、まれに見る異常な作戦となった。(インパール)

3.3.5 〈理由〉

ここからは、つけたし的な説明のタイプを取り上げる。奥田（1990: 185）では、「《理由》というのは、なんらかの動作なり状態なり態度なりをし手にとらせる、し手の論理である」と規定している。人間がある他人に対して何らかの行動や態度をとるとき、常にその人物はどんな人かが考慮される。とすれば、語り手（作中人物）は、自分の行動や態度を条件づける〈理由〉として、その人物の《特性》が「形容詞＋人だ」の文によってさしだされる。このとき、〈理由〉としてはたらくその人物の《特性》は、すでに語り手（作中人物）の《知識》として存在していなければならない。

例えば、例 14 では、語り手の私は、「大事故が起こってほしい」という態度を先行する文にさしだし、後続する文にそれを条件づけるところの〈理由〉として、「上司の安藤は、口やかましい人なのだ」とつけたしている。この例では「のだ」は必須であり、「上司の安藤は、口やかましい人だ」に言い換えると、先行する文に対する〈理由〉としてののはたらかしは読みと取にくくなるのではないかと考えられる。

14) ここにひとりの青年がいて、名は五太郎。頭はとくに悪くもよくもないという、普通の人間。ある研究所につとめている。ある朝、いささか寝坊をした。ねむそうに片目をあけ、時計を見ながら言う。

「やれやれ、つい、ねすごしてしまった。きょうは、遅刻になりそうだ。先生、怒るかもしれない……」

ねぼけ声で、テレビをつける。交通機関のストか、大事故のニュースでもやらないかな。遅刻の、いい口実になるのだが。上司の安藤博士は、口やかましい人なのだ。(ちぐはぐな部品)

また、〈理由〉としてはたらく判断が先行する文にさしだされる場合がある。例えば、例 15 では、後続する文にさしだされた語り手の私の態度に対して、先行する文に祖母の《特性》が〈理由〉としてさしだしている。ここでは、「のだ」というかたちで《説明》を明示的に示しているが、「のだ」をともしなわなくても《説明》としてはたらくことに支障はない。実際、同じタイプのむすびつきの例である例 16 には「のだ」がない。後続する文にさしだされる「さとり」の行動の〈理由〉として先行する文にさしだしているのは、「お婆さんは感じがいい人だ」という判断である。〈理由〉としてはたらく「形容詞+人だ」というタイプの文における「のだ」の必須性には、《説明の文》と《説明されの文》の位置関係が関与しているといえる。

15) 「お婆あちゃん、おなか空いたんじゃない？」

声色を変えて、チーママは祖母に話しかけた。

「ご飯沢山残したんだってねえ。駄目ですよ、ちゃんと食べなきゃ。食べないとお通じも悪いんですからねえ」

彼女は赤ん坊にするように祖母の顔を覗き込んだ。私は思わず立ち上がる。

「売店でパンでも買って来ます。おなか空いたままだと、夜中に起きて騒ぐでしょ」

チーママの返事も聞かず、私はすたすたと病室を出た。

何だかすごく腹が立った。祖母は赤ん坊ではないのだ。私の何倍も生きていて、私の何倍も美しい畏れ多い人なのだ。それを何なの、あの態度は。人の大事なお婆あちゃんをぼけ老人扱いしないでほしい。(きっと君は泣く)

16) 例えば、みやこしの食料品売り場には十台のレジスターがある。さとりがいつも買い物に

行く時間、二番のレジにいるパートのおばさんは感じがいい人だ。だからさとは、なるべくいつも二番のレジで精算するようにしている。(群青の夜の羽毛)

3.3.6 〈判断の根拠〉

奥田(1990:191)では、〈判断の根拠〉とは、「《説明されの文》が判断、意見、評価、態度などをいいあらわしていて、《説明の文》がそれらの成立する根拠をさしだしている」という説明のしかたであると述べている。「形容詞+人だ」という文が〈判断の根拠〉としてはたらく場合、判断の主体にとって、その人がどんな人かということはすでに証明されている事実のごとく、《前提知識》として定着していなくてはならない。

次の例17～19では、先行する文にそれぞれ、「杉岡」「姉」「志水」がとるであろう行動や態度、反応などが想像のなかでおしはかりの判断としてさしだされている。そして、後続する文には、このおしはかりの判断の根拠として、「杉岡」「姉」「志水」の《本質的な特性》が「形容詞+人なのだ」の文によってつけたされている。この場合も、「のだ」という明示的な手段が欠かせない。

17) 「色々迷惑かけちゃって——」

と朋子が言いかけると、杉岡は、

「いや、そんなこと、君が謝る必要はない。君は何も悪いことなんかしちゃいないんだから」

と早口に言って、また口をつぐんだ。

こっちから言い出そう、と朋子は思った。杉岡からは言い辛いに違いない。いい人なのだ。

(かけぬける愛)

18) 一人になって、改めて自分の妙な状況に苦笑した。

まるでこそこそと不倫でもしているよう。こんなとき、姉なら相手の女をはり倒しているだろう。いや、男が自分から戻って来るのでなければ、

「そんな男、くれてやるわよ」

と言うに違いない。

誇り高い人なのだ。

由利がこうして、あまりショックも受けずにいられたのは、姉とは逆に、自分に相手を縛りつけておくのが可哀そうだから、なのである。(インペリアル)

19) それに……めぐみの心の中にはもう一つ賭けていることがあった。(中略)

ただ……志水とは二人だけで会いたかった。青木先生を交えたら、会話のほとんどを青木先生と志水に占められてしまうだろう。(中略)

きっとそうなる。

それがいやだった。

——あんなに大切な時間を共有したのだから——

志水にとってはそれほど大切な時間ではなかつただろうけれど、せめて二人だけの送別会くらいやらなければ、めぐみはやりきれない。

その気持ちを志水にわかってほしかった。青木先生を呼ぶのが自然でありながら、あえて呼ばなかったのはなぜか……ちょっと考えてみれば志水にもわかるはずだ。なにしろあんなに聡明な人なのだから。(空想列車 下)

また、〈判断の根拠〉としてはたらく《説明の文》は先行する文にさしだされる場合がある。例えば、例 20 では、後続する文にさしだされる「嘉介親分のおかみさんが洗い物に行く」と言った原因をおしはかる判断に対して、先行する文に「嘉介親分のおかみさん」の《特性》が〈判断の根拠〉としてさしだされている。この例が示すように、〈判断の根拠〉としてはたらく「形容詞+人だ」の文が《説明されの文》に先行する場合、「のだ」をとともなわなくてもよいのである。

- 20) 舷洲先生の奥様が亡くなって以来、井上家には、女といったら琴江さましかいなかった。するとあれは奉公人の誰かだろう。そういえば、気の強そうな中年の女中がいたはずだ。やはり、ほうの様子を見に来たのだろうか。それにしてもひっそりとしている。他聞をばかる話か。宇佐は考えた。嘉介親分のおかみさんは察しのいい人だ。洗い物だというのも、座を外すためかもしれない。勝手口のすぐ外に張りついていて、宇佐は聞き耳を立てた。女の声がぼそぼそとしゃべっているが、中身までは聞き取れない。ほうは黙って聞いているだけのようだ。(孤宿の人)

3.3.7 〈感情の源泉〉

奥田(1990:190)では、「《説明されの文》が感情をさしだしていて、《説明の文》が、その感情をよびおこすところの出来事をさしだしている」という説明のしかたを〈感情の源泉〉としている。つまり、「のだ」における〈感情の源泉〉は、《出来事》なのである。しかし、名詞述語文による〈感情の源泉〉は、「《出来事》ではなく、物や出来事の《質》や《特性》であり、それらに対する《評価》である。その条件づけは直接的ではなく、その《質》《特性》《評価》をとらえる、感情の主体の思考を媒介にしている」と佐藤(2001a:97)が指摘している。

ここでは、「形容詞+人だ」というタイプの文によって表される《特性》は、登場人物の感情をよびおこすところの〈源泉〉としてさしだされている。例えば、次の例 21 では、先行する文に「胸が熱くなって来る」と、登場人物の「知美」の感情が描かれ、後続する文でこの感情の発生を条件づけるところの〈源泉〉となる「夫の紘一」の《特性》、「立派な人なのだ」と再確認のなかで、さしだされている。そして、「のだ」をとりはずすと、《説明》としての意味が読み取りにくくなるように、この種の《説明的なむすびつき》において、「のだ」が必須であると考えられる。ただし、「形容詞+人だ」による〈感情の源泉〉は、実際

の使用において、非常に少ないのである。そして、〈感情の源泉〉としてはたらく「形容詞＋人だ」の文は、《説明されの文》に先行する場合もありうるはずであるが、用例が少ないこともあるだろうし、今回の調査では見つからなかった。

21) 紘一は、「ちょっとトイレに行って来る」

と、席を立った。

一人になると、知美は、また胸が熱くなって来るのが分った。

あの人は、やっぱり立派な人なんだわ！私の旦那様ですものね！

言いたくないというのは、あんまりたいした仕事ではないのだろう。

〈でも、いいじゃないの〉

どうせ、二人とも若いんだ。どんなにだって変って行ける。(忘れられた花嫁)

3.3.8 〈具体化・精密化・いいかえ〉

奥田(1990:192)では、このタイプの《説明》について、「一般的な命題を、《説明の文》が具体的に、くわしくのべる、というような、説明の仕方」であると述べている。筆者の調査によると、「形容詞＋人だ」の文には、〈いいかえ〉として用いられているものが少しある。このタイプでは、「要するに、というのは、ということは」などの表現によって、〈いいかえ〉であることが明示されることもある。そして、このタイプの《説明的なむすびつき》では、「のだ」は必須ではない。例えば、例22、23において、《説明の文》が「のだ」をともなっているが、「のだ」をとりはずしてもよい。また、例24になると、「のだ」をともなわなないはだかのかたちでも、〈いいかえ〉としてはたらいっているのである。なお、このタイプの説明の文は、必ず《説明されの文》に後続する。

22) 家庭内暴力は、自分を信じてほしい、見守ってほしい、理解してほしいという気持ちのあらわれである。だから、必ず自分が頼りにできる人のところに向かって発せられる。あてにならない人のところには向かわない。自分の気持ちをわかってほしい、見捨てないでくれという叫びが、家庭内暴力にほかならない。

言葉は「クソババア」とか「バカヤロー、センコウ」でも、それこそ自分を見捨てないでくれというメッセージであり、その人は彼らにとって大切な人なのである。ほんとは「お母さん」とか「先生」と呼びたいんだけど、それが言えないから、そういう言葉を使っているだけなのである。(引きこもりから旅立つ10のステップ)

23) 朝食をひとりで食べながら、その郵便を一つ一つ見る。ほとんど毎日のようにそのなかに未知の人からの手紙がある。私の書いたものを読んで感想を書いてくださった手紙はやはり嬉しい。

だがそのなかに時折、妙な手紙もまじっている。(中略)たとえば、

「兄上さま」

冒頭から、そんな書きだしの便箋の文字を読むと、弟や妹のない私はびっくりしてしまう。
びっくりはまだ早い。

「今回、兄上様の御厚意で、お妹さまの安達瞳子さまと私の婚約が成立し、嬉しく、幸福に思っております」

これは一体、何のことだ。

兄上さまというのは私のことらしい。だが安達瞳子さんと私とは兄妹でもなければ、こういう相談をうける親類でもない。

よみ進むうちに、どうやらこの手紙の差し出し人は、テレビで私と安達瞳子さんとの対談をみているうちに二人が兄妹と信じこみ、その上、彼自身と安達瞳子さんが婚約することを兄である私が許可したという幻想を抱いた人だとわかってきた。要するに頭のおかしな人なのである。(ぐうたら人間学)

- 24) 羅漢とは阿羅漢の略称だ。アラカンといって、かつての時代劇スターだった「嵐寛寿郎」を想起できる人は、だいたい浅見の年代どまりだろう。阿羅漢は梵語で、仏教の修行の最高段階、またはその段階に達した人のことである。ということは偉い人だ。(藍色回廊殺人事件)

3.3.9 〈思考の内容〉

奥田(1990:193)では、〈思考の内容〉というタイプの《説明的なむすびつき》について、「《説明されの文》において、「思う」とか「考える」というような思考活動をさしだす動詞が述語になっているばあい、「のだ」をともなう《説明の文》が、その思考活動の内容をさしだしている」ものであると述べている。このむすびつきにふさわしい例がなかなか見つからなかったため、これに近いものだと考えられる例を一つ挙げておく。次の例 25 では、先行する文に「思い出す」という思考活動を表現する動詞が述語になっていて、後続する文に提示されている〈思考の内容〉の一つとして、「叔母は優しく、心のきれいな人であった」とさしだされている。この種のむすびつきでは、おそらく「のだ」が必須ではないと考えてもよいのだろう。

- 25) 叔母の話が出たので思い出した。叔母は実に優しく、心のきれいな人であった。何月頃であつたろうか、ある夕方、私は叔母につれられて街に行った。四年生の時であつた。(中略)

スズランの花を模したスズラン灯に灯が点ると、打ち水にしっとりぬれた舗道に灯が映る。その灯ともし頃、叔母は長谷川という大きな衣料品店に、私をつれて行った。そして、思いがけなくセーラー服を買ってくれたのである。白地に青い襟のついた、素敵なセーラー服であった。(続泥流地帯 草のうた)

3.4 おわりに

本節では、人の《特性》を表現する「形容詞+人だ」という構成をもつ文のテキスト的機能について、小説の地の文の用例を調査し、それが《説明》としてはたらく際につくりだす《説明的なむすびつき》のタイプを、《説明されの文》と《説明の文》の位置関係や《説明》の明示的な形態論的な手段である「のだ」の必須性との関係を視野に入れながら、考察した。本節の考察によって明らかになったことを表4にまとめる。

表4 「形容詞+人だ」による《説明的なむすびつき》のタイプと「のだ」の必須性

説明的なむすびつき		《説明の文》の位置 形態論的なかたち	後続する場合		先行する場合	
			「のだ」	「だ」	「のだ」	「だ」
ひきだしの	(1)一般化の判断		○	○	○	○
	(2)評価的な判断		○	○	○	○
	(3)発見的な判断		○	○	X	X
	(4)必然の判断		○	○	X	X
つけたしの	(5)本質的な特徴づけ		○	X	○	○
	(6)理由		○	X	○	○
	(7)判断の根拠		○	X	○	○
	(8)感情の源泉		○	X	○	○
	(9)具体化・精密化・いいかえ		○	○	X	X
	(10)思考の内容		○	○	X	X

○：表せる

X：表せない

まず、「形容詞+人だ」の文が《説明の文》としてはたらくとき、それがつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプは、佐藤（2001a）の記述とさほど変わりはない。このタイプの文による《ひきだしの説明》は、語り手（作中人物）が何らかの具体的な出来事から新たに導いたその人物の《特性》をさしだすのに用いられるのに対して、《つけたしの説明》は、語り手（作中人物）が具体的な現象や動作・状態・態度、あるいは新たな判断を条件づけるところの、その人物の《特性》をつけたすのに用いられる。そして、このタイプの文による《ひきだしの説明》のほうが、《つけたしの説明》より多く現れ、前者においては、〈一般化の判断〉と〈評価的な判断〉が、後者においては、〈本質的な特徴づけ〉〈理由〉〈判断の根拠〉が中心的な位置を占めている。つまり、その人はどのような人かということは、作中人物の知識や背景的情報であることもあるが、テキストの実際の使用においては、多くの場合は、作中人物や語り手がその場で判断をひきだすのに用いられるのである。

また、「形容詞＋人だ」の文が《説明の文》になるとき、基本的に《説明されの文》に後続するが、それに先行することが可能であるかどうかでむすびつきのタイプによって差が見られる。表4に示したように、《ひきだしの説明》における〈発見的な判断〉と〈必然の判断〉、《つけたしの説明》における〈具体化・精密化・いいかえ〉と〈思考の内容〉は、必ず《説明されの文》に後続する。

さらに、「形容詞＋人だ」というタイプの文が《説明》としてはたらくとき、形態論的手段である「のだ」の使用・不使用は、《説明的なむすびつき》のタイプや《説明の文》と《説明されの文》の位置関係と相関していて、まったく自由であるというわけではない。「形容詞＋人だ」の文は、《説明されの文》に後続する場合、《ひきだしの説明》においては「のだ」が必須ではないのに対して、《つけたしの説明》においては基本的に「のだ」が必須になる。しかし、「のだ」が必須である《つけたしの説明》であっても、《説明されの文》に先行する場合、〈理由〉〈判断の根拠〉というタイプのむすびつきでは、「のだ」をとまわなくてもよいのである。なお、〈具体化・精密化・いいかえ〉と〈思考の内容〉が周辺的なむすびつきであり、「条件づけ—条件づけられ」になっていないこともあって、後続する場合にしか見られず、「のだ」の使用が自由であるといった点においては、他の《つけたしの説明》から区別される。

以上のように、「形容詞＋人だ」というタイプの文は、《ひきだしの説明》（特に〈一般化の判断〉と〈評価的な判断〉）に多く使用されていること、しかも「のだ」がなくても《説明》の機能に支障がないということから、「形容詞＋人だ」の文には、人の《本質的な特性》の確認と《ひきだしの説明》という意味・機能が重なっているといえよう。しかし一方、このタイプの文が《つけたしの説明》としてはたらくとき、《本質的な特性》という対象的な内容だけでは《説明》の機能を実現できず、「のだ」という明示的な形態論的手段が必要になるということが明らかになった。

4. 本章の結論

本章では、「彼はやさしい人だ」のような形容詞の規定語をとる名詞述語文を取り上げ、主語が人である場合、人を特徴づける重要な表現手段の一つとして、それらの意味的・機能的な特徴について、使用実態を調査したうえで、さらにこのタイプの文のテキスト的な機能について、最も多く使われている「形容詞＋人だ」を対象に、それがつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプや、《説明の文》と《説明されの文》の位置関係、「のだ」の必須性を考察した。まとめると以下の通りである。

まず、このタイプの文における形容詞と名詞述語のくみあわせは、恣意的なものではなく、法則的であることが明らかになった。また、人を特徴づけるこのタイプの文の中でも、「人だ」を述語にする文が最も広範囲の形容詞とくみあわさって、最も多く使われていることが調査からわかった。さらに、「形容詞＋人だ」のタイプの文のテキスト的機能について、

主に《ひきだしの説明》としてはたらいっている一方で、《説明されの文》に後続し、《つけたしの説明》としてはたらくには、「のだ」という明示的な形態論的な手段が必須であることが明らかになった。したがって、このタイプの文は、テキストにおいて、《本質的な特性》という意味と《ひきだしの説明》という機能の統一体として、人の特徴づけの重要な表現手段として使われているといえる。

第四章 結論

1. 本研究が明らかにしたこと

まず、名詞述語文をめぐって、本研究の問題意識がどのようなところにあったかを確認する。これには大きく二つある。

述語の意味的タイプ（あるいは文の対象的な内容）には、《運動》《状態》《特性》《質》などがあるが、その文にどのような陳述的な形態論的カテゴリーが現れうるかは、この意味的タイプによる。認識的ムードはすべてのタイプに現れるが、テンスは《特性》《質》には表れず、アスペクトは《運動》以外には現れない。名詞述語文についても、この対応関係が基本的に成り立つ。すなわち、《質》と《特性》の場合は認識的ムードのみが現れ、《状態》の場合は認識的ムードとテンスが現れる。問題は、名詞述語が「お客様がご到着だ」のように《運動》を表す場合である。日本語では、形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトは、スルーシテイルの対立によって表されるため、《運動》を表す名詞述語には、形式的にアスペクト対立が成り立たない。だが、名詞述語文であっても、《運動》を表す以上、事象と現実との関係が示されなければコミュニケーション活動に支障をきたすであろう。実際、「お客様がご到着だ」は現在パーフェクトであると、無理なく理解できる。形態論のアスペクトが欠けていても、文レベルのアスペクチュアリティは存在しているのである。その際、形態論的な手段以外の手段が動員されることが予想されるが、それはどのようなものであるか、システムとして考察することが必要になる。また、テンス対立があるとしても、それを無条件で承認せず、このシステムの中に位置づけなおすことも必要である。

次の問題意識も、単語レベルから文レベルへの視野の拡張に関連している。名詞述語は、単語レベルでは、《質》を表すのが基本であり、《特性》を表すことはそれほど多くないが、実際の言語活動においては、「彼はやさしい人だ」のような、形容詞の規定語とくみあわせる名詞述語が《特性》の表現手段として多用されている。こうした表現手段が言語活動においてどういう役割をにない、なぜ多用されているのかということはまだ明らかになっておらず、このタイプの名詞述語文について、まずは記述的研究を促進する必要があると考えた。

したがって、本研究は、典型的な名詞述語文（「太郎は学生だ」のような《質》を表すもの）を中心に進められてきた従来の名詞述語文の研究に対して、非典型的であり研究の少ない、「お客様がご到着だ」のような《運動》を表す名詞述語文や「彼はやさしい人だ」のような形容詞の規定語をとる名詞述語文を対象として、語彙的・文法的・機能的観点から考察を行った。

本研究の前半では、《運動》を表す名詞述語文が文法的な面においてどのような特徴をもつか、動詞述語文とはどのような違いがあるのかについて、モーダルな意味の観点から、意志表示的な文と認識的な文に分けて論じた。

形態論的ムードについては、名詞述語文にはそもそも認識的ムード（断定と推量の対立）しかなく、動詞述語文のような勧誘（シヨウ）や命令（シロ）といった意志表示的なムードがない。したがって、意志表示的な文におけるモーダルな意味は、もっぱら人称性という構文論的な手段によって実現し、しかも、権威者である話し手が集団やグループの行動を決定する場面における命令・勧誘・決意にしか用いられず、依頼や希求などは表せないという特徴をもつことが明らかになった。

一方、認識的な文においては、形態論的なテンス対立があるのだが、動詞述語文のようなアスペクトがない。だとすれば、継続性・完成性といったアスペクトの基本的意味やパーフェクト性・反復性といった派生的意味がどのように実現するかが問題となる。この課題に対して、本研究では、語彙的な意味との相関、ムードやテンスとの相関、情報構造との相関という観点から体系的に考察を行った。その結果、確認・記述（新情報の伝達）といったムードのもとで、かつ述語に焦点があたっている場合は、非過去形と過去形のテンス対立は、基本的に現在と過去を表し分け、未来に関しては状況語という語彙的な手段が必要になることがわかった。また、継続性・完成性・パーフェクト性のいずれかを選んで実現する運動名詞が少なくないこと、テンスの対立と統一されているのは、継続性、パーフェクト性、反復性であり、動詞述語文と同様に、継続性における動作継続と結果継続の表し分けは動作・変化という語彙的な意味によることが明らかになった。また、完成性の意味を表現する自律的な手段がなく、テンスやムード、情報構造といった条件（テンスが未来か、ムードが変容しているか、述語に焦点があたっていないか）によって間接的に実現するにすぎないことが明らかになった。このようにして、《運動》を表す名詞述語文におけるムード・テンス・アスペクト体系は、語彙的な意味との相関性、MTA 相互の相関性、情報構造との相関性が動詞述語文より強い体系であることが確認された。

次に、本研究の後半では、人の特性の中心的な表現手段である「彼はやさしい人だ」のような、形容詞の規定語をとる名詞述語文の意味的・機能的な特徴について考察した。このタイプの文は使用実態がまだ明らかでないことから、まず、BCCWJ などのコーパスを利用した大規模な用例収集を行い、かざりの形容詞とかざられの名詞の語彙的な特徴および両者のくみあわせのタイプについて調査を行った。その結果、かざられの名詞は「人」をはじめとする【主体／人間】(71.87%)に属する一般性の高いものが最も多く、かざりの形容詞は、【精神および行為】（「やさしい」など）が上位（55.55%）を占めていることがわかった。形容詞と名詞のくみあわせのタイプについては、中項目では、【精神および行為／様相】と【主体／人間】のくみあわせ（「いい人」など）、分類項目では、【精神及び行為／行為／人柄】と【人間活動の主体／人間／人間】のくみあわせ（「やさしい人」など）が最多であることを明らかにした。そのうえで、「人」「人間」や「男」「女」「男性」「女性」など、出現

頻度が上位の名詞や、「母親」「父親」「画家」「タレント」「職人」「弁護士」「刑事」「教師」など、家族関係や職業を表す名詞とくみあわせる形容詞についても調査し、結果を比較しながら、形容詞と述語名詞のくみあわせのタイプの特徴を明らかにした。

続いて、考察対象を「形容詞＋人だ」に限定して、このタイプの文のテキスト的機能について考察した。具体的にいえば、このタイプの文が《説明の文》としてはたらくときの、それがつくりだす《説明的なむすびつき》のタイプや、《説明されの文》と《説明の文》の位置関係、形態論的な手段である「のだ」の必須性について調査した。その結果、「形容詞＋人だ」は主に《ひきだしの説明》（一般化の判断／評価的な判断／発見的な判断／必然の判断）としてはたらいっているものであり、しかも「のだ」が必須ではない。それに対して、《説明されの文》に後続し、《つけたしの説明》としてはたらくときには、「のだ」という形態論的な手段が必須であることが明らかになった。したがって、このタイプの文は、テキストにおいて、《本質的な特性》という意味と、《ひきだしの説明》という機能の統一体として、人の特徴づけの重要な表現手段として使用されていると結論される。

以上のように、本研究では、名詞述語文のうち、《運動》の表現手段としての名詞述語文、《特性》の表現手段としての名詞述語文という、従来、研究が手薄であったタイプの名詞述語文に目を向け、その特徴を実証的に明らかにすることによって、名詞述語文の研究の発展に貢献した。

2. 今後の課題

名詞述語文は、《運動》《状態》《特性》《質》のすべてのタイプに使用される。本研究では、このうち、《運動》を表すものと《特性》を表すものの一部（主語が人で、形容詞の規定語をとるもの）を取り上げたことになる。

今後、《状態》を表す名詞述語文を取り上げ、その語彙的・文法的・機能的な特徴はなにか、さらに形容詞述語文や動詞述語文と共存するなかでどのような役わりをはたしているのかを問わなければならない。

また、《特性》を表す名詞述語文については、形容詞の規定語をとるものだけではなく、動詞や名詞の規定語をとるものや、規定語をとらないもの、主語が人以外のものについても考察し、《特性》の表現の体系をとらえていく必要がある。

《質》を表す名詞述語文にも問題がないわけではない。《質》と《特性》を区別しない立場もあり、時間的限定性の観点からは、《質》とはなにか、《特性》とはなにかということを問いつづけていかななければならない。

以上は、述語用法についての課題であったが、名詞には状況語や修飾語の素材になるものがあり、それらの語彙的・文法的な特徴の記述も課題となる。

鈴木（1996）は、「文法的なものとの関係をぬきにして、名詞に属する単語の語い的な意味を一般化すれば森ラ万象ということになって、そのなかに動詞や形容詞の語い的な意味もふくまれてしまう」と述べている。名詞の研究には果てがない。結局のところ、語彙論、

形態論、連語論、構文論、テキスト論のそれぞれにおいて、また相互の関連を意識しながら、バランスよく研究を進めていく必要があるだろう。

資料一覧

1. 現代日本語書き言葉均衡コーパス（国立国語研究所）
2. CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊
3. 伴一彦ホームページに公開されているシナリオ
4. 青空文庫（全文検索システム『ひまわり』用パッケージ 20150401 版公開）
5. その他の小説類

赤川次郎『赤いこうもり傘』『一日だけの殺し屋』『いつか誰かが殺される』『インペリアル』『おとなりも名探偵』『怪盗の有給休暇』『かけぬける愛』『過去から来た女』『紙細工の花嫁』『霧の夜にご用心』『禁じられた過去』『くちづけ』『黒い壁』『告別』『こちら、団地探偵局』『孤独な週末』『殺し屋志願』『殺意はさりげなく』『さよならをもう一度』『自殺行き往復切符』『死者の学園祭』『死者は空中を歩く』『死体は眠らない』『素直な狂気』『世界は破滅を待っている』『天使は神にあらず』『泥棒物語』『七番目の花嫁』『人形たちの椅子』『ひまつぶしの殺人』『昼下がりの恋人達』『フルコース夫人の冒険』『プロメテウスの乙女』『冒険入りタイム・カプセル』『滅びの庭』『本日もセンチメンタル』『招かれた女』『ミステリ博物館』『南十字星』『幽霊園遊会』『幽霊湖畔』『輪舞一恋と死のゲーム』『忘れられた花嫁』／阿川弘之『末の末っ子』／浅田次郎『壬生義士伝 下』／阿刀田高『江戸禁断らいぶらりい』『消えた男』『霧のレクイエム』『詭弁の話術』『空想列車 下』『花の凶鑑』『箱の中』『幻の舟』／有栖川有栖『海のある奈良に死す』『シャイロックの密室』『朱色の研究』『ダリの繭』／綾辻行人『十角館の殺人』『鳴風荘事件 一殺人方程式Ⅱー』／鮎川哲也『朱の絶筆』／泡坂妻夫『亜愛一郎の転倒』『亜愛一郎の逃亡』／池波正太郎『雲ながれゆく』『剣客商売』『さわらぬ女神にタタリなし』『火の国の城』『秘密田中芳樹』／池宮彰一郎『四十七人の刺客』／石川達三『武漢作戦』／石田衣良『下北サンデーズ』『電子の星 池袋ウエストゲートパーク 4』『波のうへの魔術師』／井上ひさし『青葉繁れる』／井上靖『崖』『星と祭』『私の西域紀行』／井伏鱒二『小説日本芸譚』／内田康夫『後鳥羽伝説殺人事件』『贄門島』／江戸川乱歩『孤島の鬼』／遠藤周作『協奏曲』『ぐうたら人間学』『月光のドミナ』『それ行け狐狸庵』／奥田英朗『空中ブランコ』『邪魔』／乙一『きみにしか聞こえない CALLING YOU』／小野不由美『悪霊になりたくない』『悪霊はひとりぼっち』『風の万里 黎明の空』『魔性の子』／開高健『新しい天体』／久美沙織『小説 エマ 1』『天空の花嫁』／小松左京『さよならジュピター』『日本沈没』／重松清『カカシの夏休み』『流星ワゴン』／司馬遼太郎『燃えよ剣 上下』／城山三郎『逃亡者』／高木俊朗『インパル』／高橋克彦『春信殺人事件』『前世の記憶』『だましゑ歌麿』／田中康夫『昔みたい』／田中芳樹『銀河英雄伝説』『創竜伝』／陳舜臣『秘本三国志』／筒井康隆『恐怖』『美藝公』／津村秀介『寝台急行銀河の殺意』『瀬戸内を渡る死者』／高木彬光『幽霊西へ行く』／夏樹静子『死刑台のロープウェイ』／西村京太郎『愛と悲しみの墓標』『浅草偏奇館の殺人』『雨の中に死ぬ』『一千万人誘拐計画』『越後湯沢殺人事件』『危険な殺人者』『札幌着 23 時 25 分』『祝日に殺人の列車が走る』『失踪計画』『十津川警部・怒りの追跡』『十津川警部「友への挽歌」』『十津川警部「裏切り」』『特急「有明」殺人事件』『特急しおかぜ殺人事件』『特急「白鳥」十四時間』『特急「ひだ 3 号」殺人事件』『謎と殺意の田沢湖線』『21 世紀のブルース』『北緯四三度からの死の予告』『夜が待っている』『夜の終り』『ワイドビュー南紀殺人事件』／新津きよみ『女友達』『婚約者』／畠中恵『ねこのばば』／早見裕司『メイド刑事』／半村良『およね平吉時穴道行』『石の血』

脈』『黄金伝説』『不可触領域』『平家伝説』／東川篤哉『謎解きはディナーのあとで』／東野圭吾『赤い指』『幻夜』『放課後』『名探偵の掟』『予知夢』／樋口有介『風の日にはララバイ』『彼女はたぶん魔法を使う』『旅路』『枯葉色グッドバイ』『夏の口紅』『苦い雨』『ぼくと、ぼくらの夏』／平岩弓枝『犬張子の謎』『江戸の子守唄』『お吉の茶碗』『鬼の面』『火宅の女』『狐の嫁入り』『黒い扇』『小判商人』『佐助の牡丹』『水郷から来た女』『長助の女房』『二十六夜待の殺人』『幽霊殺し』／深田祐介『炎熱商人 上下』『スチュワーデス物語』／深谷忠記『北津軽逆アリバイの死角「太宰治の旅」殺人事件』『長崎・壱岐殺人ライン』／藤沢周平『風の果て 上下』『よろずや平四郎活人剣 上下』／藤田宜永『過去を殺せ』『ダブル・スチール』『野望のラビリンス』／藤原伊織『てのひらの闇』／星新一『ごたごた気流』『ちぐはぐな部品』『明治・父・アメリカ』／松田裕子『ホテルのコンシェルジュ』／松本清張『赤い氷河期』『鬼火の町』『影の地帯』『かげろう絵図 上下』『球形の荒野 上下』『絢爛たる流離』『黒い森の記憶』『黒の回廊』『砂の器 上下』『波の塔 上下』『火と汐』『迷走地図 上下』『眼の壁』／三浦綾子『雨はあした晴れるだろう』『海嶺 上下』『孤独のとなり』『銃口』『続泥流地帯 草のうた』『続氷点』『ひつじが丘 泥流地帯』『細川ガラシャ夫人』／水上勉『木綿恋い記』／皆川博子『水底の祭り』『光源氏殺人事件』『乱世玉響』／峰隆一郎『殺人急行北の逆転 240 秒』『西鹿児島発「交換殺人」特急』／宮部みゆき『鳩笛草』『クロスファイア』『孤宿の人』『名もなき毒』／向田邦子『向田邦子シナリオ集VI 一話完結傑作選』『無名仮名人名簿』／村上春樹『1Q84』／群ようこ『無印おまじない物語』／森博嗣『キラレ×キラレ』『タカイ×タカイ』『θは遊んでくれたよ』／森村誠一『虚無の道標』『高層の死角』『人間の証明』『精神分析殺人事件』『大都会』『致死眷属』『日本アルプス殺人事件』『棟居刑事の情熱』『棟居刑事の断罪』『棟居刑事の憤怒』『野性の証明』／森瑤子『女ざかり』／山崎豊子『華麗なる一族 上下中』『大地の子』／山田智彦『銀行男たちのサバイバル』／山田正紀『火神アグニを盗め』『崑崙遊撃隊』／山村美紗『京都の祭に人が死ぬ』／山本弘『幸せをつかみたい!』『妖魔夜行 戦慄のミレニウム』／山本文緒『きっと君は泣く』『群青の夜の羽毛』『チェリーブLOSSAM』『紙婚式』／横溝正史『悪魔が来たりて笛を吹く』『悪魔の設計図』『悪霊島』『犬神家の一族』『刺青された男』『怪盗X・Y・Z』『仮面劇場』『仮面城』『仮面舞踏会』『金田一耕助の冒険』『女王蜂』『扉の影の女』『血蝙蝠』『人形佐七捕物帳』『風船魔人・黄金魔人』『本陣殺人事件』『迷路荘の惨劇』『幽霊男』／吉川英治『新書太閤記』／吉村達也『踊る少女』『「ナイルの甲虫」殺人事件』『南太平洋殺人事件』／渡辺淳一『メトレス愛人』

参考文献

- 荒正子 (1989) 「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学 3』むぎ書房、pp. 147-161
- 井上優、金河守 (1998) 「名詞述語の動詞性・形容詞性に関する覚書—日本語と韓国語の場合—」
『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書Ⅱ』筑波大学、pp. 455-470
- 岩男考哲 (2008) 「叙述類型研究史 (国内編)」『叙述類型論』くろしお出版、pp. 163-191
- 奥田靖雄 (1967) 「語彙的な意味のありかた」『教育国語』8、pp. 6-16
- 奥田靖雄 (1978a) 「アスペクトをめぐって (上)」『教育国語』53、pp. 33-44
- 奥田靖雄 (1978b) 「アスペクトをめぐって (下)」『教育国語』54、pp. 14-27
- 奥田靖雄 (1979) 「意味と機能」『教育国語』58、pp. 13-19
- 奥田靖雄 (1984a) 『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 奥田靖雄 (1984b) 「おしはかり (一)」『日本語学』3-12、pp. 54-69
- 奥田靖雄 (1985a) 「おしはかり (二)」『日本語学』4-2、pp. 48-62
- 奥田靖雄 (1985b) 「文のさまざま (1) 一文のこと—」『教育国語』80、pp. 41-49
- 奥田靖雄 (1986) 「文のさまざま (2) 一まちのぞみ文 (上) —」『教育国語』85、pp. 21-32
- 奥田靖雄 (1988a) 「文の意味的なタイプ—その対象的な内容とモーダルな意味とのからみあい—」
『教育国語』92、pp. 14-28
- 奥田靖雄 (1988b) 「述語の意味的なタイプ」(琉球大学集中講義プリント)『奥田靖雄著作集 02
言語学編 (1)』むぎ書房 2015 所収、pp. 106-118
- 奥田靖雄 (1990) 「説明 (その 1) —のだ、のである、のです—」『ことばの科学 4』むぎ書房、
pp. 173-216
- 奥田靖雄 (1992) 「説明 (その 2) —わけだ—」『ことばの科学 5』むぎ書房、pp. 187-219
- 奥田靖雄 (1993a) 「説明 (その 3) —はずだ—」『ことばの科学 6』むぎ書房、pp. 179-211
- 奥田靖雄 (1993b) 「動詞の終止形 (その 2)」『教育国語』2・9、pp. 44-53
- 奥田靖雄 (1993c) 「動詞の終止形 (その 3)」『教育国語』2・12、pp. 27-42
- 奥田靖雄 (1993d) 「動詞の終止形 (その 4)」『教育国語』2・13、pp. 34-40
- 奥田靖雄 (1996) 「文のこと—その分類をめぐって—」『教育国語』2・22、pp. 2-14
- 奥田靖雄 (1997) 「現実・可能・必然 (下) —しななければならない—」『ことばの科学 9』むぎ
書房、pp. 195-261
- 奥田靖雄 (2001) 「説明 (その 4) —話しあいのなかでの「のだ」—」『ことばの科学 10』むぎ
書房、pp. 175-202
- 加藤重弘 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 影山太郎編 (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎編 (2012) 『属性叙述の世界』くろしお出版
- 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- カレル フィアラ『日本語の情報構造と統語構造』ひつじ書房

- 菊地康人 (1994)『敬語』角川書店
- 金水敏 (2006)「「～でいる」について」『日本語文法の新地平 1』くろしお出版、pp. 143-156
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 工藤真由美 (1998)「非動詞的述語のテンス」『国文学 解釈と鑑賞』63-1、pp. 66-81
- 工藤真由美 (2000)「否定の表現」『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店、pp. 93-150
- 工藤真由美 (2001)「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」『月刊言語』30-13、pp. 40-47
- 工藤真由美 (2002a)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法』2-2、pp. 46-61
- 工藤真由美 (2002b)「日本語の文の成分」『現代日本語講座 5 文法』明治書院、pp. 101-119
- 工藤真由美 (2004)「現代語のテンス・アスペクト」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店、pp. 172-192
- 工藤真由美 (2012)「時間的限定性という観点が提起するもの」『属性叙述の世界』くろしお出版、pp. 143-176
- 工藤真由美 (2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 言語学研究会 (1997)「『ことばの科学』第 8 集の発行にあたって」『ことばの科学 8』むぎ書房、pp. 4-13
- 黄允實 (2017)「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文—主語名詞の表す事物の「特性」の恒常性と一時性—『東京外国語大学日本研究教育年報』21、pp. 1-18
- 国立国語研究所編 (2004)『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
- 古座暁子 (1984)「たずねる文」『教育国語』79、pp. 2-13
- 古座暁子 (1987)「本来のたずねる文」『教育国語』91、pp. 38-47
- 古座暁子 (1989)「～か、～のか—会話文における場合—」『教育国語』97、pp. 23-33
- 佐久間鼎 (1940)『現代日本語法の研究』(厚生閣)
- 佐久間鼎 (1941)『日本語の特質』育英書院
- 佐藤里美 (1992)「依頼文—してくれ、してください—」『ことばの科学 5』むぎ書房、pp. 109-174
- 佐藤里美 (1997)「名詞述語文の意味的なタイプ—主語が人名詞のばあい—」『ことばの科学 8』むぎ書房、pp. 151-212
- 佐藤里美 (1999)「文の対象的な内容をめぐって」『ことばの科学 9』むぎ書房、pp. 87-97
- 佐藤里美 (2001a)「テキストにおける名詞述語文の機能—小説の地の文における質・特性表現と『説明』—」『ことばの科学 10』むぎ書房、pp. 67-116
- 佐藤里美 (2001b)「説明的なむすびつき」『教育国語』4・2、pp. 28-45
- 佐藤里美 (2006)「名詞句述語「N＋人だ」の構造」『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要』12、pp. 125-149
- 佐藤里美 (2009)「名詞述語文のテンポラリティー」『ことばの科学 12』むぎ書房、pp. 139-181

- 佐藤里美 (2010) 「述語のひろがり—合成述語を中心に」『国文学 解釈と鑑賞』75-7、pp. 50-59
- 澤田浩子 (2010) 「「彼は親切な性格だ」と「彼は性格が親切だ」—中国語から日本語を考える」『日本語教育研究への招待』くろしお出版、pp. 251-270
- 島村礼子 (2014) 『語と句と名付け機能—英語の「形容詞＋名詞」型を中心に—』開拓社
- 周彤 (2016) 「AN 構造の意味類型及び成立条件」『対照言語学研究』25、pp. 49-58
- 新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」『国語学』159、pp. 88-75
- 新屋映子 (2009) 「形容詞述語と名詞述語—その近くて遠い関係—」『国文学 解釈と鑑賞』74-7、pp. 30-40
- 新屋映子 (2010) 「主体尊敬述語形式「お〜だ」をめぐって」『日中言語研究と日本語教育』3、pp. 33-43
- 新屋映子 (2014) 『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木重幸 (1992) 「主語論をめぐって」『ことばの科学 5』むぎ書房、pp. 73-108
- 鈴木重幸 (1996) 『形態論・序説』ひつじ書房
- 鈴木康之 (1978) 「ノ格の名詞と名詞のくみあわせ (1)」『教育国語』55、pp. 12-24
- 鈴木康之 (1979) 「ノ格の名詞と名詞のくみあわせ (2)」『教育国語』56、pp. 66-84
- 鈴木康之 (1979) 「ノ格の名詞と名詞のくみあわせ (3)」『教育国語』58、pp. 83-97
- 鈴木康之 (1979) 「ノ格の名詞と名詞のくみあわせ (4)」『教育国語』59、pp. 67-81
- 鈴木康之 (1979) 「規定語と他の文の成分との移行関係—文の成分としての規定語の研究のために—」『言語の研究』むぎ書房、pp. 315-347
- 須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房
- 高橋太郎 (1967) 「言語の表現機能と伝達効果の研究」『昭和 41 年度国立国語研究所年報』18、pp. 106-119
- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103、pp. 1-17
- 高橋太郎 (1979) 「主語と述語の意味的な関係をめぐる諸問題にかかわる用例集」『群女国文』8、pp. 1-47
- 高橋太郎 (1984) 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』3-12、pp. 18-39
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 陳常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6-10、pp. 93-109
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集—』ひつじ書房、pp. 139-161
- 角田太作 (2011) 「人魚構文: 日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1、pp. 53-75

- 角田太作 (2012) 「形容詞節と体言締め文化: 名詞の文法化 人魚構文と名詞の文法化」『国語研プロジェクトレビュー』7、pp. 3-11
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村論文集Ⅰ—日本語文法編—』くろしお出版
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 西山祐司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
- 西山祐司 (2007) 「名詞句の意味機能について」『日本語文法』7-2、pp. 3-19
- 西山祐司編 (2013) 『名詞句の世界: その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房
- 丹羽哲也 (2008) 「動詞の敬語形「お/ご〜だ」のテンス・アスペクト」『文学史研究』48、pp. 67-76
- 丹羽哲也 (2017) 「「文末名詞文」の位置づけと所属語彙」『日本語の多様な表現性を支える複合辞などの「形式語」に関する総合研究』(平成26~28年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(B)研究成果報告書)、pp. 143-156
- 丹羽哲也 (2018) 「性質・状態・動作を表す名詞述語文の「連体型」と「単独・連用型」—「文末名詞文」の解消—」『形式語研究の現在』和泉書院、pp. 255-278
- 野村剛史 (2014) 「名詞述語文の分類」『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』21、pp. 69-82
- 畢曉燕 (2010) 「感情形容詞による連体修飾に関して—感情形容詞と名詞の意味的關係を中心に—」『日中言語研究と日本語教育』3、pp. 67-77
- 樋口文彦 (1989) 「評価的な文」『ことばの科学 3』むぎ書房、pp. 181-192
- 樋口文彦 (1992) 「勧誘文—しょう、しまししょう—」『ことばの科学 5』むぎ書房、pp. 175-186
- 樋口文彦 (1994) 「使用における形容詞の《義務性/偶発性》」『教育国語』2-14、pp. 28-35
- 樋口文彦 (1996) 「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞—」『ことばの科学 7』むぎ書房、pp. 39-60
- 樋口文彦 (2001) 「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学 10』むぎ書房、pp. 43-66
- 福田嘉一郎・建始実編 (2016) 『名詞類の文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」『主題の対照』くろしお出版、pp. 3-17
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」『叙述類型論』くろしお出版、pp. 3-18
- 益岡隆志編 (2008) 『叙述類型論』くろしお出版
- 益岡隆志 (2012) 「属性叙述と主題標識—日本語からのアプローチ」『属性叙述の世界』くろし

お出版、pp. 91-109

- 益岡隆志 (2016)「叙述の類型と名詞文の構造」『名詞類の文法』くろしお出版、pp. 215-232
- まつもとひろたけ (1978)「あわせ述語の記述をめぐって」『語文論叢』6、pp. 1-12
- 三上章 (1953)『現代語法序説』刀江書院 (1972 年くろしお出版より復刊)
- 三上章 (1955)『現代語法新説』刀江書院 (1972 年くろしお出版より復刊)
- 三上章 (1959)『続現代語法序説 主語廃止論』(1972 年くろしお出版より復刊)
- 三上章 (1963)『日本語の構文』くろしお出版
- 三上章 (1975)『三上章論文集』くろしお出版
- 光信仁美 (2014)「名詞述語文における形容詞と名詞一形容詞による連体修飾のありかたをめぐって一」『関西外国語大学研究論集』100、pp. 237-255
- 宮崎和人 (2002)「認識のモダリティ」『モダリティ』くろしお出版、pp. 121-171
- 宮崎和人 (2007)「〈まちのぞみ〉と〈発動〉の間」『岡山大学文学部紀要』48、pp. 77-89
- 宮崎和人 (2009)「談話における意志の形成」『岡山大学文学部紀要』52、pp. 113-126
- 宮崎和人 (2014)「認識的モダリティの研究をめぐって」『岡山大学文学部プロジェクト研究報告書 22「言語とコミュニケーション」』pp. 79-105
- 宮崎和人 (2015)「構文論研究としての「おしはかり」」『「奥田靖雄著作集出版記念 国際シンポジウム」予稿集』pp. 47-55
- 宮島達夫 (1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 宮島達夫 (1995)「形容詞の名詞かざり」『現代日本語研究』2、pp. 1-38
- 村上三寿 (1993)「命令文—しろ、しなさい—」『ことばの科学 6』むぎ書房、pp. 67-115
- 村木新次郎 (1998)「名詞と形容詞の境界」『月刊言語』27-3、pp. 44-49
- 村木新次郎 (2002)「第三形容詞とその形態論」佐藤喜代治編『国語論究』10、明治書院、pp. 211-237
- 村木新次郎 (2012)『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 孟令禕 (2017)「運動名詞述語文のモーダルな意味について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』44、pp. 137-156
- 孟令禕 (2018)「形容詞と名詞述語のくみあわせについて—主語が人である場合—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』45、pp. 175-195
- 孟令禕 (2019)「形容詞の規定語をとる名詞述語文のテキスト的機能について—「形容詞+人だ」の場合—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』47、pp. 113-133
- 八亀裕美 (2004)「述語になる品詞の連続性—動詞・形容詞・名詞—」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を超えて—』ひつじ書房、pp. 78-119
- 八亀裕美 (2008)『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院
- 八亀裕美 (2012)「評価を絞り込む表現形式」『属性叙述の世界』くろしお出版、pp. 69-89
- 八亀裕美 (2016)「副詞的に機能する形容詞: 明るい声で叫んだ」『甲南大学紀要 文学編』166号、pp. 29-37

- ゆもと　しょうなん（1977）「あわせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大学論集』27、
pp. 31-46
- Benveniste, Émile. 1966 *Problèmes de linguistique Générale*, Editions Gallimard. 岸本通夫監訳 1983
『一般言語学の諸問題』みすず書房
- Dixon, R.M.W. 1977 Where have all adjectives gone?, *Studies of Language* 1, pp. 19-80
- Dixon, R.M.W. 1991 *A new approach to English Grammar: On semantic principles*, Clarendon press
- Givon, Talmy 2001 *Syntax I 2nd.ed., An Introduction*, John Benjamins
- Tompson, Sandra A. 1988 A Discourse Approach to the Cross-Linguistic Category ‘Adjective’, in John A.
Hawkins (ed.) *Explaining Language Universal*, pp. 167-185, Basil Blackwell